

福岡市

わき やま
脇 山 IV

—県営圃場整備事業に伴う脇山A遺跡5次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第312集

1992

福岡市教育委員会

脇山IV (福岡市報告書312集) 正誤表

頁	行	誤	正
例言	19	吉留秀俊	吉留秀敏
29	28	(309)	(308)
	29	(310)	(309)
	30	(311)	(310)
		(312)	(311)
34	20	床土を除去した。	床土を除去した、
69	8	貝殻条痕	貝殻条痕
71	2	X線回折	X線回折
	9	X線回折	X線回折
72	2	X線回折	X線回折
	4	X線回折装置	X線回折装置
	12	X線回折	X線回折
Tab. 2		蛍光分析	蛍光分析

・Fig. 2中、遺跡群の範囲、調査地点の位置が抜けている。平成3年度発行の脇山II、5年度発行予定の脇山Vを参照されたい。

・付図では、A地点と、C地点が、それぞれの小区で上下に約11cm程度ずれている。(Fig. 3参照)

・Fig. 11に、標高が抜けている。

わき
脇山 IV

—県営圃場整備事業に伴う脇山A遺跡5次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第312集



遺跡号 WK A-5

遺跡調査番号 9015

1992

福岡市教育委員会

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して位置する福岡市には、豊かな自然と歴史的遺産が残されてきました。それらを保護し後世に伝えていくことは、云うまでもなく私共の務めであります。しかし、近年の福岡市のいちじるしい都市化により、それらが失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では、これらの開発にともないやむを得ず失われていく遺跡について、事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めております。

本書は、昭和61年度から実施されている早良区脇山地区の県営圃場整備事業に伴う発掘調査のうち、平成2年度に調査した脇山A遺跡の成果を報告するものです。調査では、縄文時代から江戸時代にいたる数多くの遺構と遺物を発見しました。この結果、脇山地区の歴史の一部、および他地域との交流についての問題も明らかになりつつあります。

本書が埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くの方々のご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成4年1月13日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は脇山地区県営圃場整備に伴い、福岡市教育委員会が1990年5月から12月にかけて発掘調査を実施した脇山A遺跡第5次調査の報告書である。
2. 本書使用の遺構実測図は、小林義彦、小畠弘巳、長家伸、池田祐司、黒田和生、英豪之、辻節子、平川史子、山田ヤス子による。
3. 本書使用の遺物実測図は、池田、榎本義嗣、長家、黒田、井上蘭子による。
4. 本書使用の写真は遺構を小林、小畠、池田が、遺物を池田が撮影した。気球写真は(有)空中写真企画による。
5. 本書使用の図面の製図は、松尾秋代、入江のり子、池田、榎本、英による。
6. 本書作製にあたっては、芦馬友子、有馬千恵美、亀井律子、松尾秋代、松尾真澄、樋口久子の協力を得た。
7. 本書使用の方位は磁北である。
8. 遺構の表記はSB-据立柱建物、SC-住居跡、SK-土壙、SX-焼土壙とした。番号は全地点の通し番号である。
9. 出土土器の赤色顔料について、福岡市埋蔵文化財センターの本田光子氏、宮内庁正倉院事務所の成瀬正和氏に分析を依頼し、分析結果についての玉稿をいただいた。
10. 本文の執筆は、Iを濱石哲也が、遺物の一部を榎本が、他を各担当者の意見をもとに池田が執筆した。
11. 本書の編集は浜石の協力を得て池田が行った。
12. 本書作製にあたって、吉留秀俊、堺畠光博の両氏には数々の御教示を頂いた。記して感謝いたします。

本文目次

Iはじめに	
1.調査に至る経緯	1
2.調査の組織	1
II立地と環境	3
III調査の記録	
1.調査の概要	5
2.A地点の調査	
(1) A地点の概要	7
(2) 縄文時代の遺構と遺物	7
(3) 縄文時代の包含層と遺物	17
(4) 古墳時代以降の遺構と遺物	30
3.B地点の調査	34
4.C地点の調査	
(1) C地点の概要	34
(2) 縄文時代の遺構と遺物	35
(3) 縄文時代の包含層の調査	36
(4) 古墳時代の遺構と遺物	40
(5) 中世の遺構と遺物	43
5.D地点の調査	49
6.E地点の調査	52
7.F地点の調査	53
8.H地点の調査	59
9.I地点の調査	60
10.J地点の調査	62
IVおわりに	69
付論 土器の赤色塗彩に用いられた赤色顔料について	71

挿図目次

Fig. 1 周辺の遺跡 (1/75000)	2
Fig. 2 周辺遺跡分布図 (1/12500)	4

Fig. 3	調査区位置図 (1/3000)	6
Fig. 4	A 地点縄文時代遺構実測図(1) (1/40)	9
Fig. 5	A 地点縄文時代遺構実測図(2) (1/60・1/30・1/20)	11
Fig. 6	A 地点縄文時代遺物実測図(1) (1/3)	12
Fig. 7	A 地点縄文時代遺物実測図(2) (1/3)	13
Fig. 8	A 地点縄文時代遺物実測図(3) (1/3)	14
Fig. 9	A 地点縄文時代遺物実測図(4) (1/3)	15
Fig. 10	A 地点縄文時代遺物実測図(5) (1/3)	16
Fig. 11	A 地点12区第1グリッド遺物出土状況 (1/30)	18
Fig. 12	A 地点縄文時代遺物実測図(6) (1/3)	19
Fig. 13	A 地点縄文時代遺物実測図(7) (1/3)	20
Fig. 14	A 地点縄文時代遺物実測図(8) (1/3)	21
Fig. 15	A 地点縄文時代遺物実測図(9) (1/3)	22
Fig. 16	A 地点縄文時代遺物実測図(10) (1/3)	23
Fig. 17	A 地点縄文時代遺物実測図(11) (1/3)	24
Fig. 18	A 地点縄文時代遺物実測図(12) (1/3)	25
Fig. 19	A 地点縄文時代遺物実測図(13) (2/3・1/1)	26
Fig. 20	A 地点縄文時代遺物実測図(14) (1/6・1/4・1/3)	27
Fig. 21	A 地点古墳時代遺構・SK226遺構遺物実測図 (1/20・1/30・1/10)	30
Fig. 22	A 地点焼土壙出土・古墳時代遺物実測図 (1/3・1/4)	31
Fig. 23	A 地点 SK267・焼土壙実測図 (1/40・1/60)	32
Fig. 24	B 地点縄文時代遺物実測図 (1/3)	34
Fig. 25	C 地点縄文時代遺構実測図 (1/40)	35
Fig. 26	C 地点 SK007遺構・遺物実測図 (1/10・1/4)	36
Fig. 27	C 地点縄文時代遺物実測図(1) (1/3)	37
Fig. 28	C 地点縄文時代遺物実測図(2) (1/3)	38
Fig. 29	C 地点縄文時代遺物実測図(3) (2/3・1/1)	39
Fig. 30	C 地点 SC610実測図 (1/60・1/40)	41
Fig. 31	C 地点 SC610出土遺物実測図 (1/4)	42
Fig. 32	C 地点掘立柱建物位置図 (1/300)	44
Fig. 33	C 地点掘立柱建物実測図(1) (1/100)	45
Fig. 34	C 地点掘立柱建物実測図(2) (1/100)	46
Fig. 35	C 地点中世遺構実測図 (1/40)	47

Fig.36	C地点中世遺物実測図(1/4)	48
Fig.37	D地点遺構実測図(1/40)	49
Fig.38	D地点遺構配置図(1/400)	50
Fig.39	D地点遺物実測図(1/3)	51
Fig.40	E地点遺構配置図(1/400)	52
Fig.41	E地点遺構実測図(1/40)	53
Fig.42	F地点遺構配置図(1/400)	54
Fig.43	F地点SB097実測図(1/100)	55
Fig.44	F地点土壤・焼土層実測図(1/40)	56
Fig.45	F地点縄文土器実測図(1)(1/3)	57
Fig.46	F地点縄文土器実測図(2)(1/3)	58
Fig.47	H地点遺物実測図(1/3)	59
Fig.48	I地点遺構配置図(1/400)	60
Fig.49	I地点遺構実測図(1/40)	61
Fig.50	I地点遺物実測図(1/3)	62
Fig.51	J地点SK901実測図(1/20)	63
Fig.52	J地点SK901遺物実測図(1/4)	63
Fig.53	J地点焼土層実測図(1/40)	64
Fig.54	J地点遺物実測図(1)(1/3)	65
Fig.55	J地点遺物実測図(2)(1/3)	66
Fig.56	J地点遺物実測図(3)(1/1・1/3)	67
付図	A・B・C・H・J地点遺構配置図	

図 版 目 次

PL. 1	(1) A地点全景(北から)	(2) C地点全景(北から)	
PL. 2	(1) D地点全景(北から)	(2) E地点全景(北から)	
PL. 3	(1) F・G・H地点全景(北から)	(2) H地点全景(東から)	
PL. 4	(1) I地点全景(北西から)	(2) J地点全景(西から)	
PL. 5	(1) SK161(西から)	(2) SK169(西から)	(3) SK169(西から)
	(4) SK259(西から)	(5) SK390(西から)	(6) SK390(北東から)
PL. 6	(1) SK342(北西から)	(2) SK223(南から)	(3) SK238(南から)
	(4) SK460(北西から)	(5) SK461(北西から)	(6) SK482(北西から)

- PL. 7 (1) A-12地点第1グリット（東から）
 (2) A-3地点縄文包含層 (3) SK161（西から） (4) SK273（東から）
 (5) SK326（東から） (6) SK451（西から）
- PL. 8 (1) SK226（南から） (2) SX151（南から） (3) SX314（南東から）
 (4) SX343（南から） (5) B地点縄文包含層 (6) SK001（南西から）
- PL. 9 (1) SK007（北から） (2) SK613（東から） (3) SK614（南から）
 (4) SK614土層 (5) C地点縄文包含層（南から） (6) SC610（東から）
- PL. 10 (1) C地点掘立柱建物（北西から）
 (2) SB004・005（南から） (3) SB008（南から） (4) SB616（北から）
 (5) SB617（南から） (6) SB618（北から）
- PL. 11 (1) SK615（南東から） (2) SX010（西から） (3) SX604（南東から）
 (4) SX606（南から） (5) SX030（西から） (6) F5地点縄文包含層
- PL. 12 (1) SB097（北から） (2) SX096（北から） (3) SX805（南から）
 (4) SX805東壁 (5) SX810（東から） (6) SK901（西から）
- PL. 13 A地点出土土器
- PL. 14 A地点出土土器
- PL. 15 (1) C地点出土土器 (2) 土製品 D地点出土土器
- PL. 16 (1) F・I地点出土土器 (2) 磨製石器
- PL. 17 J地点出土土器
- PL. 18 A地点出土石器
- PL. 19 C・D・E・I・J地点出土石器
- PL. 20 古墳時代・中世の遺物

表 目 次

Tab. 1	脇山岡場整備事業地内発掘調査年次別一覧	1
Tab. 2	赤色顔料の分析結果	72
Tab. 3	遺構一覧	73
Tab. 4	掲載遺物一覧	74

I はじめに

1. 調査に至る経緯

福岡市早良区大字脇山一帯の圃場整備事業が計画され、福岡市教育委員会埋蔵文化財課（当時文化課）に事業地内の埋蔵文化財の有無についての照会があったのは1984年（昭和59年）であった。翌年には、面積82.9haの事業地を対象に、1986年度から8ヶ年度にわたり圃場整備が施行されることが決定した。

埋蔵文化財課ではこの事業に対応して、当該年度の事業地を試掘調査し、それに基づき遺跡の範囲を確定し、道路・水路などの構造物および削平を受ける田面について発掘調査を行うことにした。初年度の調査は1986年10月から始まり、以後今年度まで6ヶ年にわたり続いている（Tab. 1）。1991年度は5月23日から国庫補助（詳細分布調査）による試掘調査を開始した。これを基に事業者側と調整をはかり、調査対象面積を最小にして本調査に入った。

年度	事業面積	調査対象面積	調査期間	調査遺跡群
1986	4.5ha	5600m ²	1986.10.14～1987.1.14	脇山A（1次）
1987	5.0ha	7150m ²	1987.8.4～12.28	脇山A（2次）
1988	11.4ha	6636m ²	1988.9.26～12.15	脇山A（3次）
1989	14.4ha	144000m ²	1989.7.1～1990.2.28	脇山A（4次）、谷口
1990	14.4ha	18718m ²	1990.5.23～12.28	脇山A（5次）
1991	14.4ha	10904m ²	1991.4.1～10.14	脇山A（6次）、野中、大門

Tab. 1 脇山圃場整備事業地内発掘調査年次別一覧

2. 調査の組織

県営脇山圃場整備事業主体

福岡県農林事務所農地整備部害蟲課 福岡市農林水産局農業振興部農業土木課

福岡市脇山土地改良区

調査主体

福岡市教育委員会文化財部（前文化部）埋蔵文化財課

課長 柳田純孝（兼任） 折尾学

第1係長 飛高憲雄

第2係長 柳沢一男（兼任） 塩屋勝利

庶務 中山昭則

調査担当 濱石哲也 池田祐司 小林義彦 小畑弘巳 長家伸

調査補助 英豪之 黒田和生

なお発掘調査が無事完了できたのは右田吉太氏をはじめとする多数の作業員の方々のご協力のたまものである。深くお礼申し上げたい。また県農林事務所、市農業土木課、改良区の方々には直接的にご指導、ご協力をえた。



Fig. 1 周辺の遺跡 (1/75000)

II. 立地と環境

玄界灘に面する福岡市には、西から糸島、早良、福岡、柏屋の大小平野が、北の博多湾を囲むように広がる。これらの平野は山塊、丘陵によって分断され、各々が独自の自然、歴史環境を備えている。このうち早良平野は、福岡市の西南部にあたり、背振山脈に源を発する室見川が北流する。今回報告する脇山遺跡は、この早良平野の最奥部、椎原川と小笠木川に挟まれた土石流扇状地上に位置する。標高66m～87mを測り、現況は、棚状に広がる水田地帯である。

歴史的にみると、山岳信仰の対象として宗教的権威を有した、背振山東門寺の北麓にあたり平安時代末期以降その山領として知られている。また、耕地開発について、貞觀年間に紀伊国熊野より来た比丘尼が、釣堀、樋井手と呼ばれる堀を掘り、田地澆灌の功をなしたという伝承がある。さらに脇山は、14世紀中頃には、集落として成立しており、15世紀には「産ノ名」に含まれていた事が、文献史料による研究で明らかにされている^{注1}。このように、中世以降の耕地、村落形成史を知る上でも興味深い地域である。

周辺の遺跡の発掘調査は、4次にわたる脇山地区圃場整備に伴う調査^{注2}を中心に、板屋、内野等で数少ないが行われている。旧石器時代では、脇山A遺跡2次調査において細石核が出土しているが、遺構、包含層は確認されていない。縄文時代は、谷口遺跡で押型文、阿高系、磨消繩文土器が出土した他、脇山A遺跡各地点で晩期の遺物が出土している。板屋^{注3}、峯遺跡^{注4}でも少量であるが押型文土器、石錐等の遺物が出土している。この後弥生時代以降の遺物は極端に減少する。弥生時代では、脇山A遺跡2次調査において前期の遺物が、谷口遺跡で後期後半の甕が1点出土したくらいである。古代では、峯遺跡で8世紀の掘立柱建物が、内野原田遺跡^{注5}では9世紀と考えられる製鉄遺構が検出されている。中世になると、遺構、遺物ともに脇山全域で検出される。そのうち、最も広く分布するのが焼土壙で、これまでの調査から炭焼き遺構としての性格が考えられている。また、脇山A遺跡4次調査、峯遺跡では、掘立柱建物、土壙墓等が集中する個所が調査され、中世における、当該地の開発史との関連を窺うことができる。

注)

- 1 吉良国光「背振山の所領支配と村落一筑前早良郡脇山を中心として」『九州史学』特集号 1987
- 2 福岡市教育委員会 1990 「脇山I」
福岡市教育委員会 1991 「脇山II」
- 3 福岡市教育委員会 1987 「板屋・今津遺跡」
- 4 福岡市教育委員会 1989 「峯遺跡」
- 5 圃場整備事業に伴い1990年調査、未報告



Fig. 2 周辺道路分布図 (1/12500)

III 調査の記録

1 調査の概要

平成2年度の脇山圃場整備事業は、脇山小学校の西に広がる扇状地上の14.4haを対象とした。字名では大柴、小ノ原にあたり、その大部分に脇山A遺跡が広がる。

1990年5月、事業対象地中央に道水路が計画されたC-1地点の本調査、および田面の切土と遺構面との関係を確認する試掘調査を同時に開始した。試掘調査では計画された各田面に行きわたるよう短いトレチを重機を用いて74本開けた。その結果、B地点、H地点東側～D-1地点、E地点に谷部を確認し、この部分では遺構を検出できなかった。それ以外の個所では、一部礫層が露出する個所を除くと、表土下5～10cmの黄褐色土の面で焼土壙を中心とする遺構を検出した。また、A、C地点では縄文土器が多数出土し、遺構の存在が予想された。この試掘を元にして田面部分の調査範囲が決定したのは9月になってからで、永久構造物の計画地を先行して調査を進めた。

5月に開始したC地点では、中世の掘立柱建物、埋甕を含む縄文晩期の包含層の検出という成果をあげ、5月のうちに終了した。以降、B地点で縄文晩期の包含層、D地点で焼土壙と押型文土器、E地点で焼土壙、F地点では掘立柱建物、焼土壙、縄文晩期の包含層と構造物部分の調査を進めた。一様に棚田造成時に削平が行われており、特に縄文時代については1つの田面の下側にかろうじて包含層等が残っている程度である。8月の半ばにはA地点の調査に入り、9月には、拡張して田面の調査も開始した。A地点では集石を始めとする縄文晩期の遺構、遺物が多数出土する成果を得た。また焼土壙も集中する。10月半ばにはC地点の田面部分の調査を開始し、掘立柱建物、焼土壙を検出した。中世の小集落を想起させる。また縄文晩期の包含層をも確認し得た。この後、I地点、B-II・III・IV地点、H地点、J地点と調査をすすめ、12月28日、全調査の工程を終えた。

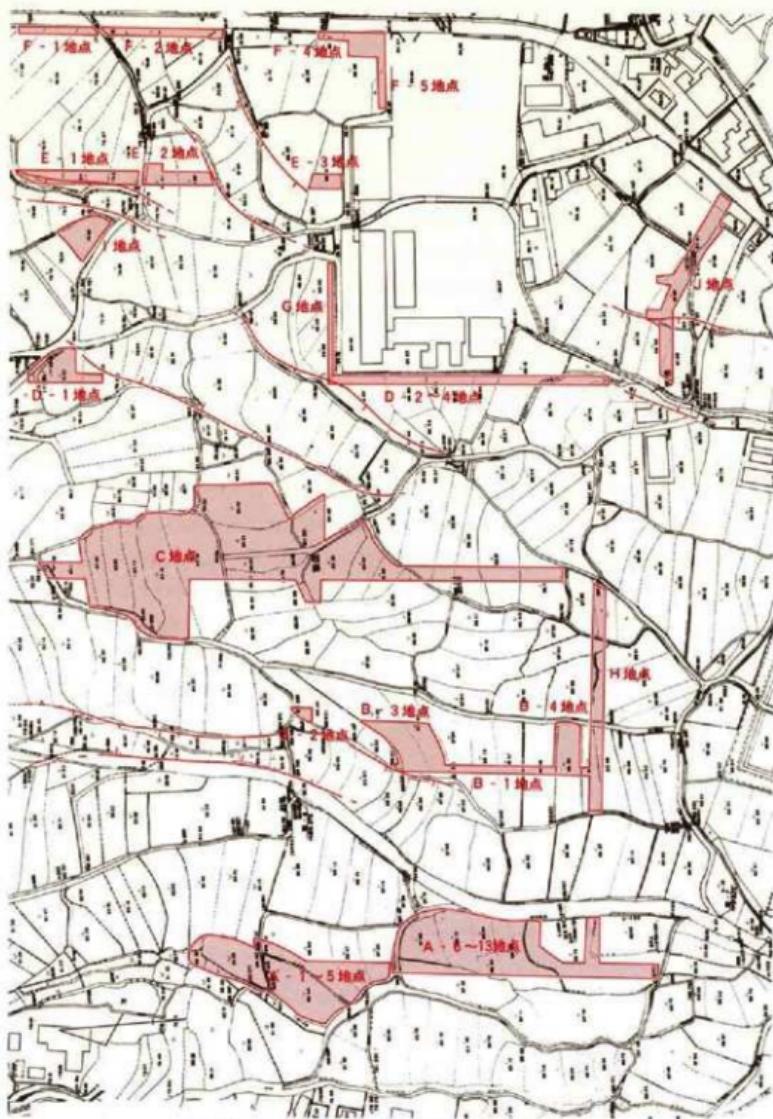
検出した遺構は、縄文時代に属する可能性のあるもの13基、古墳時代の土壙5基、住居跡1軒、掘立柱建物8棟、焼土壙111基とその他の土壙、ピットである。また縄文時代の包含層はA、C、F地点の一部で特に残っていた。焼土壙については、土地開発と結びついた炭焼き遺構の可能性の侧面から注目してきたが、SX170より羽口が出土し、また、掘立柱建物に切られる例を2例確認した。その性格、時期を考える上で好資料である。

以下各調査地点毎に記述をすすめる。G地点については、遺構が検出されなかっただため、本文中ではふれない。

なお1次～4次調査については、その調査区、成果について既に報告が成されているので参考されたい。

福岡市教育委員会 1989 「脇山I」

1990 「脇山II」



2. A 地点の調査

(1) A 地点の概要

A 地点は脇山 A 遺跡の西端に位置する。西側は、椎原川によって開拓された谷が入り、丁度この谷への落ち際にあたる。すぐ西側の田面とは 3 m の比高差があり、現況では石垣が築かれている。道路、用水路が作られる部分および切土で遺構面が削られる 5597 m² の削除を行った。調査区は、現況の棚田形成による削平が著しく、遺構面においても大きな段差が生じている。この段を 1~12 の区とし、遺物を取り上げたが、それをそのまま小調査区として用いていた。ただし、調査順等により不規則なものになっている。

現耕作土、床土の下は、赤みをおびた黄褐色土層（以下黄褐色土層と記述）、淡黄色質土層または砂礫層という層序がみられる。砂礫層に黄褐色土がかぶるよう堆積しており、砂礫層が高まる部分、大きく削平を受けた部分では黄褐色土はみられない。床土を除去した面で縄文時代から中世までの遺構、近現代の水田に伴う溝等を検出した。検出した主な遺構は、縄文時代の可能性の高い土壙 13 基、古墳時代の土壙 5 基、焼土壙 40 基とピットである。さらに、黄褐色土層は縄文土器を含んでおり、遺構検出の際、やや集中して遺物がみられた A 3 区の東端、A 5 区、A 12 区の一部を時間的許す限り掘り下げた。

(2) 縄文時代の遺構と遺物

近現代まで、検出した遺構の多くから縄文土器が出土した。その中で縄文時代の遺構の可能性の高いものについて記載する。

SK161 (Fig. 4・6)

A 2 区中央で検出した長方形の土壙で、横断面 U 字形を呈する。形状が不整形であり自然の掘り込みの可能性もある。埋土は、赤褐色土ブロックを含む黄褐色土を上層、しまりのない灰黄褐色土を下層とする。底は砂質土層を掘り込む。遺構の中央からは、古墳時代後期の完形の甕がその内に小壺を伴い出土した。底より 20 cm 程浮いており、古墳時代の遺物がこの 2 点のみであることから、他の何らかの遺構を検出しきれなかったものと思われる。個数としては縄文時代晩期の遺物が多く出土した。1~6 は粗製の深鉢で貝殻条痕を残す。口縁部が外反し胴部で屈曲するもの（1・6）、口縁部が内湾するもの（2・3）がある。7~11 は精製の浅鉢である。7 は扁平球形の胴部を持ち、胴部内面を丁寧な削り仕上げる。12 は浅鉢の屈曲部である。外面胴部に条痕を残し、研磨調整を一切施さない粗製品である。胎土も粗い。15 は外面をナデ、内面を研磨調整した半精製品で、底部から直接口縁部に開く鉢になると思われる。

SK169 (Fig. 4・6・7・20) 不整形円形の土壙で、遺構検出時に露出していた土器を手懸りに検出した。覆土は地山とほとんど同じで、若干灰色がかり、しまりのない土を追ってプランとした。遺構本来の形状を出しきっていない可能性がある。遺物は比較的多く、18~27、

327が出土した。26・27は胴部最大径部と頸部中央で屈曲する粗製深鉢で、胴部最大径部より上が残存する。どちらも頸部下半を丁寧にナデ上げを施す。この2個体は、内面を上にして、上下互い違いに、丁度頸部屈曲部を重なり合わせて出土した。ただし、口径の小さな27が下になつておらず、完形の状態で、27の中に26が半分入つて埋まっていたとは考え難い。18は外面に削りを残すが焼きが固く薄い。20～23は精製の浅鉢である。24は口縁部が若干内湾し浅い塊状を呈する。もう少し浅い可能性がある。25は研磨調整を施す精製土器である。塊状になると思われるがはっきりしない。1条の断面半円形の突帯を持つ。327は磨製石斧である。

SK218 (Fig. 4) A 2区中央に位置する。平面形は不整長楕円形で、断面U字形を呈す。黄褐色土の面から掘り込みやや渦った、しまりのない黄褐色土を埋土とする。SK161と埋土、形状が類似しており、自然の營力による可能性も否めない。粗製深鉢、精製浅鉢、黒曜石が出土したが、いずれも小片で図示できなかった。

SK223 (Fig. 4・7) A 2区の西隅、台地の落ち際に位置する。黄褐色土層から掘り込み、やや渦った黄褐色土を覆上とし、壁を追ってプランを確認した。隅丸台形を呈する小型の土壌である。遺物は少量だが28のような大きな破片が、床から6cm程浮いた状態で出土した。28は胴部最大径部で緩やかに屈曲し、外反して開口口縁を持つ粗製深鉢である。全面を右から左へ横方向の2枚貝条痕を施し、胴部最大径部より上部をナデ消す。最後に左上がりの削り状の調整を施す。胴部最大径よりやや上には、器壁を削り出すことで成形した段を有する。この段の下3～4cm程は比較的丁寧にナデしている。内面は2枚貝条痕を丁寧にナデ消している。なお、SK460出土の土器片と接合した。

SK238 (Fig. 5・8) A区中央に位置し、水田に伴う溝に切られる。黄褐色土層に、しまりのない灰黄褐色土が堆積する。不整形を呈す窪み状の土壌に、小片であるが土器が多数重なり合って出土した。遺物は2枚貝条痕を施す粗製土器が多いが、小片で図示できるものが少ない。精製品は図示した2点のみである。黒曜石の剝片も少量であるが出土した。29は、胴部最大径部で緩やかに屈曲し、外反する口縁を持つ。II縁-頸部は粗い2枚貝条痕を施し、胴部はナデ調整である。II唇部は面取りし、調整具による刻目を施す。31は器壁が薄くナデ調整を施す。32は精製浅鉢の口縁部で粘土帶接合部で剝がれる。扁平球形の胴部を持つと思われる。リボン状突起を持つ。33は精製の鉢で、浅い塊状の形状で器壁が薄く、口縁部にリボン状突起を持つ。内外面とも細く短い研磨調整を施し、リボン状突起直下に焼成前の穿孔を外側から施している。また、II縁部の湾曲がリボン付近で強くなつており、梢円形を呈す可能性もある。

SK259 (Fig. 4・8) 6区・12区の段に沿って走る溝に切られる。全体の形は不明だが、隅丸の長方形を呈すと思われる。中央に深さ60cm程のピットがある。埋土は灰黄褐色土で黄褐色土層に掘り込む。縄文土器および黒曜石の剝片が出土した。34～37は粗製土器である。34・35は、小型の鉢になると思われる。37は深鉢の胴部で復元胴部径24.8cmを測る。38は3本の沈

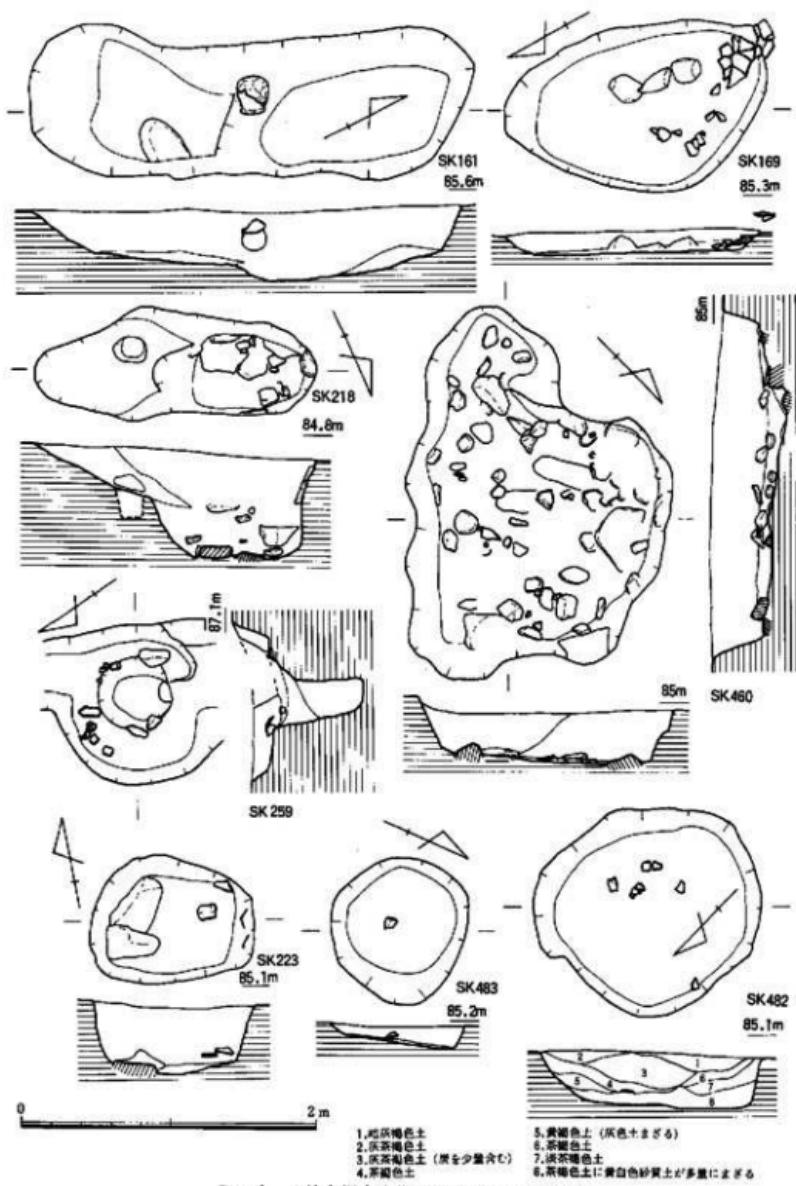


Fig. 4 A 地点縄文時代遺構実測図(1) (1 / 40)

線を持つ塊状を呈す浅鉢である。沈線部にわずかに赤色顔料が残る。39は丁寧に磨かれた精製品で浅鉢であるが、やや深くなるため鉢とした。胴部は内外とも縦方向の研磨である。

SK342 (Fig. 5・8・9) A11区の中央部に位置する。黄褐色土層中に検出した土器を追った結果、上器が集中する状況を検出した。掘り方等は検出できず、明確な遺構としてはとらえ得ない。40は胴部で削りする深鉢で内外面ともに右から左への削りの後、ナデ調整を施す。内面には粘土帯接合痕、指押さえ痕が残る。焼きは固い。46は深鉢の胴部下半だが、径が小さい。外面に斜方向の削り痕がみられる。44は小型の鉢になると思われる。現存部に外反する口縁部がつく。外面には縦方向の内面には横方向の箇ナデ調整を施す。42は塊状を呈す精製品で外面に沈線による文様を刻す。沈線部には赤色顔料がわずかに残る。43は39と同様の器形だが、調整はやや粗い。

SK390 (Fig. 5・9・20) SK342の1m程南東に位置する。黄褐色土層を繩文土器包含層として掘り下げ中、集石を見出し、検出した。南北128cm、東西120cmの円形プランをなす深さ28cmの皿状の掘り方の中に石皿が南側の壁に斜めに倒れかかり、その上に自然礫が不規則に置かれる。遺物は全てこれらの礫の上に位置する。遺構を確認した時点ではやや掘り過ぎた状態である。遺物の状態より、上部から掘り込まれたと考えられ、深さ40cmはあったものと考えられる。埋土は灰黄褐色で若干しまりがない。炭は含まれておらず、礫も熱を受けた形跡はない。遺構の性格は決し難い。集石土壤としておく。遺物は少ないが、扁平球形の胴部を持つ黒色磨研の浅鉢が全体の約1/4の破片で出土している。49は破れ口を上にして出土しており、完形品が置かれていた可能性もある。47は粗製深鉢の頸部で、削り出しの段を持つ。48は研磨調整の口縁部片で、屈曲部を持つ鉢と思われる。322は石皿である。砂岩質の大型の礫を使用し、表面全体に研磨痕をもつ。

SK460 (Fig. 4・9) A2区の西端、台地の落ち際に位置する。不整形を呈す。黄褐色土層を掘り込み、礫層に達する。覆土は灰黄褐色土で、西側角に焼土塊を検出した。遺物の量は少ない。焼土塊付近で小土器片を、床面直上で50、51が出土した。50は深鉢の胴部肩曲部である。外面は右から左への削り調整を少しナデ消す。内面は箇ナデで半滑に仕上がる。粗製と呼ぶには丁寧な調整を施す。51は精製の浅鉢で刃弱が残存する。口縁部に低い隆起帯を1つまたは2つ持つ。内外面の研磨調整は、外面胴が横方向の後縦方向に、内面は横方向を中心一部縦方向に施す。器壁は厚く、胎土も粗い。53は研磨調整を施し、胎上もきめ細かい。胴部で屈曲し浅鉢形になると思われる。

SK461 (Fig. 5・9) SK460の1.5m北東に位置する。平面形は橢円形で、断面逆台形を呈す。中央に人頭大の礫がある。淡灰黄褐色土を覆土とする。55は口縁部を面取りし、ヨコナデ調整を施す。頸部中央に沈線または、作り出しの段がつく。57はわずかに内溝する口縁部を持ち、研磨調整を施す。39のような形態になると思われる。58は短い頸部を持つ浅鉢で、唇部が先細

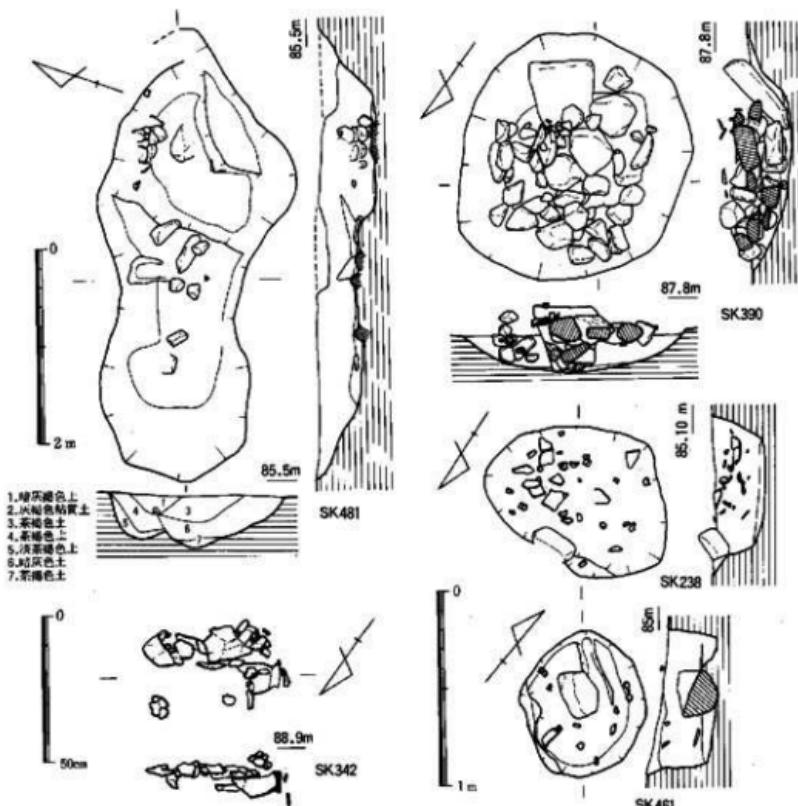


Fig. 5 A地点縄文時代遺構実測図(2) (1/60 - 1/30 - 1/20)

りで内面の段が弱い。

SK481 (Fig. 5・10) SK161の南1mに位置する。東西に長い不整楕円形を呈す。床は東側に低い段をもって下がる。覆土は灰黄褐色土で壁、床には礫が露出する。SK161に似ている。遺物は少なく、小片のみである。59~66は粗製深鉢である。59の内面はナド調整で仕上げるが、粗い1次調整のため凹凸が著しい。62~66は口唇部に刻目を持つ。62は斜方向に刻み目を持つが、小片ではっきりしない。63は口唇部を面取りし、突窓状に粘土を付し、密な刻目を入れる。小片ではっきりしないが、口縁部が弱い波状になる可能性もあり、突窓もこの波状部のみとも考えられる。64~66の口唇部は、刻みというより刺突による小穴が付く。67~70は精製の浅鉢である。68は口縁部が小さく作りが雑である。70も1次調整による段が残る。69は丁寧な研磨

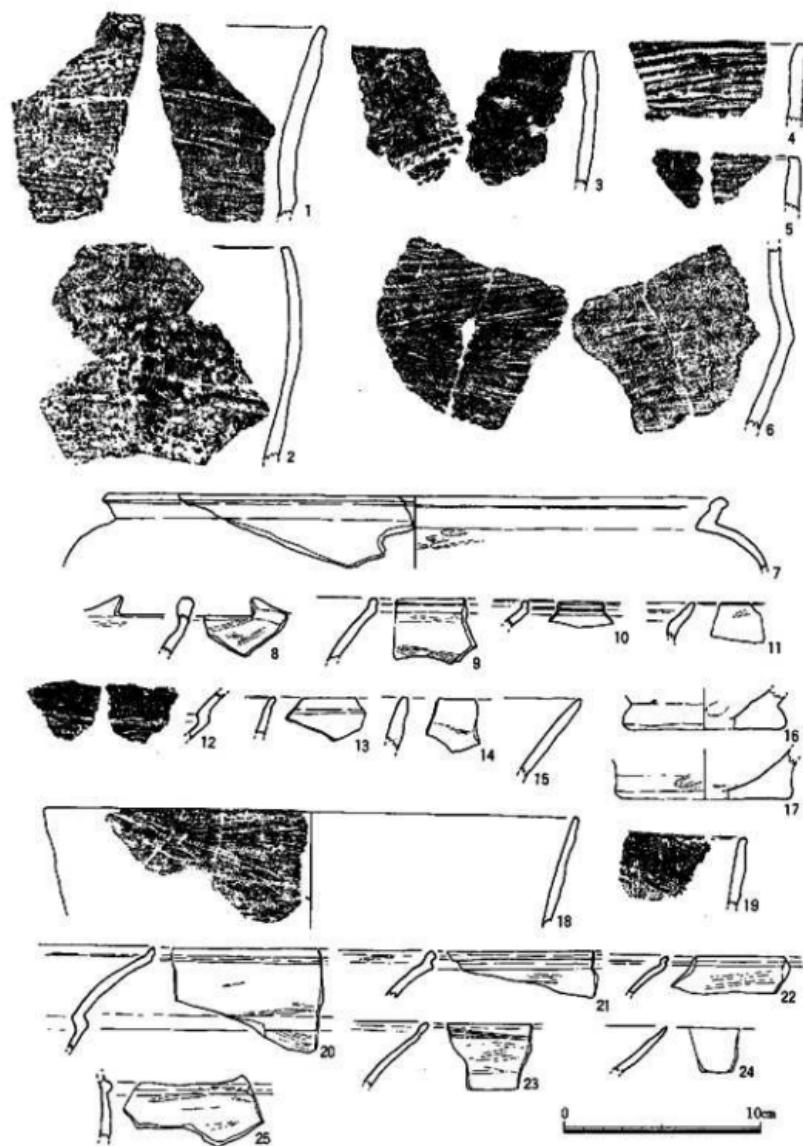


Fig. 6 A地点縄文時代遺物実測図(1) (1 / 3)

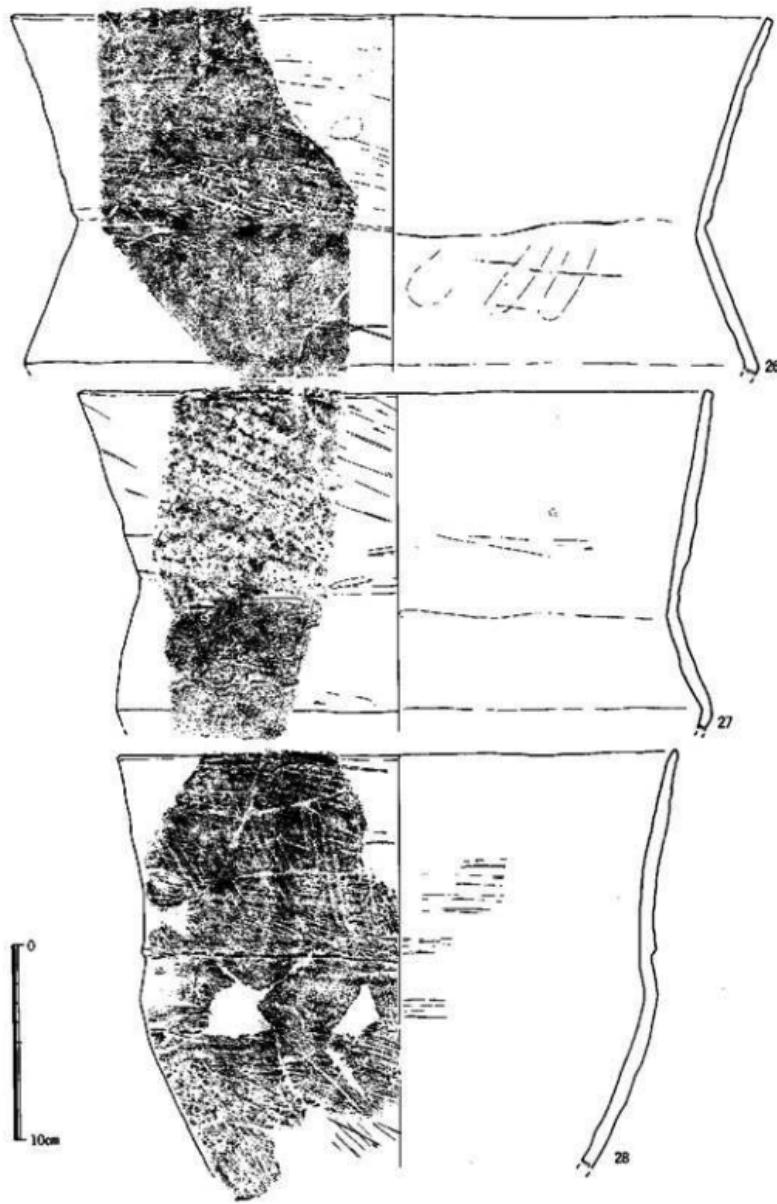


Fig. 7 A地点縄文時代遺物実測図(2) (1 / 3)

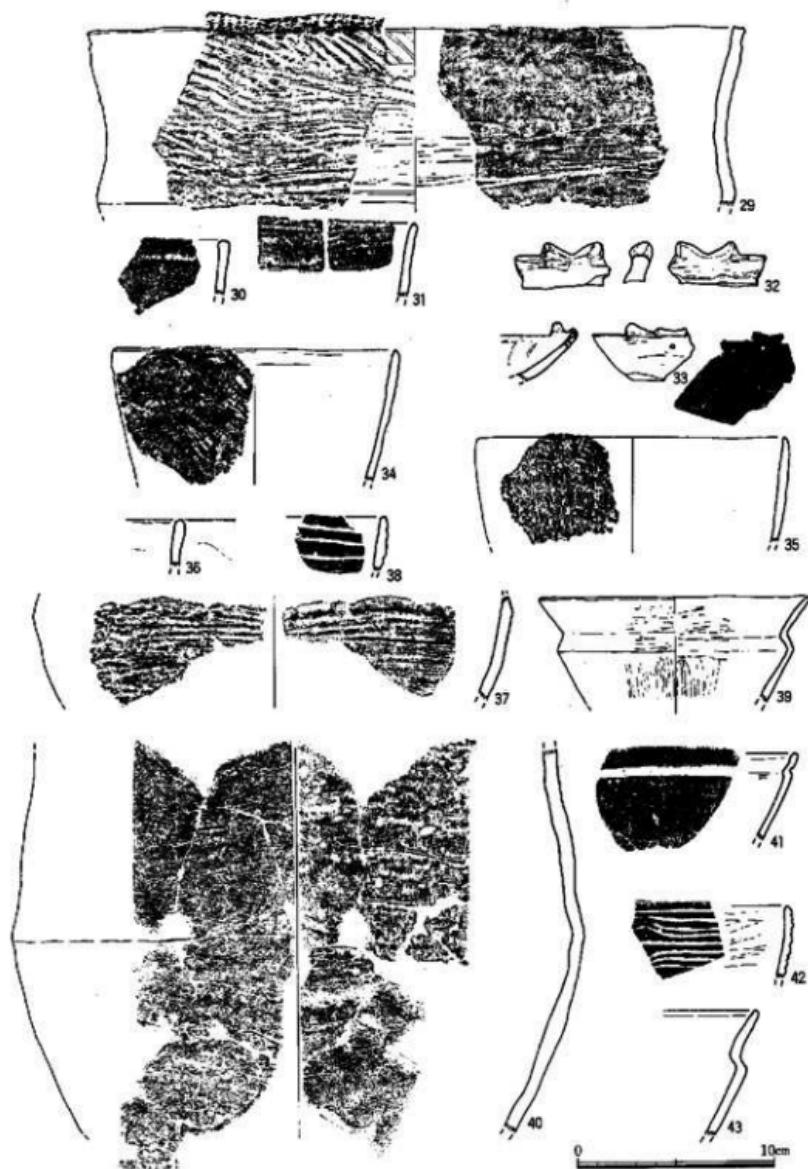


Fig. 8 A地点縄文時代遺物実測図(3) (1 / 3)

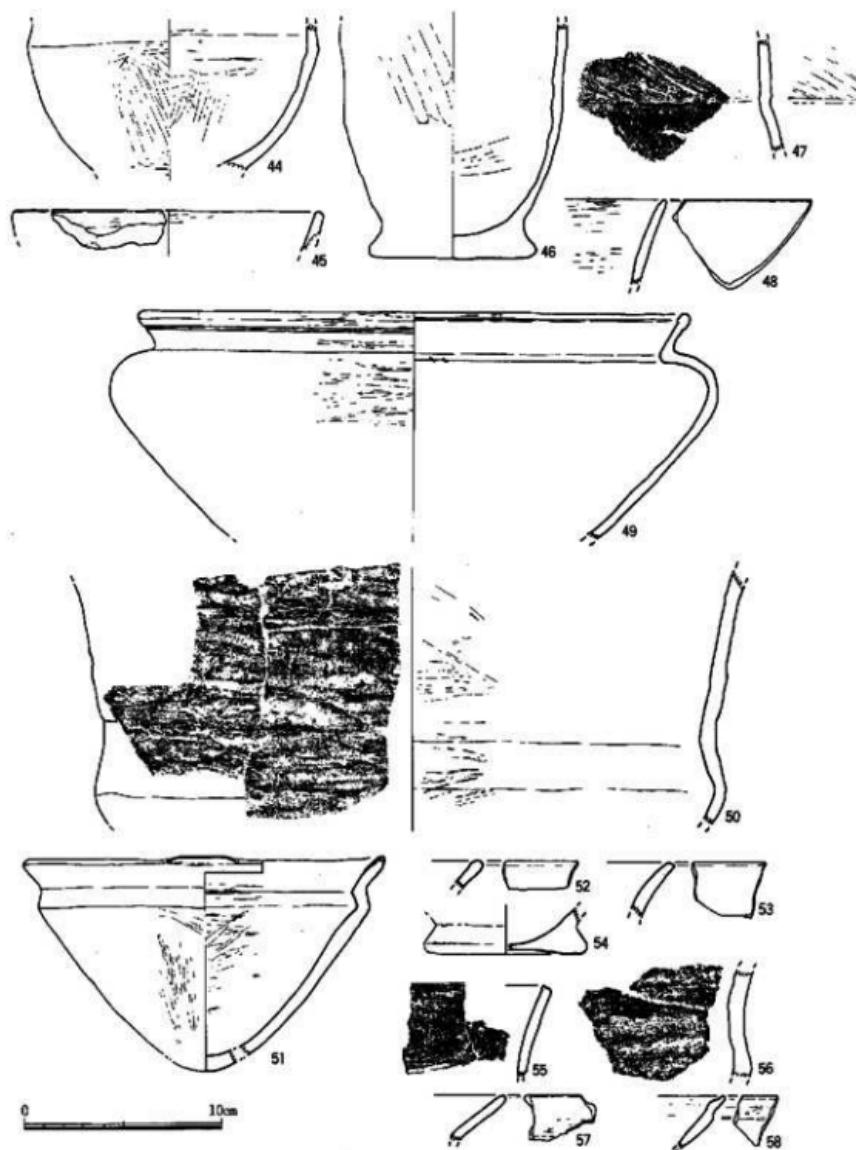


Fig. 9 A地点縄文時代遺物実測図(4) (1 / 3)

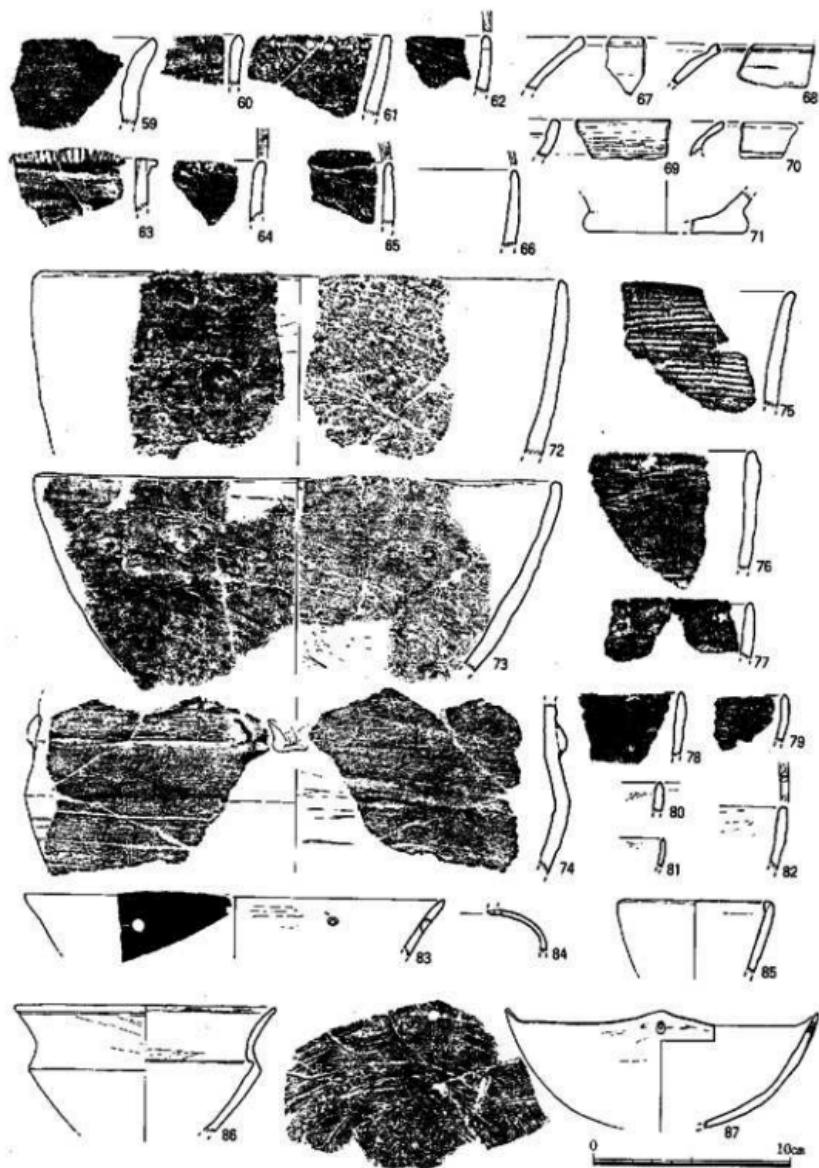


Fig. 10 A 地点縄文時代遺物実測図(5) (1 / 3)

を施し、内湾するに口縁部に段を有す。

SK482 (Fig. 4・10) A 2 区の中央に位置し、SX156、水田に伴う溝に切られる。円形を呈し、黄白色砂質土層上面で検出した。遺物は小片ながら比較的多くの土器と黒曜石の剝片が出土した。75は外反する口縁部を持つ深鉢で、2枚貝による条痕が明瞭に残る。72、73は内湾する鉢で粗い削りを施す。74は胴部最大径部で屈曲し、外反する口縁を持つ深鉢である。外面は削り調整を施した後、頸部下半、特に胴部をナデる。屈曲部よりやや上部に削り出しの段がつく。また、リボン状突起を貼付する。84は扁平球形の胴部を持つ浅鉢で口縁部を欠く。85は小鉢状を呈し、口縁部内面に断面三角形の突起をつくり、平坦な口唇部をつくる。

SK483 (Fig. 4・10) 3区の中央よりやや西に位置し、SX221に切られる。平面形は円形で灰黃褐色土を覆上とする。淡黄白色砂質土層上面まで下がった段階で検出した。中央部、床直上に86が出土した。86は、胴部に若干の砂粒を含むものの精良で、内外面とも横方向の研磨調整を施し、口縁部直下に浅い沈線を描く。頸部の付け根内面は、削り出しを加え鋭く屈曲する。

(3) 繩文時代の包含層と遺物

耕作上、床直下に堆積する黄褐色土層からは、遺構検出時の段階で縄文土器を含む事が判っていた。そのため遺構の調査を終えた後、3区の東側、5区の南半、12区のうち1～6グリッド、計8ヶ所の調査区を設定し、掘り下げを行なった。時間的に余裕がなく、十分に拡張、掘り下げをする事ができなかった。

黄褐色土層は場所によって厚さがまちまちで、厚い所で30cm、浅い所では4～5cmで下層の黄白色砂質土層が露出する所もある。3区は、黄褐色土がやや赤みをおびており、厚い所で30cm程あり、比較的厚い。下部はより黄色が強い。遺物は小片が多く散在する。また、黄褐色土でも遺物が出土するのは上部10cmである。5区では、黄褐色土は黄色が強く、遺物もまばらで少なく、上部5～7cmのみで出土する。若干の中世の遺物もまざり、いずれも上層より沈下した可能性もある。12区では1～6までのグリッドを設定した。1グリッドで遺物が集中する。その他では遺物が少なく散在する。やはり遺物は黄褐色土層上部10cm程である。

包含層の調査では12区の1グリッドで遺物の集中が見られたものの、他では遺物の量も密度も小さい。遺構等の存在の積極的想定もできない。そのため、まず12区1グリッドとその遺物について述べ、他の区の遺物については、他の他の遺物と一緒に記述する。

12区第1グリッド (Fig. 11・12・付図)

12区の西隅に設けた4×4mのグリッドである。2.6×2m前後の間に、95、96のような大きな破片および小破片が集中した。垂直分布は15cm程である。遺構の存在を想定し、検出にあたったが確認できなかった。

88～94は粗製の深鉢または鉢である。88は内湾する口縁を持ち、内面で稜をもって屈曲する。89も同様の器形を持つと思われる。92は外面に条痕調整が残り、口縁部の粘土の折り返しが突

帶状である。93、94は丁寧なナデ、施ナデ調整で仕上げ、深鉢としては精製品である。94は口縁帯を持ち、頸部が反湾する。95～105は精製の浅鉢、鉢である。95は伏せた状態で大きく1つの固まりに分かれて出土した。長く外反する頸部に小さな口縁帯がつく。96～98は短く屈曲する頸部と口縁部内面に小さな段を持つ。100も同様の器形になるが2次調整が粗く、削り痕が残る。102～105は口縁部に沈線を持つ。104・105は深鉢の可能性もある。102は波状口縁を持ち、105と共に沈線内に赤色顔料が若干残る。

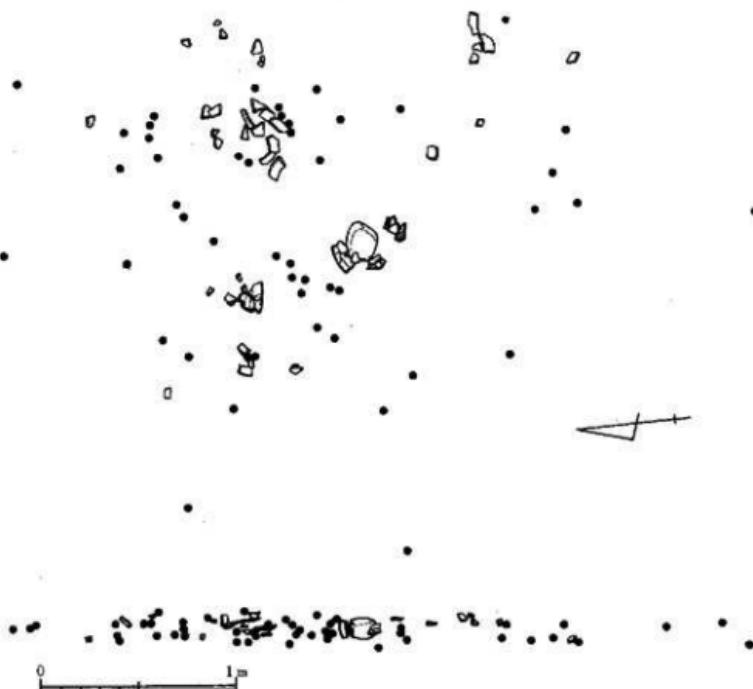


Fig. 11 A地点12区第1グリッド遺物出土状況 (1/30)

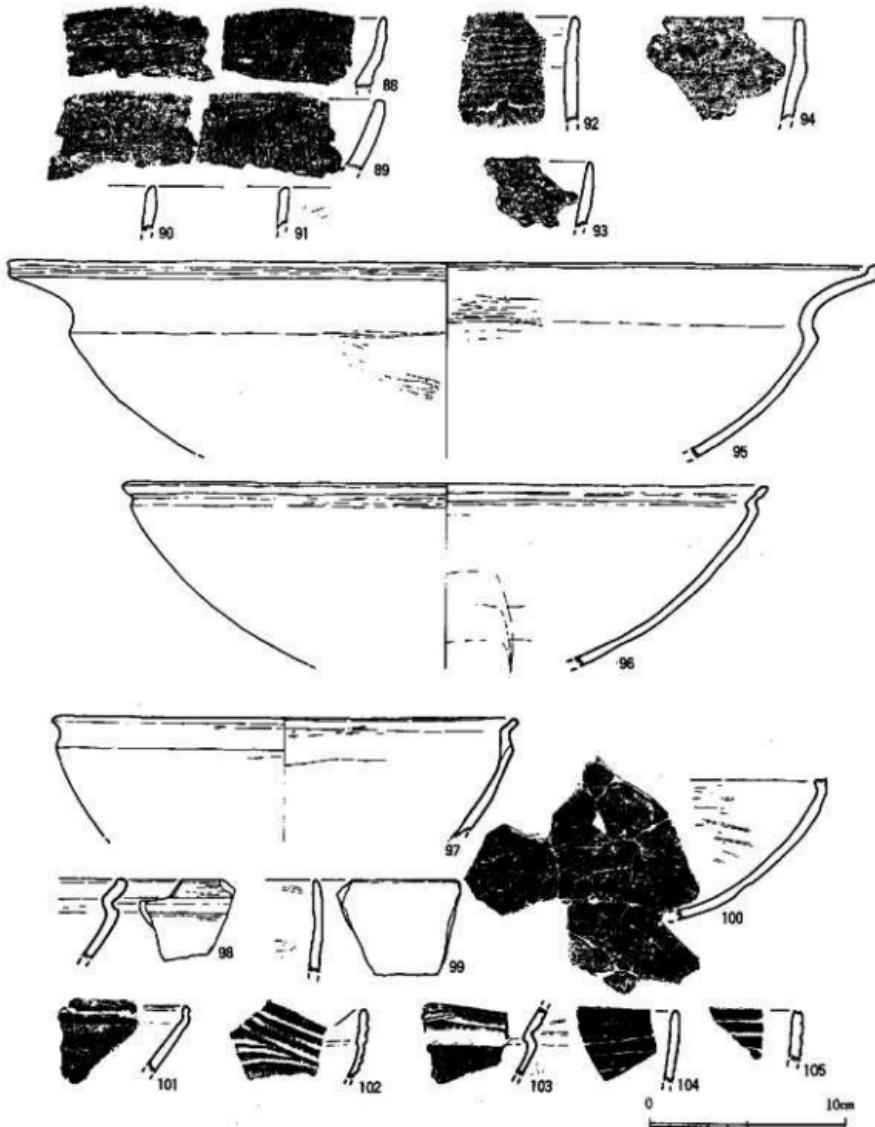


Fig. 12 A 地点縄文時代遺物実測図(6) (1 / 3)

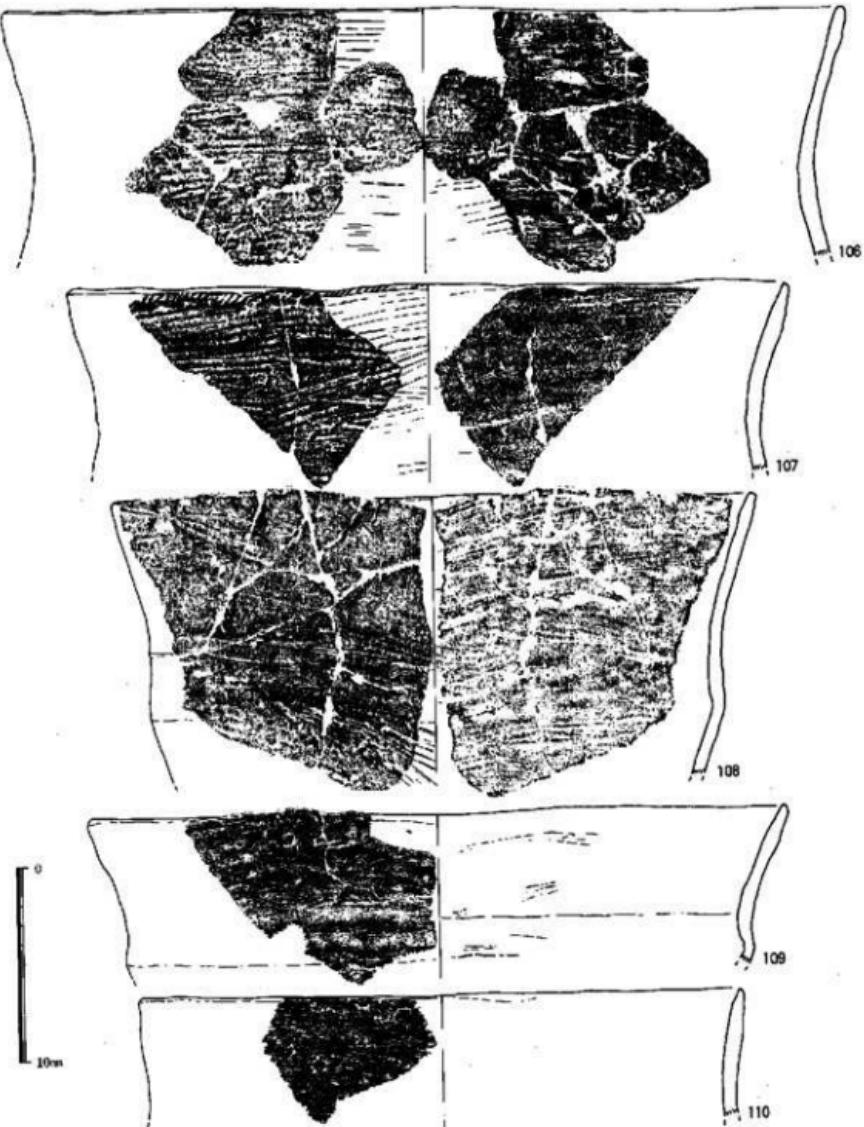


Fig. 13 A地点縄文時代遺物実測図(7) (1 / 3)

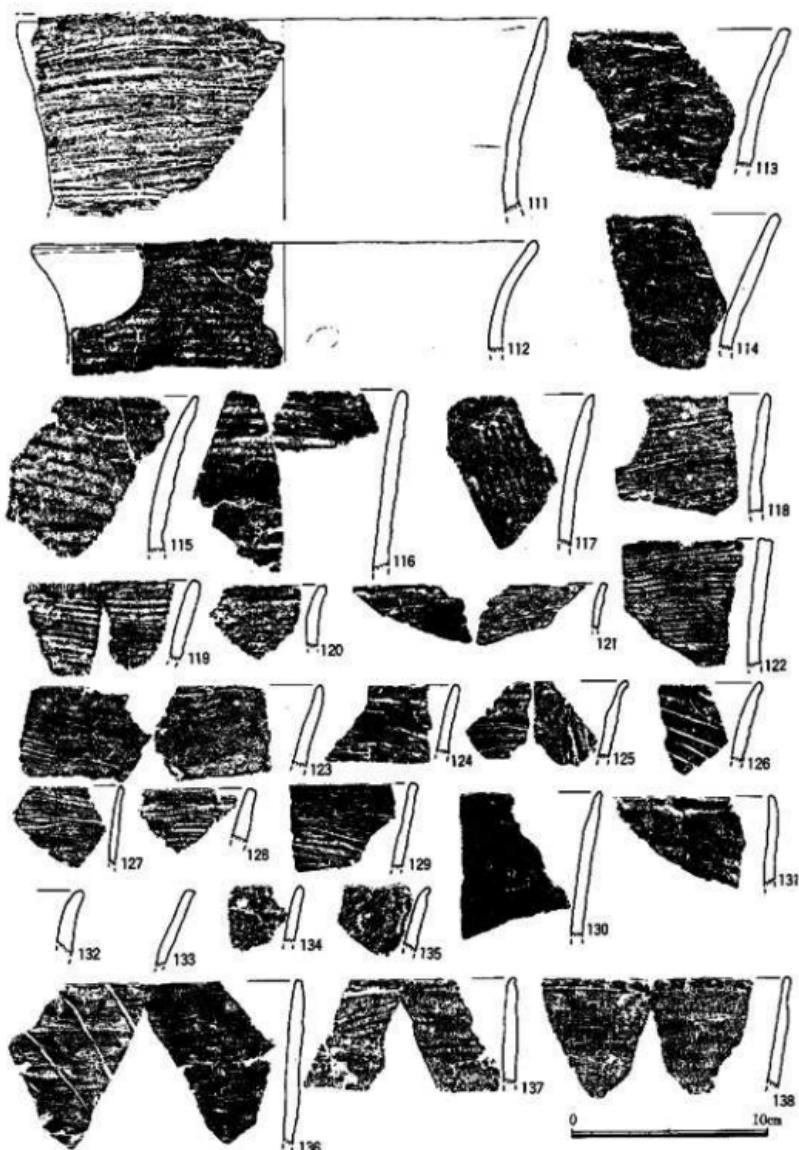


Fig. 14 A地点縄文時代遺物実測図(8) (1 / 3)

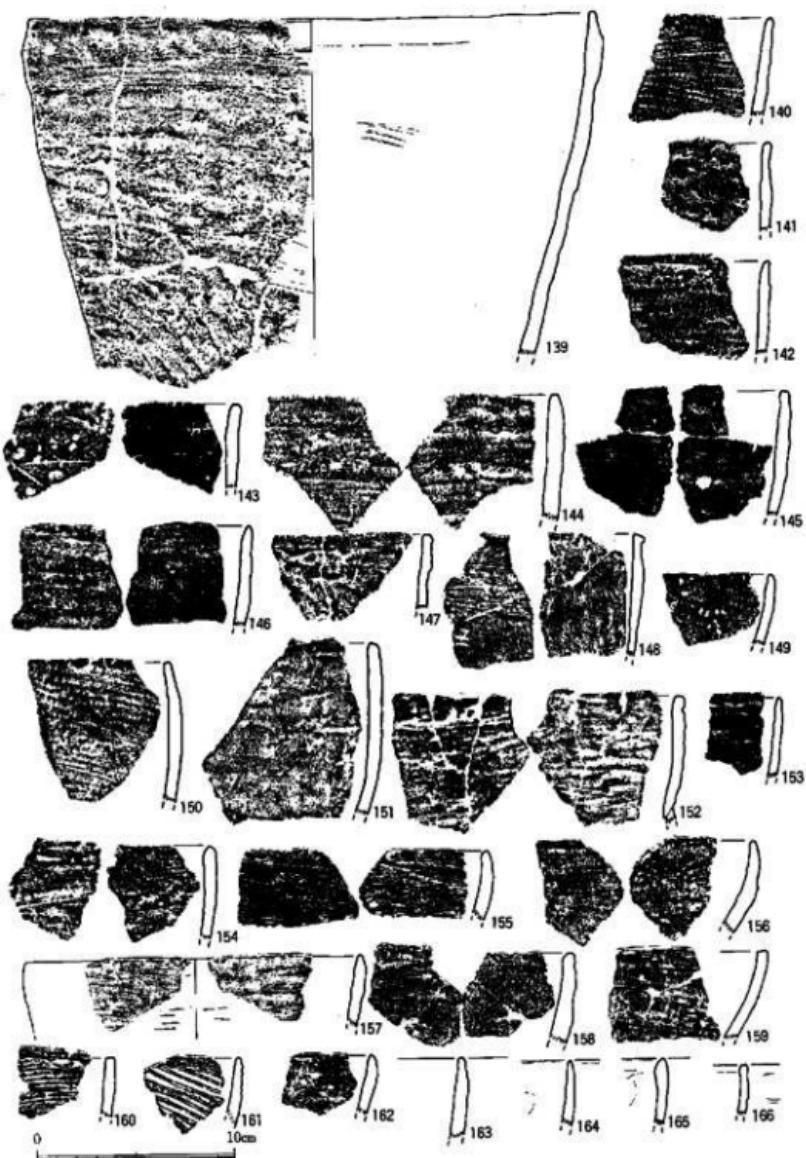


Fig. 15. A 地点縄文時代遺物実測図(9) (1 / 3)

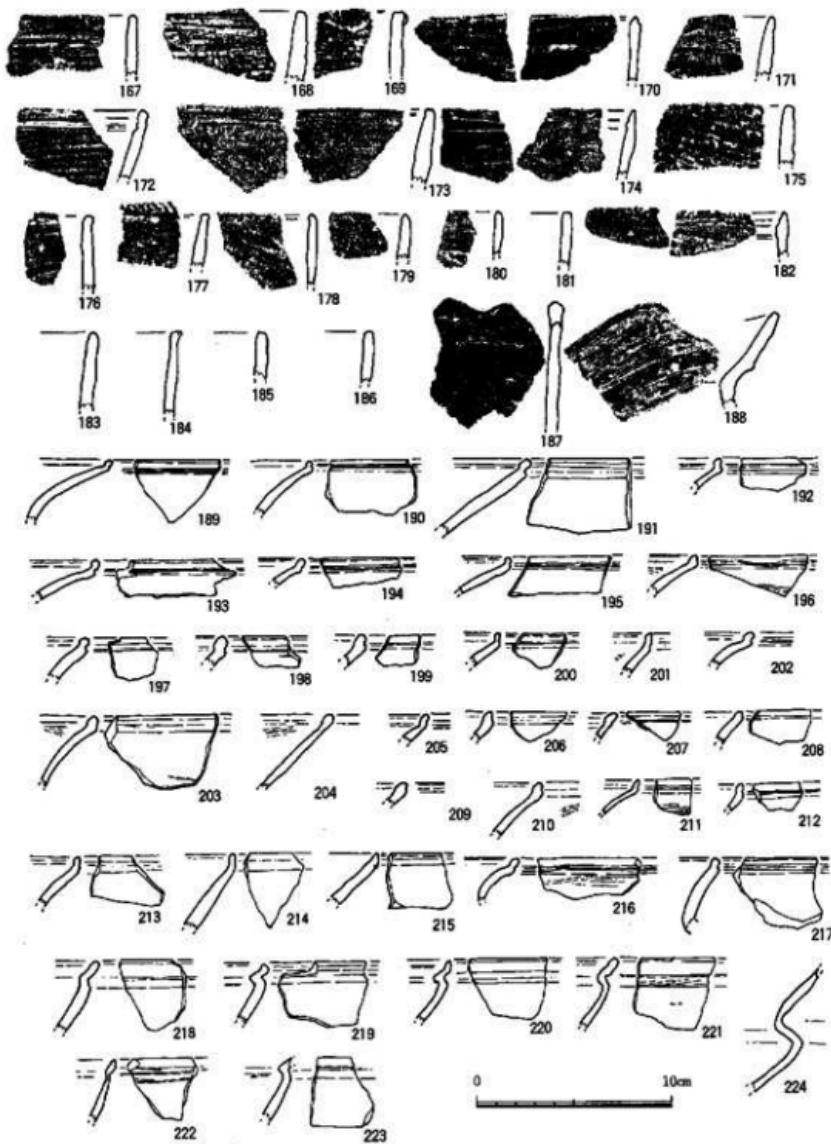


Fig. 16 A 地点縄文時代遺物実測図00 (1 / 3)

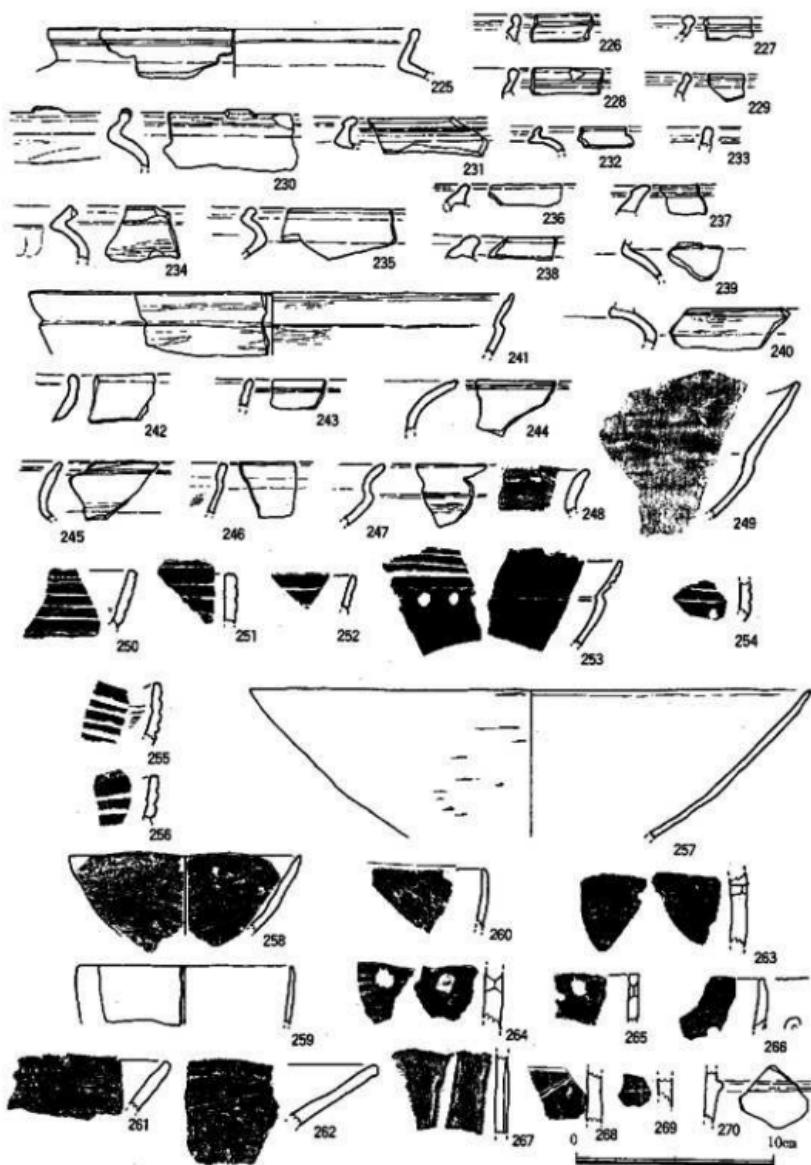


Fig. 17 A地点縄文時代遺物実測図01 (1/3)

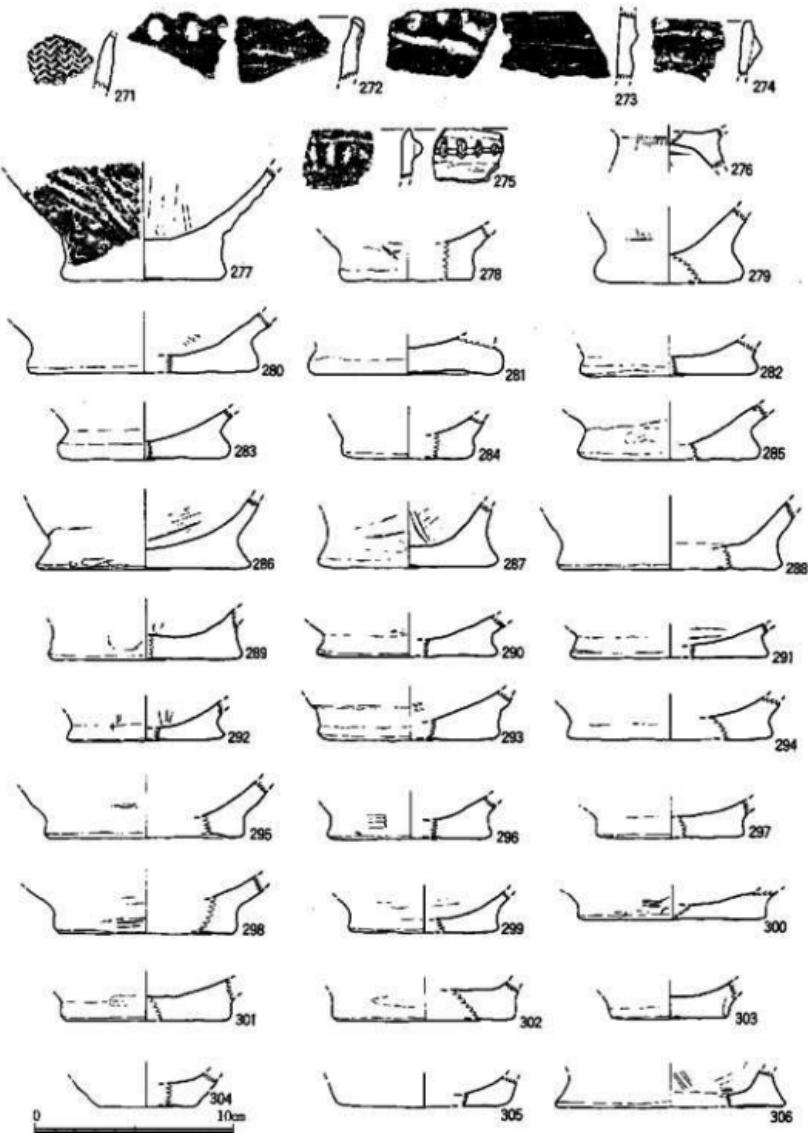


Fig. 18 A地点縄文時代遺物実測図101 (1 / 3)

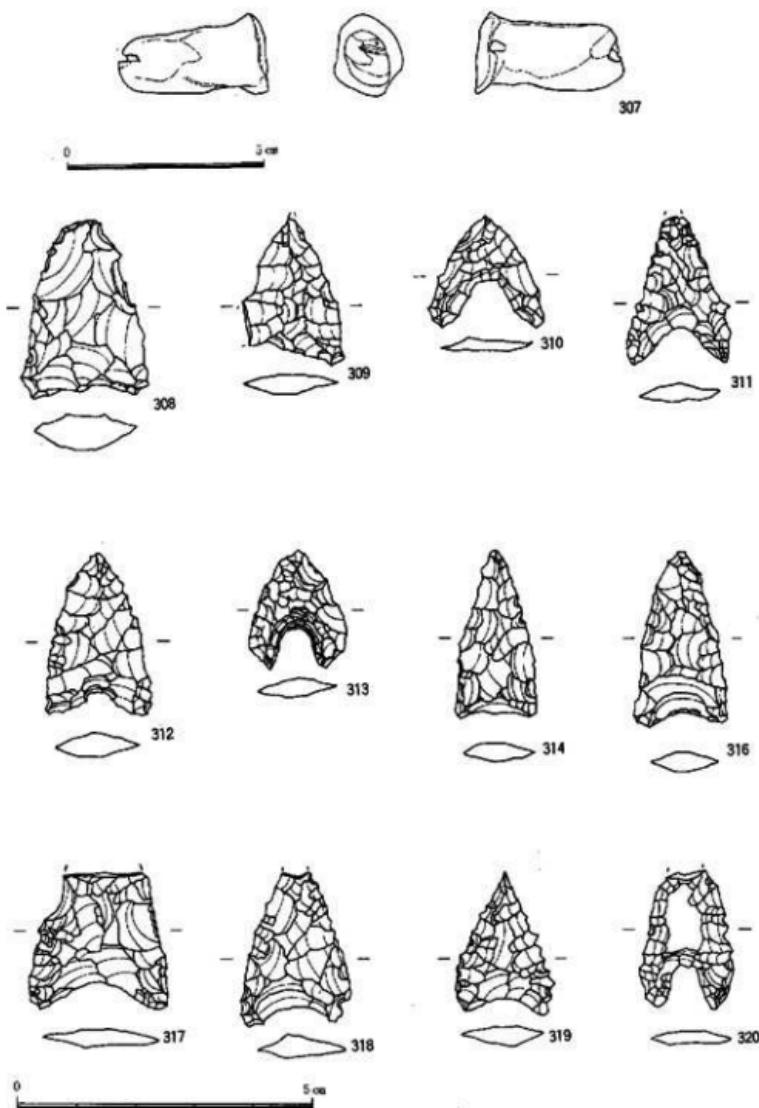


Fig. 19 A 地点縄文時代遺物実測図13 (2/3・1/1)

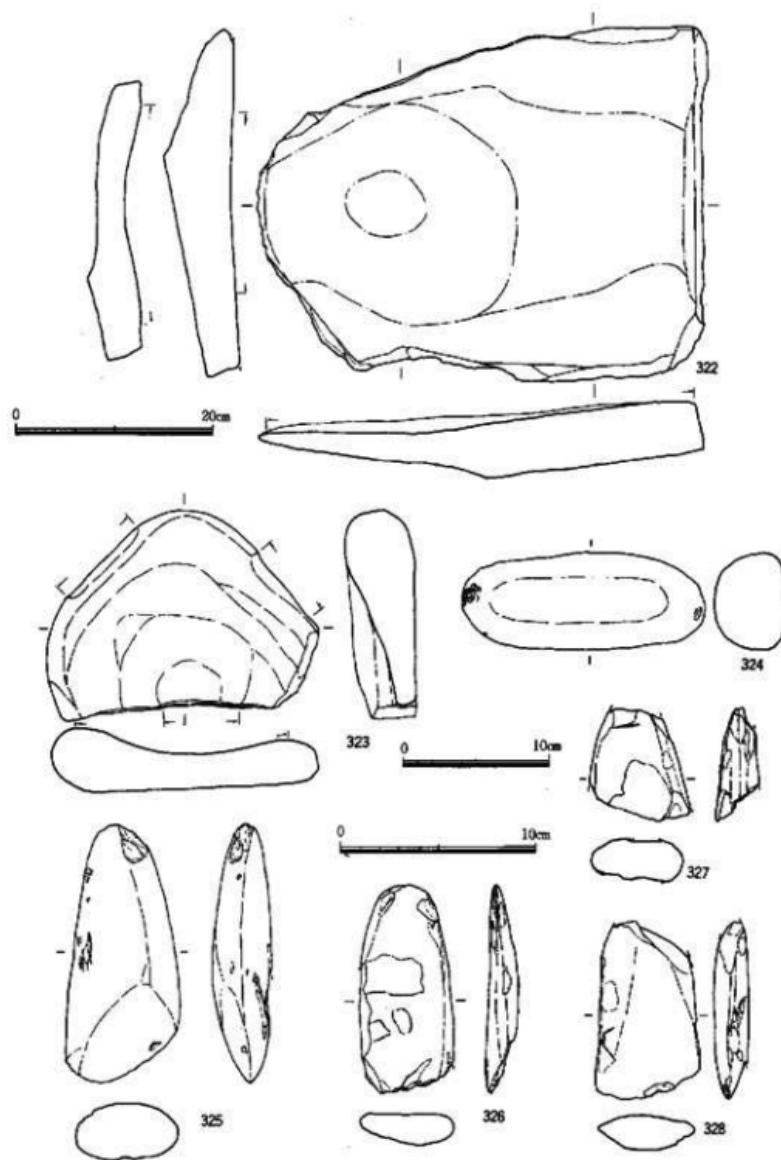


Fig. 20 A 地点縄文時代遺物実測図04 (1/6・1/4・1/3)

その他の縄文時代の遺物 (Fig. 13~20)

ここでは、12区第1グリッド以外の包含層掘り下げ時に出土したもの、焼土壙等のように時期の異なる遺構より出土したもの、集探したものを一括して報告する。押型文、南福寺式系の土器も若干みられるが、ほとんどが晩期を中心とした時期におさまるものである。器種別に報告するが、小片が多いため分類には至らない。

106~188は粗製品を中心に深鉢もしくは鉢形になるものである。106~130は外反、もしくは外反気味の口縁部を持つ。これらは全て胴部と頸部の間に屈曲部を持つものと思われる。器形の上からは、106のように頸部が長く外反し、胴部最大径と口径が近いもの、107のように、ラッパ状に口縁部が開くものがある。後者の中には、屈曲部やや上方に削り出した段を有するもの(108)、頸部下部で強く屈曲するものなどがある。調整は主に2枚貝による条痕を施し、内面はナデ調整である。107、119は条痕調整具による刻目を口唇部に施す。115は、8mm幅で断面皿状の調整痕が幾重にも施され、器面は波を打つ。130、133は先ナデを施し、つくりは丁寧である。半精製品と言えよう。外面ナデ調整のものは少なく、126、136のように間隔の開いた斜方向の沈線を入れるものがある。また、121、127などのように器壁が薄いものは、やや小量品になると思われる。Fig. 15・139~166は、内湾気味の深鉢、鉢である。157~166の中には小型の鉢になるものも多いと思われる。多くは、そのまま底部に向かってすぼまる器形を持つと考えられる。その中でも139は、口縁部特に外側を強く横ナデすることで、一見内傾する口縁帯を持つような形状になる。152、159は内湾する口縁部が「く」の字に屈曲する。155、156等も同様であろう。調整は、外面を二枚貝条痕によらず、削り状の痕跡を残すものが多い。内面はナデ調整または、板状工具によると思われる擦跡を残すものが多い。149は先ナデ調整で丁寧な仕上がりである。163~166はナデ調整で小型品と思われる。148、152、169は口縁部の粘上の折り返しにより突唇のような形状になる。167~186は小片で器形等の判断はし難い。172は外面条痕調整であるが、内面を丁寧にナデ調整し、内外面口縁部直下に沈線を施す。焼きが良く非常に固い。177は口唇部に条痕施文具による刻目を施す。183~186は丁寧なナデ調整により器面が平滑に仕上がる。187は直口する鉢の口縁部で2つのリボン状の突起を有する。188は内湾する口縁部が波状を呈し、「く」の字状に屈曲して胴部へつながる。形成の方法は、如意形に曲げた頸部に、若干屈曲させて波状口縁部分の粘土帯を重ねる過程で、頸部と口縁部間の屈曲部に突唇状の高まりを残し、さらに削り出しにより強調する。

189~256は浅鉢を主体とした精製の器種である。大きく4つまたは5つの器形に分かれる。189~217は長く外に張り出す頸部に口縁帯を付したものである。研磨調整が施され、胎土に砂粒を含まない精良なものもある。204・214・215の中には、そのまま屈曲することなく胴部から底盤へとすぼまる器形も考えられる。また、203、217のように頸部が立ち気味で、やや深い器形を持つものもある。口縁帯は頸部から屈曲して立ち上がり、内外面に1条づつ沈線を施す。

内面は段のみのものもある。192は口縁帯の屈曲が強く、内傾気味である。それが203や206、さらに208になると口縁帯は形態化し、沈線も浅くなる。207は口縁部が断面楕円状になり、225のような器形になる可能性もある。218~223は短く強く外湾する浅鉢（577）の頭部が短く屈曲したものである。屈曲した頭部に低い段を持ち、口縁帯状を呈す。内外面とも研磨調整で砂粒を含まない精良な胎土のものも多い。222はやや異質で、明瞭な屈曲部を持たず、箇ナデ調整で胎土に砂粒を多く含む。225~240は扁平球形の胴部に短い頸と口縁部がつく。225、226のように、やや長めで細い頸部に、断面円形または楕円形の口縁部を持つものと、236~238のように太く短い頸部に半円形の口縁部がつくものがある。234は口縁部が欠け、沈線ではなく、直口縁になると思われる。235は胴部の屈曲が強い。241、242は、247や218の中間的な特徴を持つ。244~245・247は外反する口縁を持つ。244は外面に、245は両面に沈線を施す。

249~257は碗状の器形を持つと思われる。250~252は精製深鉢の可能性もあるが小片のためわからない。251は粗製で波状11綫を成す。250~256は外面に数条の沈線を施す。255、256は波状口縁を成し、251、253、255は沈線部分にわずかながら赤色顔料が残る。257は直口で器壁が薄い。丁寧なナデ調整を施すものの、削り調整が残る。258~260は小型の鉢になる。261、262は粗製の浅鉢で底部から直線的な胴部がそのまま口縁部まで延びるものと思われる。263~266は穿孔を持つ。263は焼成前、他は焼成後の穿孔である。267~269には沈線を施す。267は鋭く平行に、268は2本づつ交わる角度で、269は浅く直交する。270は小さな突帯を付す。

271は横走する山形押型文土器である。272、273は阿高系土器である。272は口縁部を刺み、外面に指頭圧点を施す。273は滑石を混入し、凹線を施す。274は無刻目の突帯文土器で下方に緩やかな突帯を貼付する。275は刻目突帯文土器で断面三角形の貼付突帯に2枚設によると思われる刻目を施す。便宜的にこの挿図に入れた。276は高坏の坏と脚の接合部もしくは台付鉢の底部と思われる。

277~306は深鉢、鉢の底部である。断面逆台形を呈すものがほとんどで277~279のように厚いものや、292等のように薄いものもある。304、305は底から直接胴部へ聞く。

307は土製品で接合部分で割げている。土偶の手の可能性もある。

308~320は打製石器である。石材は黒曜石（310・312・314・317・320）、安山岩（309・311・313・316・318）、玻璃質安山岩（319）を用いている。基部の形態より平基と凹基に大きく分離できる。更に平基で二等辺三角形を呈するもの（309）、同じく平基だがシメントリーとならないもの（310）に分けることができる。又凹基のものは深い抉りをもち正三角形を呈するもの（311）と二等辺三角形を呈するもの（312）、いわゆる鎌形鎌と呼ばれるもの（314）又浅い抉りをもち二等辺三角形を呈するもの（316~319）等に細別できよう。又320は素材表面に自然面を残している。323は石皿。324は粗い花崗岩で叩石の可能性がある。325~328は磨製石斧である。

(4) 古墳時代以降の遺構と遺物

A 地点では、弥生時代の遺物は見られず、若干の古墳時代および中世の遺構と遺物が出土した。

SK161 (Fig. 4・21・22) 前述のとおり (P 8)、古墳時代後期の遺物が出土したが、遺構をとらえきれなかった。遺物は完形の壺と小壺の2点で、東向きに斜めに倒れた壺の中に、小壺が正立する。335はかなり歪んだ粗いつくりの壺である。口径は最大径16.7cm、最小径14.5cmである。調整は外面が削り状の刷毛目で鋭い小口痕が口縁部だけでなく、削下部にも多く残る。内面は左斜め上への粗い削りで、口縁部は内外とも横ナデである。成形が荒く、器面の凹凸が激しい。器壁も厚い。336は小型壺で外面を横方向に磨き、半滑に仕上げる。厚手で重い。

SK273 (Fig. 21・22) 8区に位置し、近くには遺構があまりない。黄白色砂質土層に埋土は淡黄灰色土のピット状の土壤に、古墳時代後期の壺が南西を向いて横倒しで出土した。340は胴部下半の約 $\frac{1}{2}$ が欠損する。外面を縱方向の刷毛目、内面を横方向の削り調整、口縁部を強

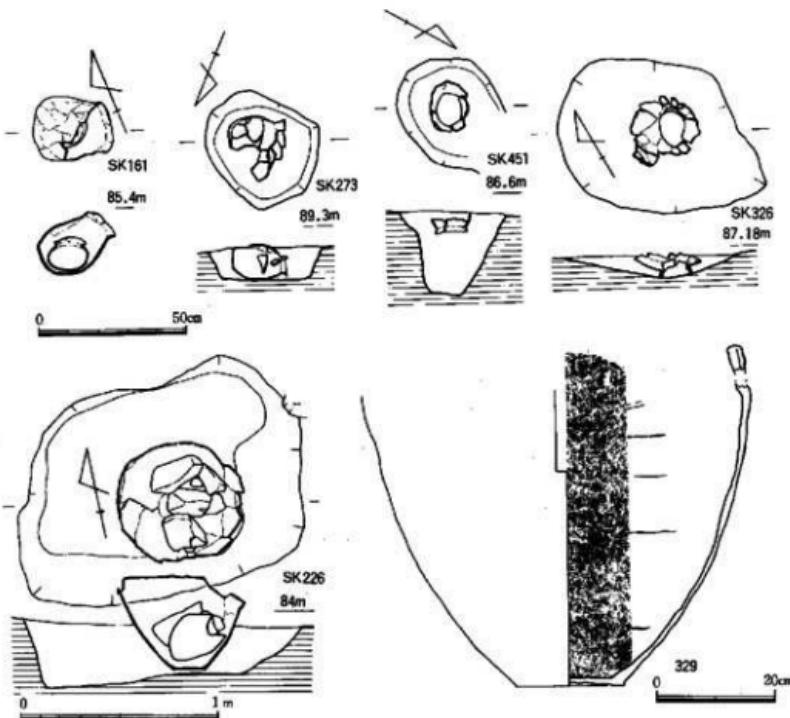


Fig. 21 A 地点古墳時代遺構・SK226遺構遺物実測図 (1/20・1/30・1/10)

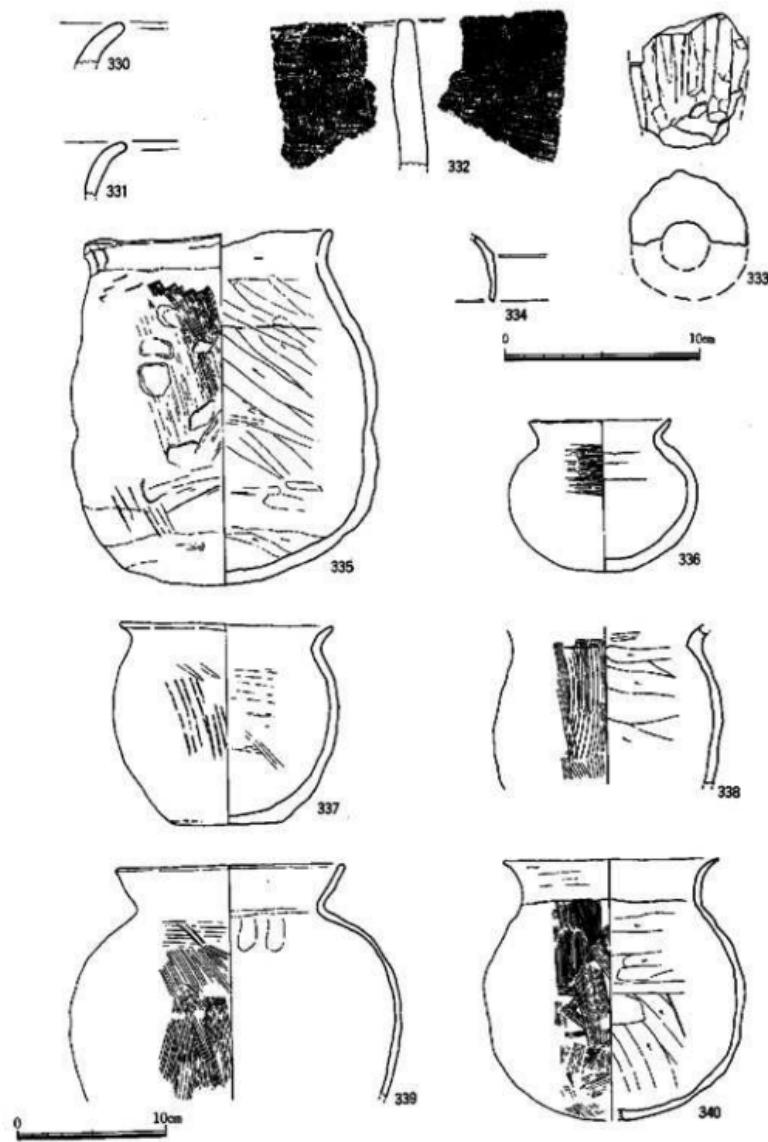


Fig. 22 A地点焼土層出土・古墳時代遺物実測図 (1/3・1/4)

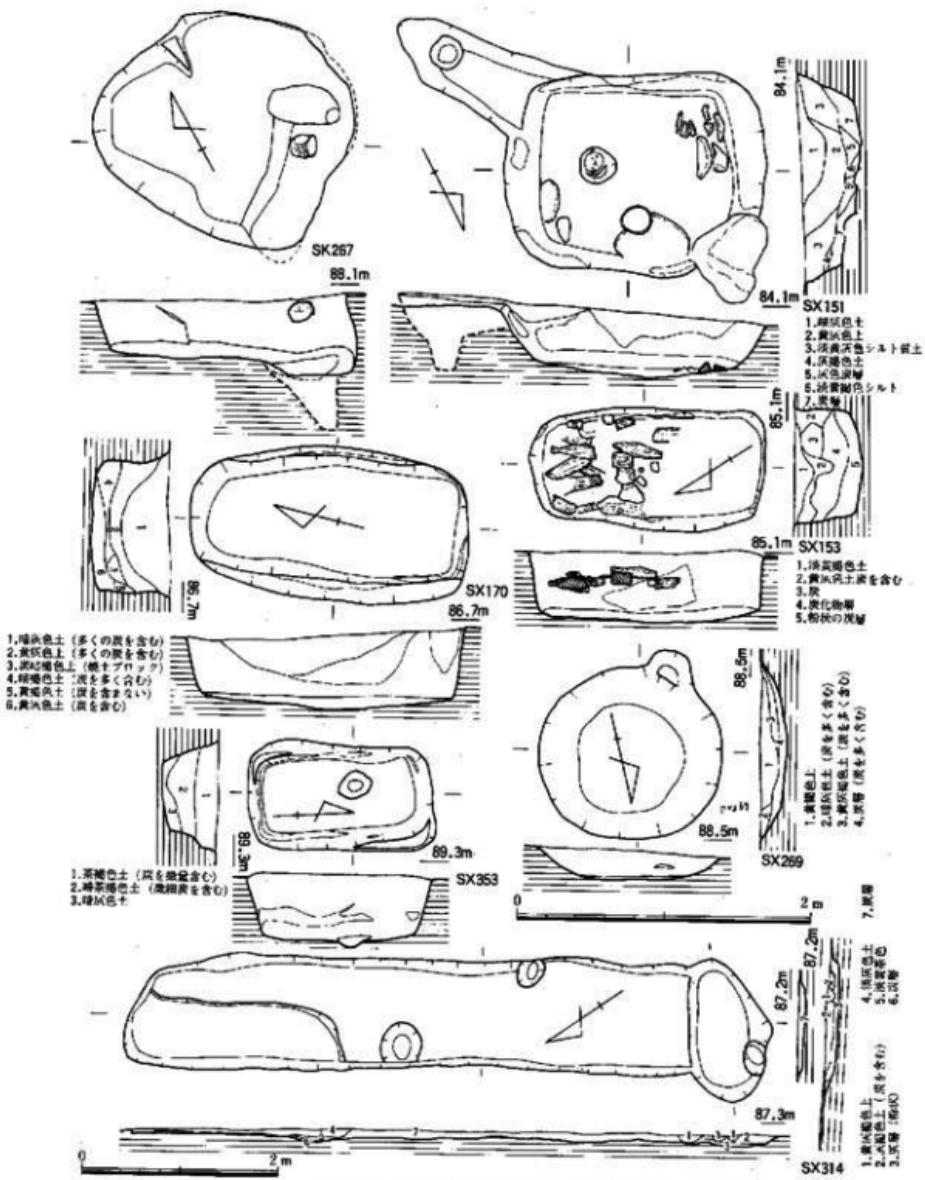


Fig. 23 A地点 SK267・焼土壌実測図(1/40・1/60)

い横ナデで仕上げる。内面湾曲部には粘土帯接合痕が明瞭に残る。外面胴部中位に煤が付着し、底部付近は2次焼成により赤変する。

SK267 (Fig. 22・23) 10区西隅の、不整円形の土壙である。黄白色砂質土層を掘り込み、淡灰黄褐色土を覆土とする。底にピット状の掘り込みを持つ。床から浮いた状態で土器が完形で出土した。SK161同様、他の遺構を検出しきれなかった可能性もある。337は外反する口縁とやや丸みを持った平底の甕で、2次焼を受け全体に赤い。器面もやや荒れる。外面は上半を横、下半を擬方向の削りの後丁寧にナデる。叩き状の痕跡もあるがはっきりしない。頭部を強くナデすることで胴部との間に若干の緩い段ができる底は削ったままである。内面底から胴部を除き黒ずむ。軟質土器の系譜を引くものであろうか。

SK326 (Fig. 21・22) 12区の中央に位置する。周囲には焼土壙、ピット等が多い。黄褐色土層上に茶褐色土が溜り、古墳時代の甕が倒立して出土した。339は内湾する口縁部に強い横ナデを施し、外面上位、頭部は若干くぼむ。内縁部内面もわずかながら肥厚させる。調整は外面を斜方向の刷毛目、内面はナデである。肩がやや張り気味で球形の胴部を持つものと思われる。外面口縁部、肩部に煤が付着する。布留式の系譜上の土器と思われる。

SK451 (Fig. 21・22) 5区に位置する。黄褐色土層に掘り込む淡茶色土を埋土とするピットに古墳時代後期の甕が倒立した状態で出土した。338の口縁部は胴部の崩毛目の後強く横ナデを施す。内面は左上へ斜方向の削りで、鋭いやや湾曲した工具によると思われる。

SK226 (Fig. 21) 3区西隅より1段落ちた位置で大甕を検出した。黄白色砂層にやや暗い砂が埋まる。掘り方ははっきりしない。大甕は正立し、内に人頭大の礫が入る。329は土師質で上部を欠損する。残存部より内湾し、内面には低い段を持つ。内面には同心円状の当て具痕が見られ、上部はその後削る。外面は丁寧にナデしており叩きの痕跡はない。器壁は粘土帯形成の痕跡と思われる凹凸がみられる。

焼土壙 (Fig. 22・23) 40基の焼土壙を検出した。長方形プランの土壙に壁の上部が焼け、床に炭が堆積する基本は同じである。特筆すべきものとして、SX151は南側隅に溝状の掘り込みを持つ。埋土は焼土壙本体と同じである。このタイプは、これまでにも数は少ないながら見られたものである。SX269は円形のプランを持ち、断面は浅い皿状を成す。床には炭がたまるが、焼けた痕跡はない。SX314は6.6mの長さを有し、床に炭がたまり、所々赤変する。南西隅を稍円形の同様の土壙が切る。これまでの調査でもこの大型の焼土壙には稍円形または円形の土壙が付随している。焼土壙からの遺物は大半が縄文土器で、まざり込みである。土師器の破片もあるが、小片で詳細は不明である。330～333はSX170から出土した。330、331は外湾する甕の口縁部で横ナデ調整を施す。332は甕の受け部になるものであろうか。内外面には刷毛目が残る。333は羽口で、外面は焼け青白色に変色する内径は2.5cm程度小さい。

334は集採品で、須恵器の壺蓋である。

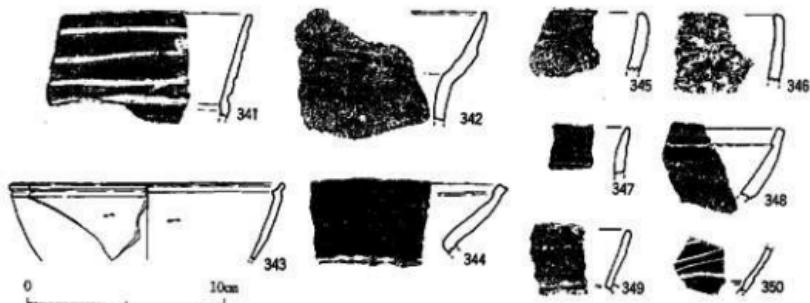


Fig. 24 B地点縄文時代遺物実測図 (1/3)

3. B地点の調査

B地点は、A地点がのる西端の尾根とC地点がある調査区中央の尾根の間を北流する小さな谷部の右岸に位置する。排水路が計画されたI区 (450m^2)、田面が削られるII区 (344m^2)、III区 (967m^2)、IV区 (307m^2) を調査した。

I区では、現在の耕作土・床土を除去した段階で黄褐色土層の面に達する。遺構は精査したが全く検出できなかった。調査区は棚田の削平により5ヶ所に段がつく。その最上段にやや赤味を帯びた黄褐色土が残る他は、やや砂質で遺物も出土しない。最上部の厚さ10cm程の黄褐色土からは、小片ながら200点余りの縄文土器片が出土した (Fig. 24)。341は精製の深鉢で、幅の広い口縁部に太めの沈線を3条施す。342は内面頭部に棱を成して内湾する深鉢の口縁部で外面粘土接合部に低い突帯状の棱をもつ。波状になる可能性もある。344、358は同様の形態を持つ深鉢と思われる口縁部である。348は外面の仕上げが粗く、焼きもあまい。345、346は内湾する粗製品である。347は橙色の浅鉢の口縁部片で、径の小さな小型品と思われる。349はやや内湾気味の口縁部を持つ浅鉢である。350は波状口縁を成す浅鉢の屈曲部で口縁部沈線文を施す。外面は研磨により平滑に仕上がる。この他に、弥生時代のものと思われる丹塗土器片も1点出土した。

II区、III区、IV区は、茶色がかった黄褐色土で遺構検出を行ったが、遺構、遺物共に確認できなかった。Fig. 3に位置のみ示した。

4. C地点の調査

(1) C地点の概要

C地点は調査区中央を北に延びる広く緩やかな丘陵上に位置する。現耕作土・床土を除去した。赤褐色土層上面で遺構を検出した。棚田による削平のため下層の淡黄褐色土礫層が露出する個所がほとんどである。縄文時代に属する可能性のある土壙3基、縄文時代の包含層、古墳時

代の住居跡1軒、12世紀～13世紀の掘立柱建物7棟とそれに付随する土壙5基、焼土壙22基、その他の近現代の小田に伴う溝を検出した。

C地点は道路計画部分と、工事によって削平を受ける部分8110m²の調査である。調査の順序の都合により中央を南北に走る道路部分をⅠ区、その東をⅡ区、西をⅢ区とした。

(2) 繩文時代の遺構と遺物

SK001 (Fig. 25) 素掘りの土壙で漏斗状を呈し、上部より50cmのところに段が認められる。2段目は幅50cm程の長方形を呈する。覆土は暗黒褐色や暗茶褐色土などがレンズ状に堆積しており、その形状から落とし穴の可能性がある。縄文土器の細片を1点出土したのみである。

SX007 (Fig. 26) 深鉢を転用した埋甕である。掘り方ははっきりしないが、縄文土器を含む黄褐色土を切り込んで作られている。正立し底部を一部欠く。肩部以上は削平により欠する。周囲には多數の縄文土器がみられる。351は肩部が緩やかに大きく内湾する粗製の深鉢である。肩部以上を欠するため上部構造については不明だが、外反する口線を持つものと思われる。外

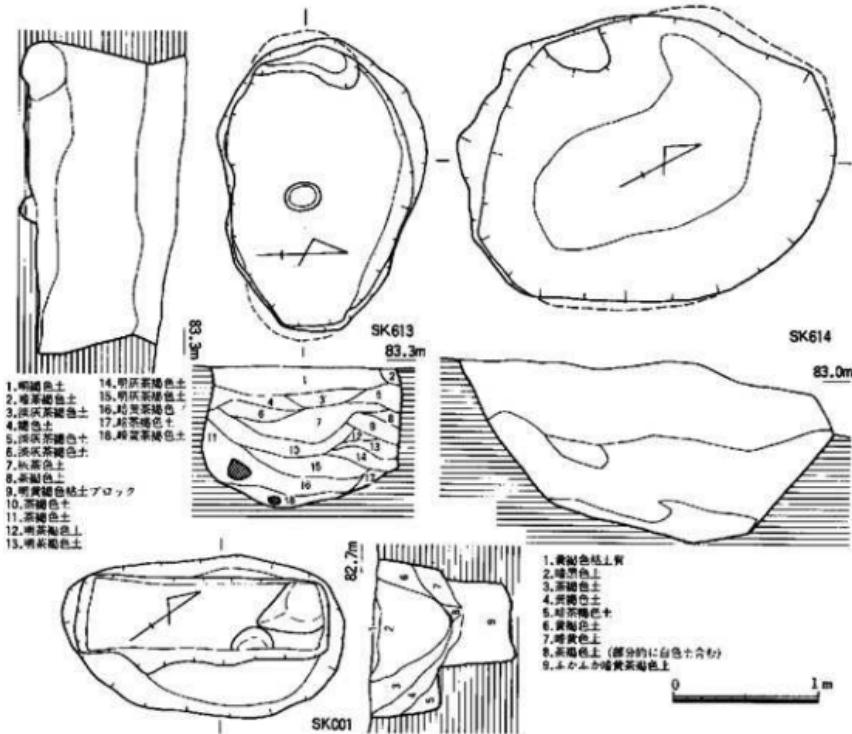


Fig. 25 C地点縄文時代遺構実測図 (1/40)

面削部下半は粗い左上がりの削り調整により、器面に粘土が袋状に高まる、2次焼成を受け、橙色を呈し脆い。外面削上部は削りの後、粗いナデ調整を施し灰茶褐色を呈す。この部分に煤が付着する。外面肩部は丁寧なナデ調整を施し、右上がりの施ナデ調整で仕上げる部分もある。内面はナデ調整で、所々右から左への削り痕が残る。内面底部より5cmから13cmの間は輪状に黒変する。

SK613 (Fig. 25) 調査区北東隅に位置する。楕円形プランを成し、断面は検出面より20~30cmまで緩く傾斜したのち屈曲してフラスコ状に挿入する。底は浅い舟底状で西壁際には幅25cm、長さ70cmの浅い溝が弧状に巡る。また、床面の中央部には小ピットがある。覆土は茶褐色土系の粘質、砂質の上がレンズ状に重なる。袋状貯蔵穴に類似するものの、縄文土器の細片が出土したのみである。

SK614 (Fig. 25) SK613の南3mに位置する。楕円形プランを呈す。断面は北、南東の一部が袋状に挿入し、床は舟底状をなす。床面の基盤は裸層で水はけは良い。遺物はない。覆土はSK613と同様で同じ性格の造構であろう。

(3) 縄文時代の包含層の調査

I区のSX007周辺、II区において1000点あまりの縄文土器が出土した。出土層位は、水田床土およびその直下の赤みを帯びた黄褐色土層上部で、特に両層の境から多く出土する。これは本来の遺物包含層が、水田耕作によってその中心部を破壊されたことを物語っている。また、

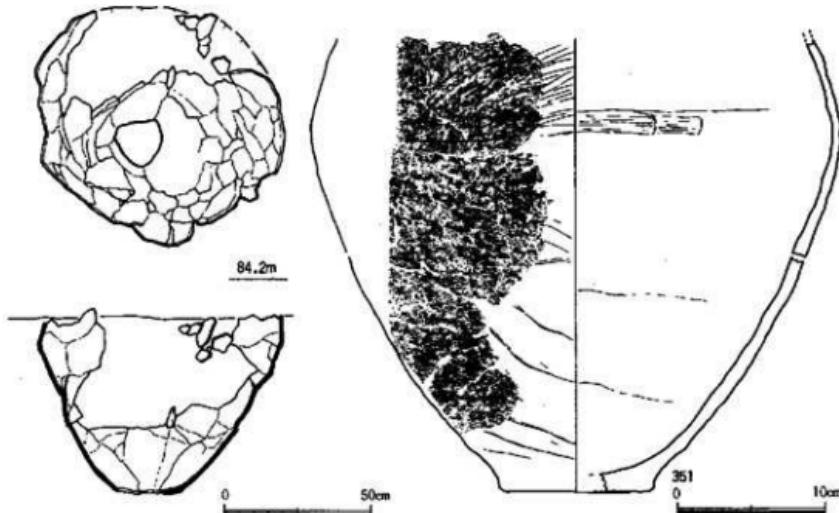


Fig. 26 C地点 SK007遺構遺物実測図 (1/10・1/4)

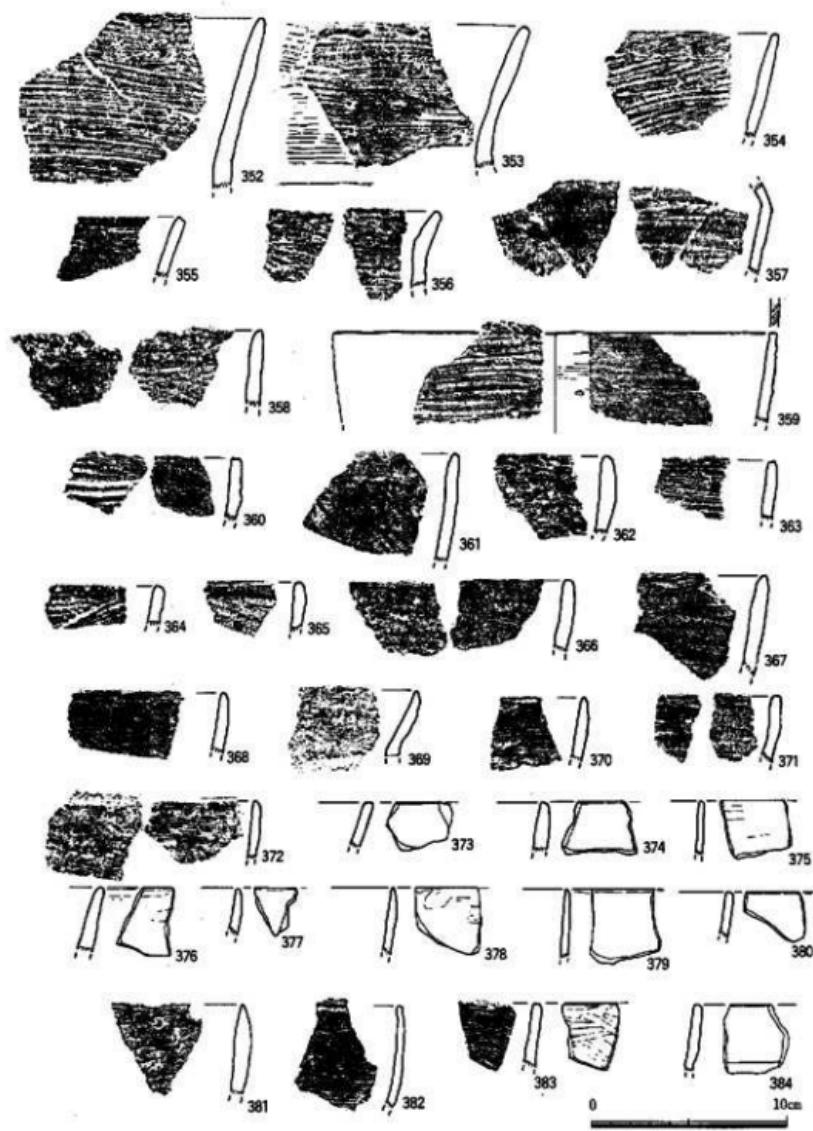


Fig. 27 C 地点縄文時代遺物実測図(1) (1 / 3)

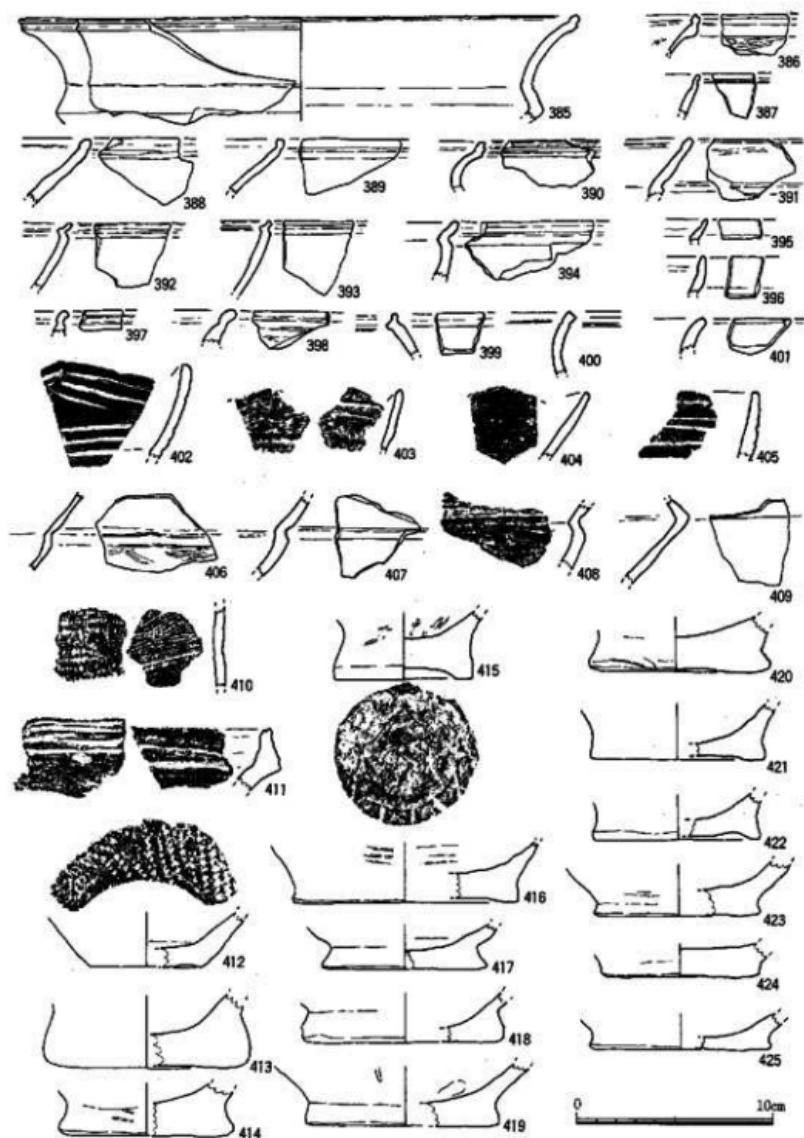


Fig. 28 C 地点縄文時代遺物実測図(2) (1 / 3)

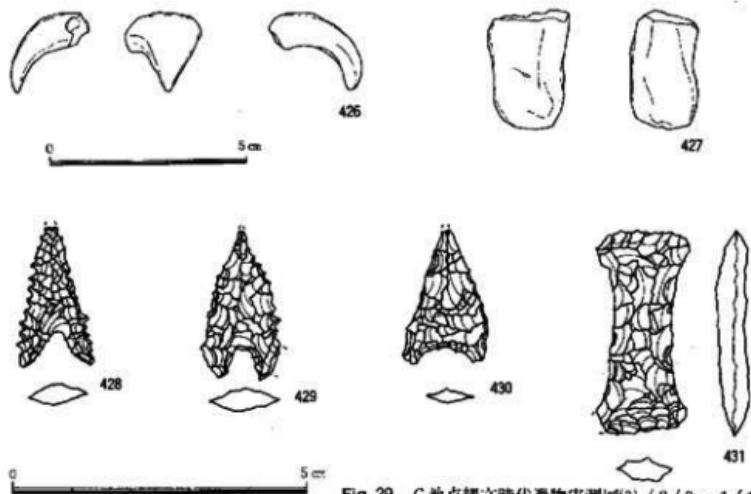


Fig. 29 C 地点縄文時代遺物実測図(3) (2/3・1/1)

平面的分布も、田丘陵の南側斜面にあたり、丘陵の主軸方向と一致してベルト状に分布することから、丘陵頂部が削平されて、斜面部分の包含層がかろうじて残った様子をあらわしている。遺物は、ほとんどが細片であるが、10cmほどの大型の土器片、使用痕のある剝片などもあることから、生活跡の中心をはざれるものの、その縁辺部という感を与える。

以下、C 地点で出土した縄文土器・石器を全て一括して報告する (Fig. 27~29)。

352から372は粗製の深鉢、鉢である。いずれも小片であるため全体の器形ははっきりしない。352から356は外反し外に聞く口縁部を持つ。胴部で前曲する器形になるものと思われる。いずれも 2 枚貝による横方向の条痕を施す。353はやや急に外反し、口縁部に横ナデを施す。356は口縁部、特に口面が急に外に屈曲し、内面にも 2 枚貝条痕を残す。358は胴部屈曲部で、肩部を丁寧にナデる。他は条痕である。359から372は、直口または内湾する口縁部外面に条痕を残す。359は口唇部に条痕原体による刻目を施す。器壁が薄く焼きも固い。361は左上がりの 2 枚貝条痕の後、口縁部にナデを施す。365から371は、内湾気味の口縁に削り、擦痕を残す。369は口縁部外面の湾曲が大きく、II縁帯状を呈す。頸部は緩い稜をもって屈曲する。373~384は一次調査を消す丁寧な調整を施す。器壁が薄く、中型から小型になり、口縁部が外反するものはない。381は外面に籠ナデを施すが、やや粗く、粘土溜りが袋状を成す。内面は研磨調整である。383は内外とも研磨調整で口唇部を面取りし、胎土は砂粒をほとんど含まない。384は口縁下部内外面ともに低い段を有し、II縁帯状を呈す。

385から409は浅鉢である。385から391は長く外に張り出す頸部と小ぶりの口縁帯を持つ。385は肩部が長く、やや深い。391の口縁部はわずかに内湾し、肩部は短い。口縁部外面には深

めの研磨痕程度の沈線を施し、内面には低い段を持つ。392から394は短い頸部、肩部を持ち口縁内面に低い段を持ち、星的に安定してみられる形態である。388・398も扁平球形の胴部を持つ特徴的形態を成す。399は球形の胴部に直接口縁帶が付く。400は面取りした口唇下に細い沈線を内外に施す。401は外反する口縁部が直接胴部に付く。402から405は碗状の器形を持ち、404までは波状口縁を成す。402は波状部外面に凹点を打つ。404は沈線を施文せず、研磨調整を施すのみである。406から409は胴部屈曲部である。

410は外面に繩文、内面に2枚貝条痕を施す。器壁は薄く胎上は粗い。411は深鉢の口縁部である。外湾する口縁帶がやや内傾し、外面に沈線を4~5条施すが粗く条痕状である。外面はナデ、内面は削りの後ナデ調整を施す。412からは425は底部破片である。412は若干上げ底気味で直接胴部へ広がる。外面には繩文を施す。415は底部外間に木葉痕を残すが、中央を剥き取り、上げ底状を呈す。他は逆台形状を呈す。

426・427は土製品で土偶の手、足の可能性がある。

428~430は黒曜石製の打製石器である。428は深い抉りをもち、細身の二等辺三角形で鋸歯状の鋸刃をもつ。先端部をわずかに欠損する。429は完形品で深いU字形の抉りをもち、両側刃が鋸歯状をなす。430は浅い抉りをもち、二等辺三角形を呈する。先端部をわずかに欠損する。431は糸巻形石器と呼ばれるもので、中央部に長いくびれ部を有する。玻璃質安山岩製である。

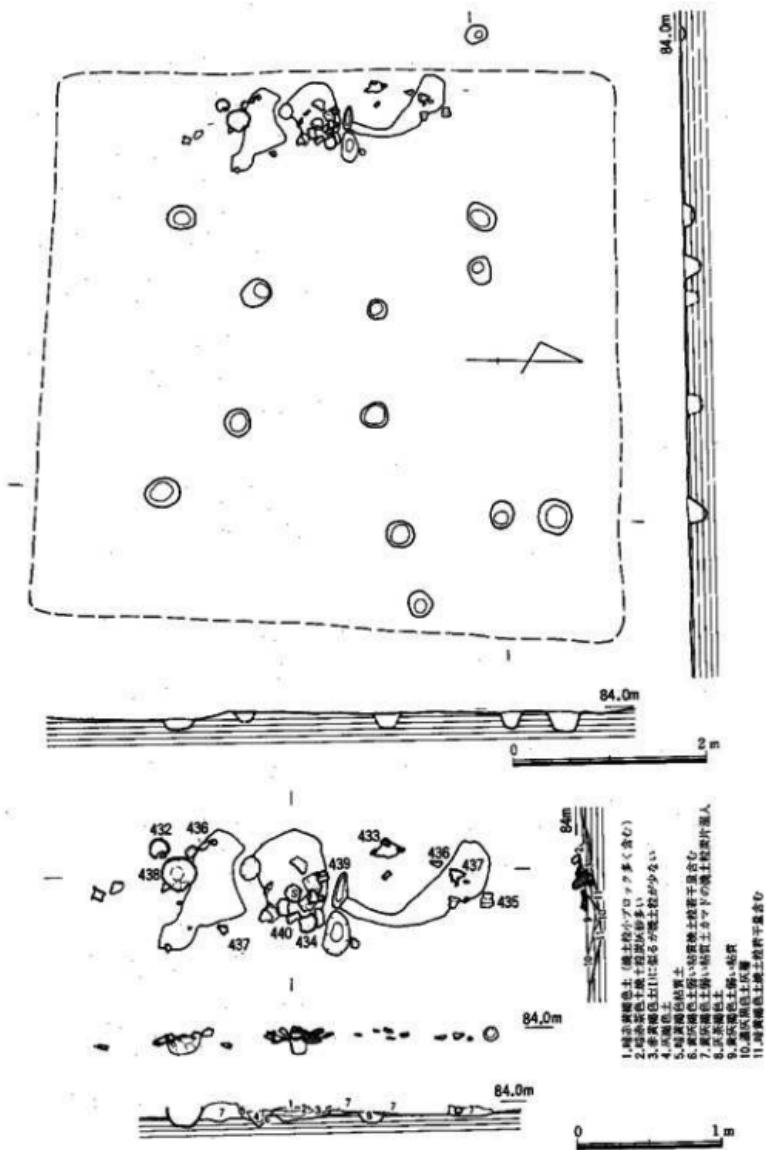
(4) 古墳時代の遺構と遺物

豎穴住居跡を1棟、Ⅱ区の南寄りの位置で検出した。このほかに炉跡や竈の基部を示す遺構ではなく、主住穴を示す1×1間の建物跡もないことから、豎穴住居跡は1棟のみと思われる。

SC610 (Fig. 30・31) Ⅱ区南寄り、丘陵頂部からやや西寄りに位置する。付近は水田開削による削平が著しく、壁面を消失しており、西壁に付設した竈と柱穴を残すのみである。

竈は西壁の南寄りに位置し、両袖の基底部と燃焼部の炉底面を残すのみである。袖部は小砂粒の混入した黄灰褐色土で構築されているが、北側袖は消失が著しい。燃焼部は、50×60cmの範囲に焼土が充満し、やや手前の位置に花崗岩の支脚が立っていた。燃焼部底面は平坦で竈の前面は灰の搔き出しによって凹レンズ状に浅く窪む。この窪みの前面には搔き出された灰が薄く堆積していた。4つの主柱穴は、その間隔は東西2.9、3.1m、南北が3.0、3.5mで東側がやや開きぎみの矩形をなす。また、こここの主柱穴の内側0.7~1.1mの位置には、柱間が1.2~1.4mの柱穴が鉗形に巡る。これは主柱穴を縮小したような矩形をなして配され、補助的な機能を有するものと考えられよう。この主柱穴と竈から推定される西壁までは1.3~1.5mあり、これを基にすると本住居跡の平面プランは、一辺が5.7~6.0mの矩形に復元できよう。

遺物は、竈周辺から集中して出土した。竈の燃焼部からは土師器壺片(439・440)と須恵器(434)が、南側袖際には土師器壺(438)と須恵器壺(432)が置かれていた。また、北側袖の近くからは須恵器の小型壺(435)が出土した。432~435は須恵器である。432は蓋である。



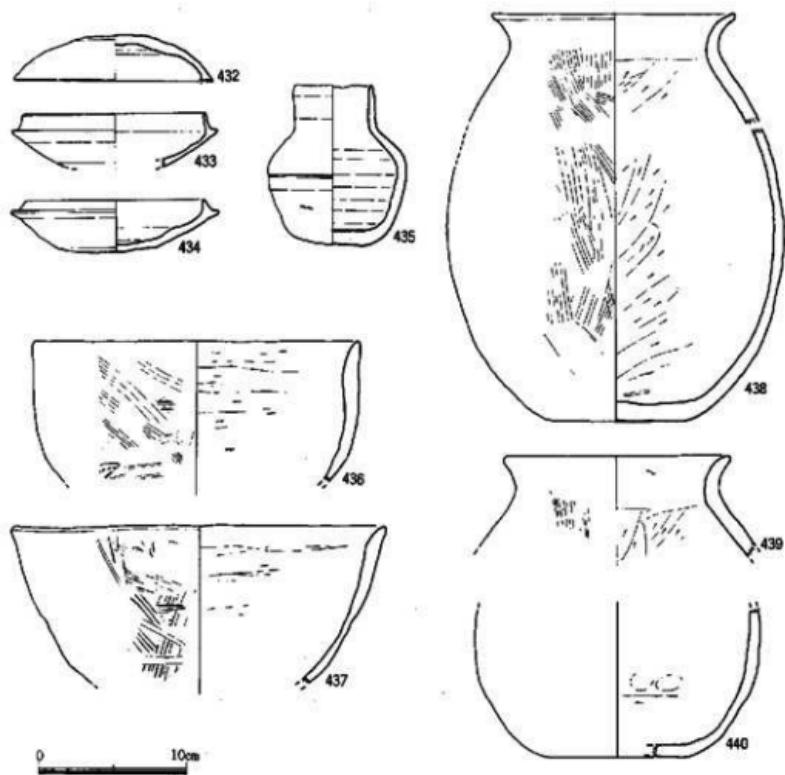


Fig. 31 C 地点 SC610出土遺物実測図 (1/4)

生焼けで淡白色を呈す。回転ナデ調整で天井部に窓切りの痕跡を残す。輥轆回転は時計回りである。口縁部端を欠き、体部下半を約1/4程欠損する。受け部径13.6cmを測る。433は壊身で、焼成が良く器壁が薄い。外面を暗灰色、口縁部から内面は青灰色を呈す。回転ナデ調整で天井部は回転施削りを施す。約1/4から復元した口径は12.2cmを測る。434は生焼けの壊身で淡黄褐色を呈す。竈南袖に内面を上にして出土した。胎土が粗く、3mm大までの砂粒を含む。回転ナデ調整で天井部は回転施削りを施す。輥轆回転は時計回りである。約1/4弱を欠く。口径12cmを測る。435は小型窓で竈の北側袖部より出土した。やや厚手で焼成は固く若干素がかった青灰色を呈す。4mm大までの砂粒を含む。時計回りの回転ナデで、胴部最大径部に浅い沈線を施す。底部はやや丸みを帯び、安定しない。436~440は土師器である。436は鉢の胴部上半で厚い口

縁部も口唇部は先細りに成形する。窯焼成部、北側袖上の破片が接合した。外面は叩きの後不規則な斜方向の刷毛目、内面は左方向への削りを施す。内外ともわずかに範ナデ痕がみられる。437も436同様の鉢形土器であるが、傾きが強い。窯の焼成部、北側袖、南側袖の破片が接合した。外面は粗い刷毛目の後、口縁部を横ナデ、粗く範ナデを施す。内面は削りの後、横方向の範ナデを全体に施す。438は壺で窯北側袖に正立し、胴下半を埋めてあった。内外とも2次焼成を受け、胴部は赤変し、肩部から口縁部は黒ずむ。外面は縦方向の刷毛目調整で口縁部は横ナデ、内面は下から上への削り調整である。439は壺の口縁部片で胎土が細かく、砂粒をあまり含まない。焼きも良く淡橙色を呈す。外面は刷毛目調整の後、口縁部を横ナデ。内面は削り調整を施す。440は壺の底部で窯焼成部の出土である。2次焼成によるものか、外面が粗れる。外面は刷毛目調整、内面は横方向の削りの後ナデる。

(5) 中世の遺構と遺物

掘立柱建物、土壤、焼土壙を検出した。これらの遺構は绳文時代調査区を挟んで南北に分かれてまとまる。特に南側には6棟の掘立柱建物が集中する。また、中央の遺構の空白地帯と繩文包含層の残存とは、当時の景観を考える上で意味を成す可能性もある。

SB004 (Fig. 33) 2×3間の縦柱建物で、SB005に付随する施設であろう。梁行3.2m、桁行6.65mで、柱間隔は梁行1.5~1.7m、桁行1.9~2.4mである。南側3番目と4番目の柱穴が他の3本の柱間隔に比べて狭い。柱痕跡は径8cm程で深さは20~40cmである。

SB005 (Fig. 33・36) 2×3間の建物で4面に庇がつく。梁行4.3m、桁行6.7mで、庇の部分を含めると、梁行6.4m、桁行8.8mを測る。梁の東側2本の柱間の部分には、対応する庇の部分の柱がなく、おそらく入口に相当するものと思われる。この2本の柱穴には、P1から龍泉窯系青磁碗(442)、P2からは樹種水注(441)がそれぞれ各程の破片で出土している。出土状況は確認できなかった。庇部分の柱間幅は約1mであるが、その間に1本入る部分もある。母屋部分の柱の深さは50~70cmで庇が30~40cmであるとの比べるとかなり深い。柱痕の径は10~12cm程である。埋土は暗黒色樹色土に黄色土ブロックを含み、SB004と同質である。南側には庇の内に丁度入る位置にSK006がある。SB005の柱穴に切られる。SB004とSB005の主軸方向はN-25°-Eである。

441は楕円陶器で、把手が付くことから水注と考えられる。内外面ともごく薄く釉がかり、やや黄色がかった淡い緑色を呈す。外底は露胎である。横耳が1対付くと思われる。約3/4弱が残存する。442は龍泉窯系青磁碗I-4類である。やや暗い灰緑色を呈し、細かい貫入が入る。貫付内は無釉である。

SB008 (Fig. 34・36) SB005の南西約90mに位置する。2×3間の3面庇付きの掘立柱建物で、焼土壙SX012を切る。梁行4m、桁行7.1mで、庇を含むと梁行4.7m、桁行8.7mを測る。建て替えの痕跡がある。庇は3面すべてにめぐるものではなく、柱痕も径5cmほどのものがあ

ことから、濁縁的性格の可能性もある。柱穴の覆土は SB004、005 とよく似ている。ただし主軸方向は N-112°-E でほぼ 90° 向きが異なる。南側の主柱と庇柱の間に同じ覆土の SK015 がある。遺物は P 1 から青磁皿片が出土している。445 は淡い灰緑色を呈す。青磁皿 I - 2 類で、外底を回転錐削りを施す。

SB616 (Fig. 33) SB005 の東約 8 m にある 1 × 1 m の建物である。東西 3.5 m、南北 3.4 m を測り、やや大きめである。北東の柱穴が 55 × 75 cm と大きめの梢円形プランをなす他は、40 × 55 cm の小梢円形をなす。深さは 45-65 cm を測る。各柱穴内には礎石が置かれている。礎石には扁平な河原石を用い、P 2 が柱穴底に埋置されているのを除けば、いずれも柱穴上端の検出面付近に埋置されている。覆土は灰褐色土に黄色粘土ブロックが混ざる。

SB617 (Fig. 34-36) SB005 の南東約 10 m に位置する 2 × 3 m の掘立柱建物である。すぐ東には SB618 が並置する。また、北半部は SB620 と重複し、これよりも新出する。その検出状況からして建替えの可能性も考えられる。梁行は 4.1 m である。桁長は 6.9 m で中央の柱間がやや

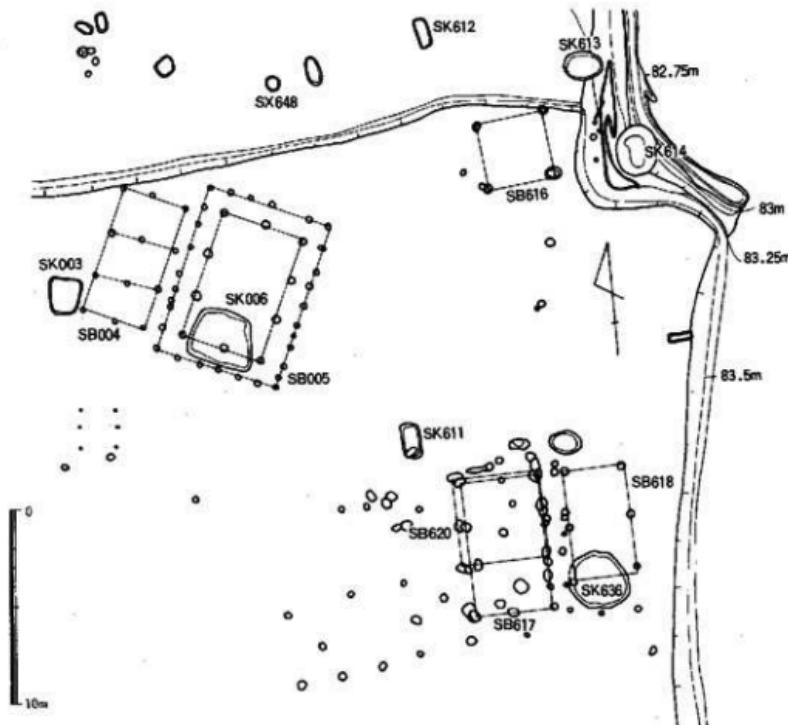


Fig. 32 C 地点掘立柱建物位置図 (1/300)

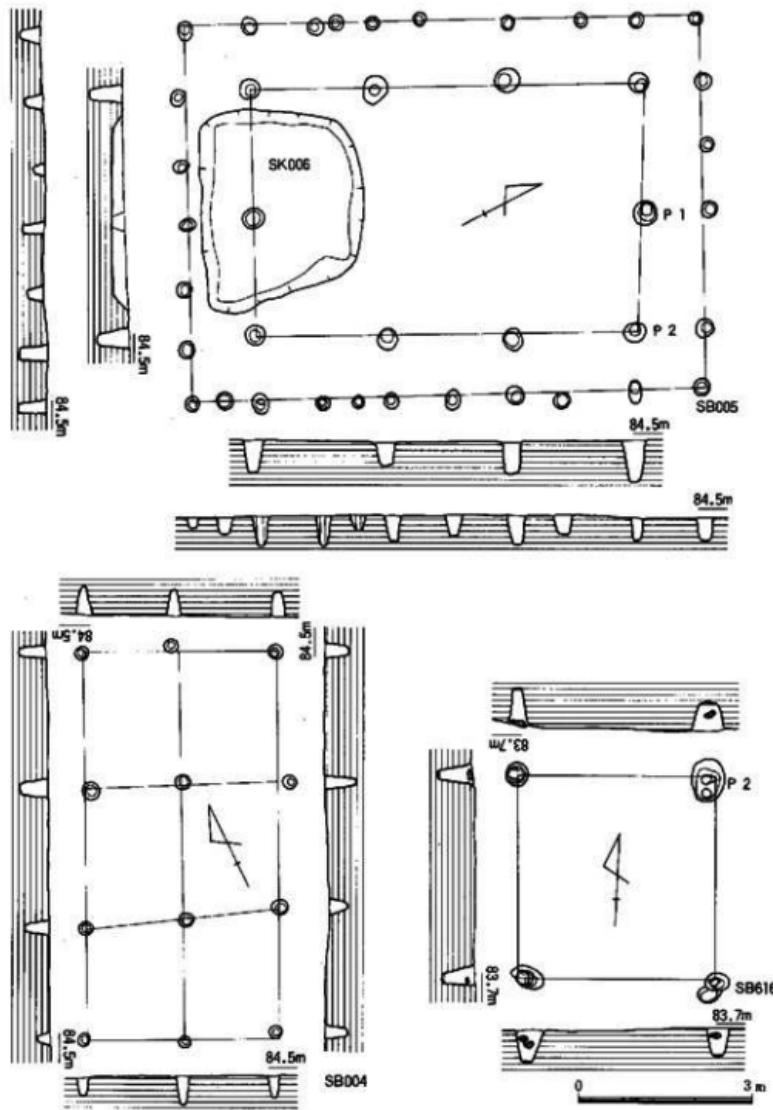


Fig. 33 C地点掘立柱建物実測図(1) (1/100)

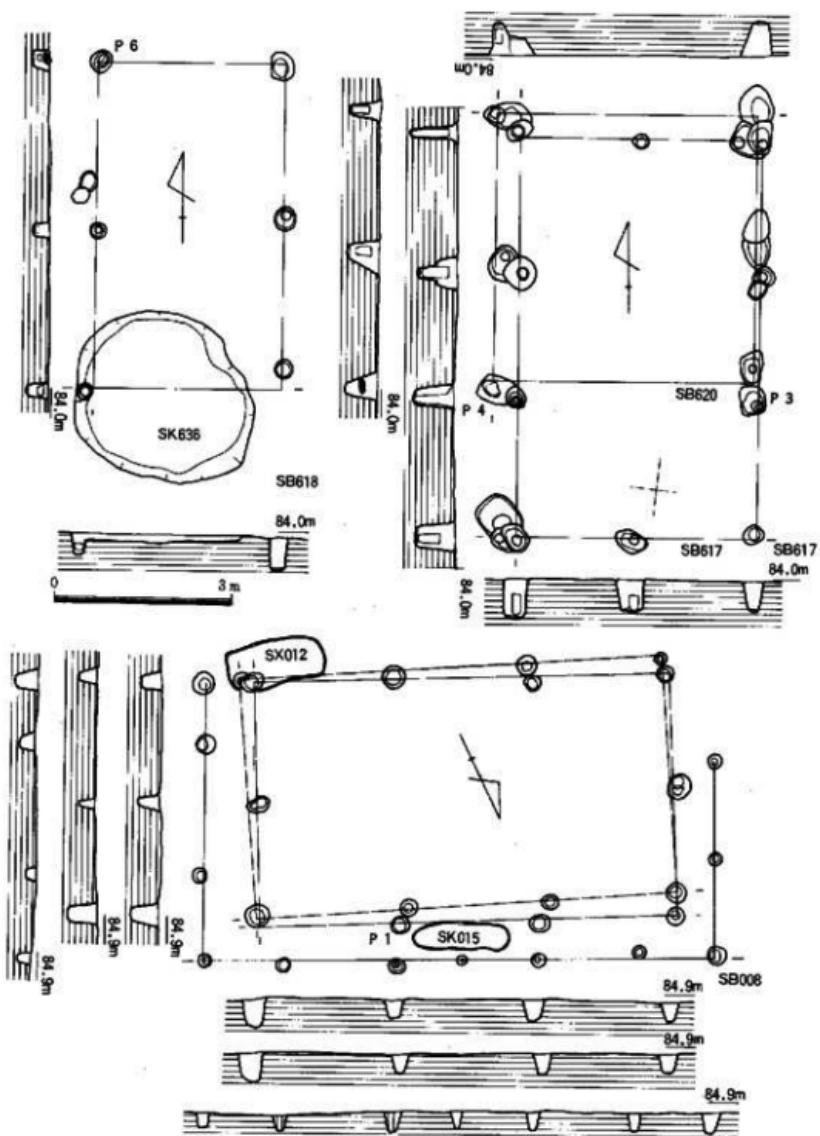


Fig. 34 C地点掘立柱建物実測図(2) (1/100)

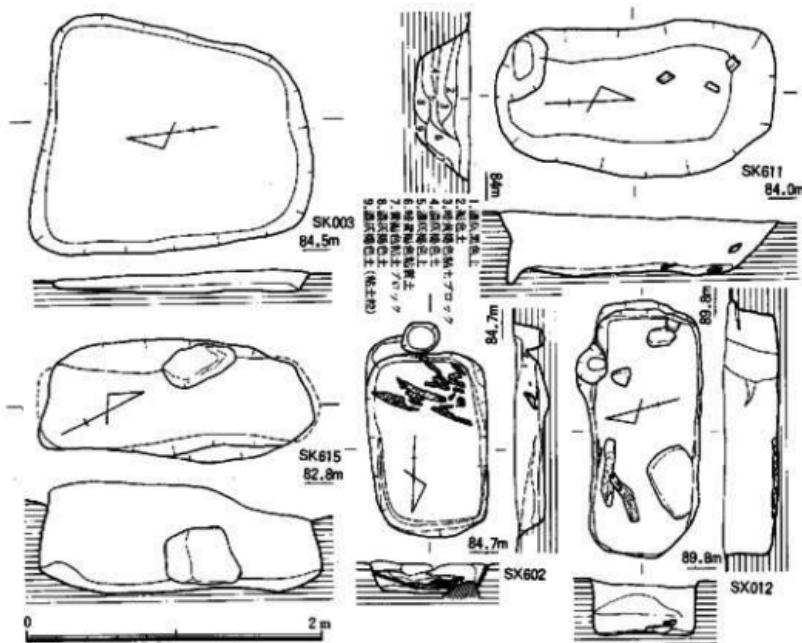


Fig. 35 C 地点中世遺構実測図 (1/40)

狭い。柱穴は30~55cmの円~楕円形プランを呈し、深さは60~80cmと深い。覆土はSB616と同じである。主軸方向はN-0°-Eである。遺物は糸切底の土師皿片が出土したがいずれも小片で詳細は不明である。446がP3より出土した。青磁碗で淡灰緑色を呈す。

SB618 (Fig. 34) SB617の東1m弱に並置する1×2間の掘立柱建物である。梁行は3.2m、桁行は東西で若干の差異があり、東側が全長5.2m、西側は全長5.6mで西側がやや長い。柱穴は25~45cmの円形をなし、深さ25~75cmを測る。径12~15cmの柱痕跡が確認された。P6では挙大の転石が2個重ね敷きされていた。覆土はSB617と同じである。また、南側ではSK636を切る。主軸方向はN-1°-Eである。

SB620 (Fig. 34) SB617と複数し、これに切られる。梁行は4.4mと広く、柱間2.2mの補助柱の存在も考えられる。桁行は4.7mである。南東隅柱から柱心までの距離が30cm程短くなり桁行に若干の差異のあるSB618と同形態を示す。柱穴は短径40~55cm、長軸65~80cmの楕円形を呈し、深さは50~75cmを測る。またP4には扁平な礎石が敷かれていた。覆土はSB617と同じである。

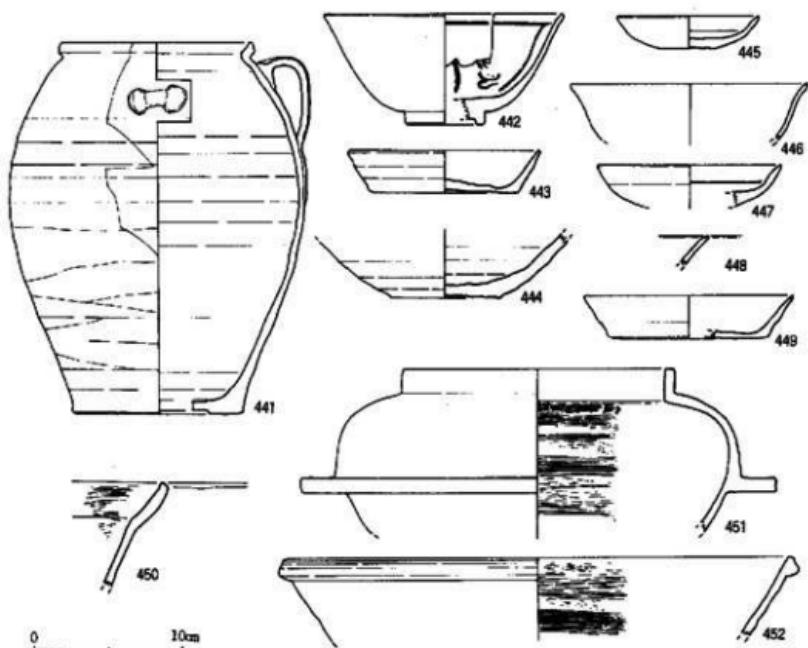


Fig. 36 C 地点中世遺物実測図 (1/4)

SK003 (Fig. 35) SB004のすぐ西に位置する土壇で台形プランを呈す。深さは5~7cmと浅い。SB004、005と同じ黄褐色土ブロックをふくむ暗黒褐色土を埋土とする。遺物の出土はない。

SK006 (Fig. 33・36) SB005内の東側に位置し、底内に納まる。主柱穴に切られる。台形プランを呈し、長、短辺は梁に平行する。覆上も同じで何らかの関連を持つと思われる。443、444が出土した。443は糸切の板目圧痕を持つ壺で復元口径13.1cmを計る。444は須恵質で壺等の底部と思われる。

SK015 (Fig. 34・36) SB008の南側に主柱穴と底の間に位置する。長楕円形プランを呈し、深さ7.4cmと深い。447、448を出土した。447は青磁皿で淡灰緑色を呈し、貫入が著しい。貝込みに花文がみられるがはっきりしない。448は口ハゲの白磁の口縁部である。

SK611 (Fig. 35・36) SB617の北西約2mに位置する。隅丸長方形プランで、断面形は逆台形を呈す。床には小さな凹凸があり、南西隅には小ピットがある。450~452を出土した。450は土鍋で内面を横方向の刷毛調整、外面はナデで煤が多く付着する。452も土鍋で口縁部に突帯を有す。451は羽釜で黒褐色を呈す。銚より下に煤が付着する。

SK615 (Fig. 35・36) 調査区の北東隅に位置する上塙で、長方形プランを呈す。側面は急峻に立ち上がり、両小口は小さく袋状に挿入する。西壁には板状の花崗岩が置かれていた。土塙基の可能性もある。449が出土した。糸切の板目压痕を有す坏である。復元口径16.3cmを測る。

焼土塙 (Fig. 35) 21基を検出した。北部と南部の2グループに大別できる。南部は比較的小範囲にまとまり、長方形プランを呈すものが大勢をしめる。これに対し北部では散在し、円一不整椭円形のものがみられる。遺物はほとんどない。SX012はSB008の主柱穴によって切られしており、その上部が推定できる好例である。SX010には木炭が充填された状態で出土している。

5. D 地点の調査

D 地点は C 地点のある丘陵状の尾根地の落ち際から谷部にあたる。排水路計画に伴う816m²の調査である。現状の棚田の削平による段差で1~5区に便宜的に区分けした。耕作土、床土直下の淡黄褐色砂質土上面で遺構を検出したが、1区と2区間は縁が表土下に広がり、遺構を検出できなかった。検出した遺構は、焼土塙7基、土塙3基でいずれも中世を通過するものはない。

焼土塙 (Fig. 37) 150×90cm前後の土塙の壁が焼けており、床には炭が堆積する。他の調査

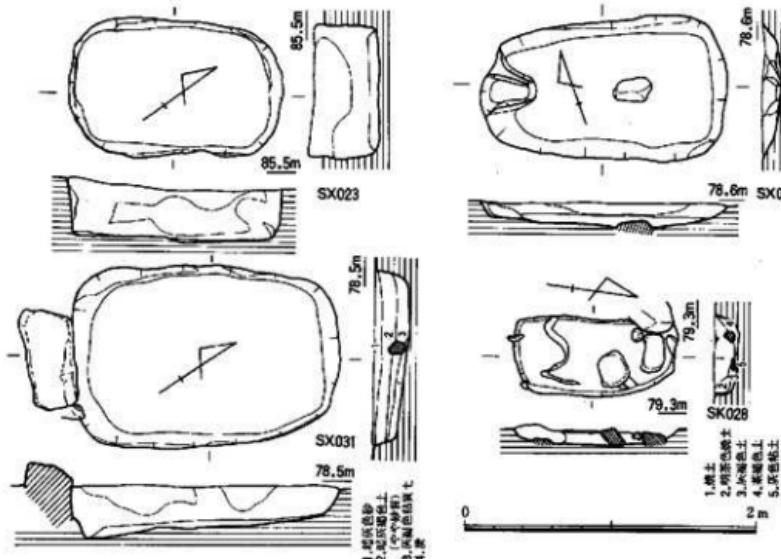


Fig. 37 D 地点遺構実測図 (1/40)

区と同様のものである。

SK028 (Fig. 37) は焼土壙より小ぶりの土壙に焼土が溜まり、20cm大の礫が2個置かれていた。炭と若干の骨片が混ざり、火葬墓等の性格が考えられる。

遺物 (Fig. 39) は焼土壙から糸切の板目压痕を持つ土師皿片が出土した。また、1区北端の

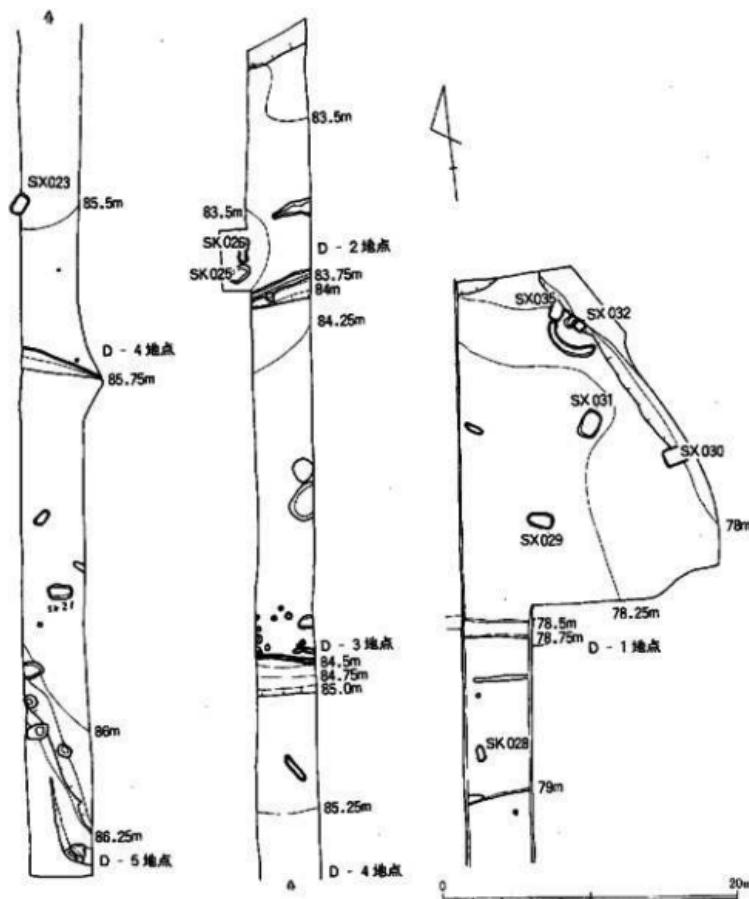


Fig. 38 D 地点遺構配図 (1/400)

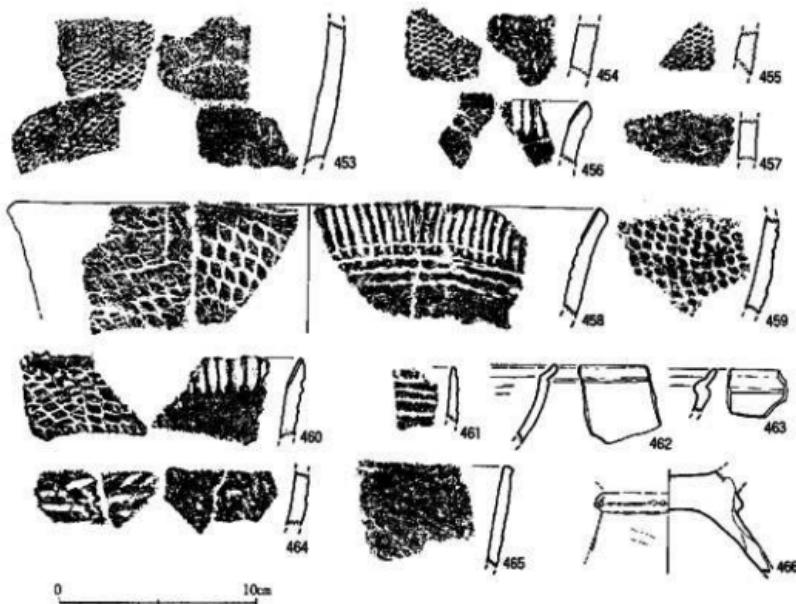


Fig. 39 D 地点遺物実測図 (1/3)

淡黄色砂質土より押型文土器が出土したほか、数点の繩文土器が出土している。453～460は押型文土器である。453は横走する細かな指円押型文土器で灰茶褐色を呈す。内面はナデ調整である。455は小片で上下が不明だが、横走するものと思われる。456は口縁部片で外面は、横走する指円押型文が重なりあう。施文後、口唇部はナデを施す。内面は棒状工具による刺突文を施す。457は指円押型文を浅く横走施文する。2次焼成を受けたのか淡橙色を呈し、器面が粗れる。3 mm大までの砂粒を多く含む。458は指円押型文を破片の左半分は左上がりの斜方向、右半分をほとんど縱方向に施文する。内面は口縁部に縱方向の刺突文を施した後、左から右へ横方の波状沈線を引く。459は右上りに斜走施文する。文様の彫りが深い。460は破片の右半が斜走、左半分が横走する指円押型文で、内面に刺突文を施す。464は1本の降帯文に直交して凹線を施す。461～465は晩期の土器片である。461は4本の沈線を持つ。浅鉢になるものか。462、463は浅鉢で、462が精良な胎土であるのに対し463は砂粒を多く含む。465は斜方向の削り調整を施す。466は高壺または台付鉢の脚部であろう。脚部の付け根には低い突帯を貼付し、刻目を施すようにもみられる。

6. E地点の調査 (Fig. 40・41)

道路および用水路計画地で1024m²を調査した。現況の道路、水路等で3区に分かれる。

1区は西を現在の用水路に接する。調査区半分は旧河川が占め、残りも河川堆積による砂質土である。遺構は特に見られず、河川堆土中に玉縁口縁の白磁片等が少量みられたのみである。

2区は、床下の黄褐色砂質土上面を遺構面とした。南側多くは礫を多く含む。北西隅は旧河川への北西方向へ傾斜する。焼土壙2基、土壙2基を検出した。SK051は長楕円形の浅い土壙

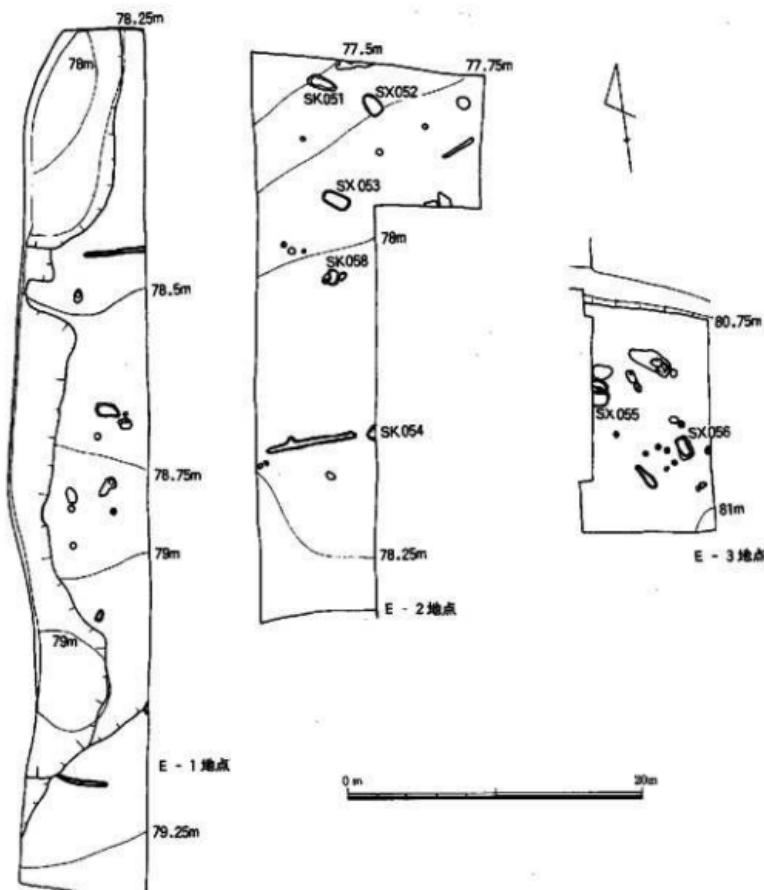


Fig. 40 E地点遺構配図 (1/400)

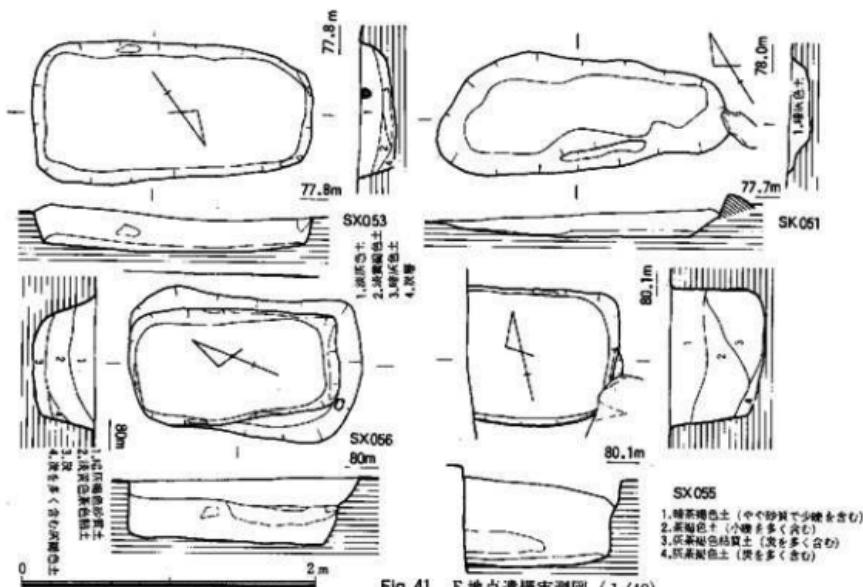


Fig. 41 E地点遺構実測図 (1/40)

で炭まじりの暗灰色土を埋土とする。遺物はみられない。

3区は黄褐色砂質土上面で焼土壤2基、土壤1基を検出した。焼土壤は長方形を呈し、他地點と変わりない。SX056、055とともに残りが良い。遺物は少量で、瓦器、土師皿の少片を採集したくらいである。

2区と3区の間は、表土下は疊層が広がり、遺構を確認できなかった。また、地形の傾斜に沿って走る現在の水路は、旧河川を反映する場合が多いようだ。

7. F地点の調査

F地点は最も東の調査区で、県道入部中原停車場線に沿った排水路計画地と、その南端から西に延びる道路計画地1025m²の調査である。D地点、C地点の谷からもやや離れ、表土下の疊層も減り、黄褐色土、黄褐色砂質土層とやや安定した地盤になる。現在の水路等で5区に分けた。

1、2区では少ないながらも焼土壤を検出したが、3区では遺構を確認できなかった。

4区は1棟の掘立柱建物と、7基の焼土壤を集中して検出した。このうち、掘立柱建物が焼土壤 SX095を切るのを確認したのは注目できる。また、縄文時代晩期の包含層を確認し、500点あまりの遺物が出上した。5区では焼土壤2基、土壤1基を検出した。

SB097 (Fig. 43) 4区南端に位置する。2×3間の掘立柱建物で、西に庇が着く。梁行は

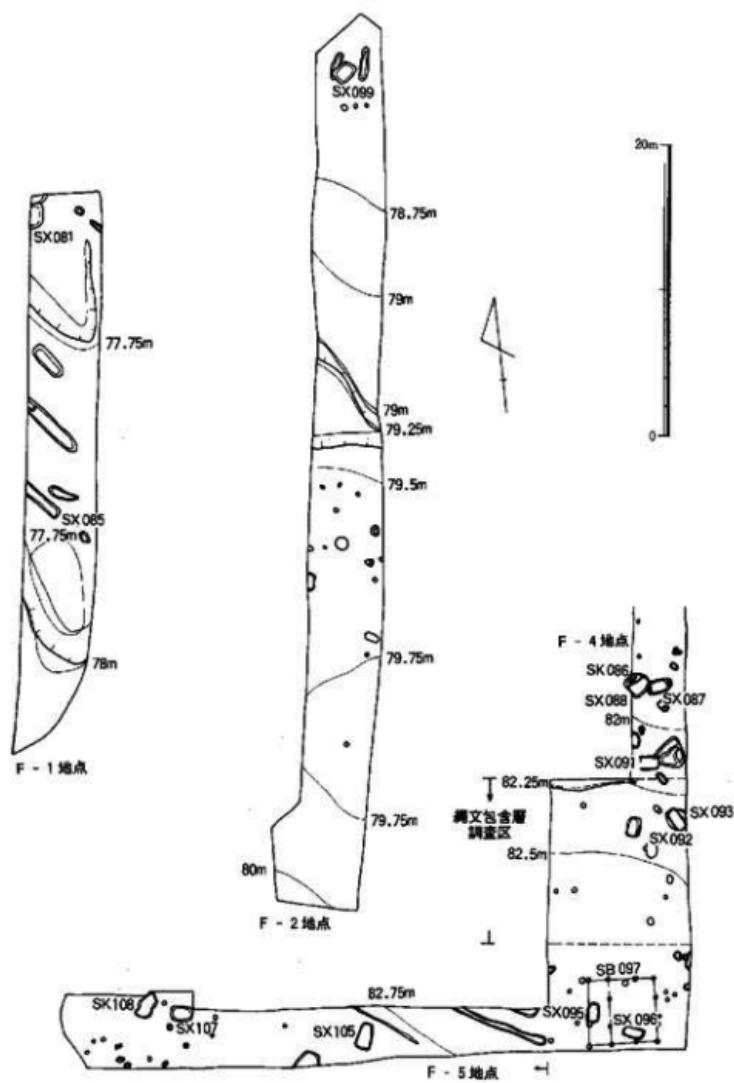


Fig. 42 F 地点造構配図 (1 / 400)

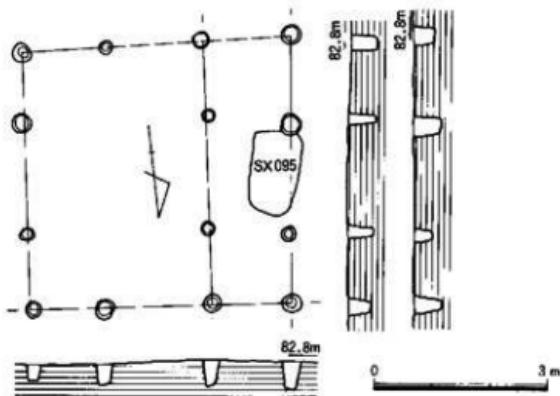


Fig. 43 F 地点 SB097実測図 (1/100)

3.1m、底まで含めると4.4mを測り、桁行は4.4mを測る。柱間隔は不揃いで、桁行の中2本の柱間隔が広く、庇部分も北側が若干狭い。この庇部分は母屋に取り込まれる可能性もある。柱穴は径22cm～35cmの円形で深さ30～50cmを測る。覆土は黒褐色土でC地点のSB005等に類似するが、黄褐色土ブロックを含まない。柱痕跡は検出できなかった。時期は確定できないが、覆土からしてSB005等と近い時期を考えてよいと思われる。

SK086 (Fig. 44) 焼上層 SX088に切られる。不整形を呈し、西側に段がつき、ピット状に落ちる。茶褐色土を覆土とする。遺物は出土しなかった。

焼土塙 (Fig. 44) 4区を中心に12基を検出した。SX085は不整梢円形の掘り込みに木炭が並べて置かれ、炭が覆っていた。4区検出のものは、長方形を呈し、大きさも似かよったものが多い。SX095はSB097に切られる。C地点のSX012がSB008に切られるのと同じ前後関係を得ることができた。

縄文時代の包含層 (Fig. 45・46)

4区の北半の赤みを帯びた黄褐色土層中より500点余りの土器片と黒曜石、サスカイトの剣片が出土した。また、風化のすんだ安山岩が、特に加工を加えられていない状態で多く出土した。包含層は5～15cmと薄い。現水田の段差の落ち際にあたり、さらに広がっていたものが削平をまねがれたものと思われる。北西部には、下層から頭を出す40～50cm大の礫が多い。この包含層が遺構の埋土とは考え難い。

467～493は粗製品を中心とした鉢、深鉢である。467～473、475、476、480は外反する口縁を持つ。467は強く反湾し、口縁部は粘土の折り返しにより外面にわずかに肥厚する。口唇に刻目を1点入れその部分のみわずかに隆起する。頸部下半はナデ調整が施されるが、上半は削られ下半とは小さな段がつく。内面には、先が2つに割れた工具による刺突痕が2つみら

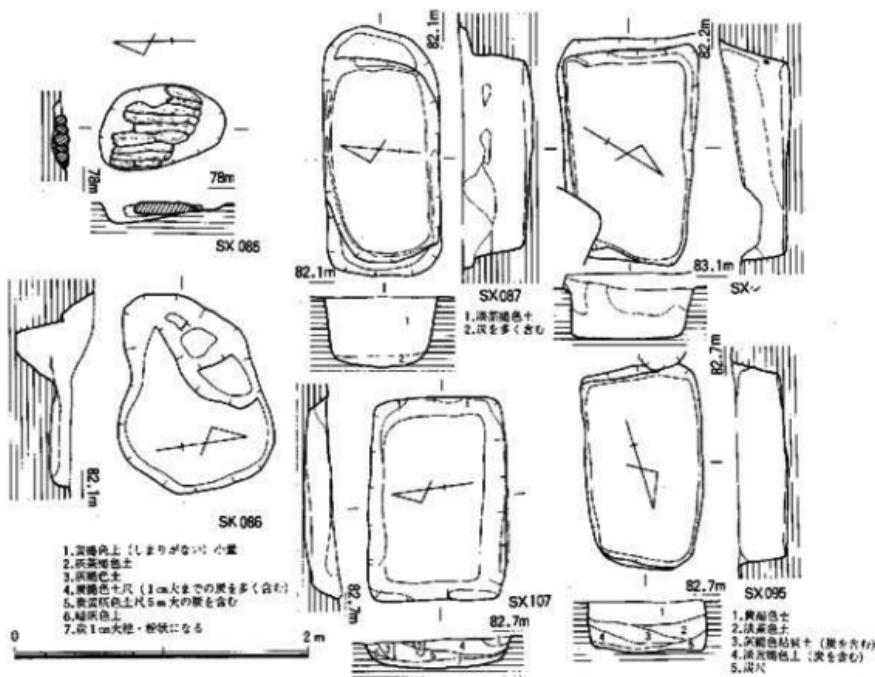


Fig. 44 F 地点上塙・焼土窯実測図 (1/40)

れる。焼きはややあまい。468は467に似た形状を持つものの、小型品になる。口唇部には幅8mmの棒状工具による刻目を入れる。頸部上半は2枚貝条痕の後、軽くナデるが1次調整がかなり残る。下半はナデがやや丁寧である。内面は箇ナデを施す。469は緩やかに屈曲して、また胴部で曲るるものと思われる。470は頭部下半で急に曲がる鉢である。頭部外面に燐ネクタイ状の突帯を貼付する。471、472は若干内湾する口縁部が頭部で屈曲し、口縁帯状を呈する。473は横方向のナデにより器面をならした後、右上がりに2枚貝条痕を施文状に施す。胎土に球形の有機物が入っていたためか、気泡状のくぼみがみられる。476は鉢の肩部で口縁部への器壁が薄い。

その他493までは、直立または内湾する口縁部を持つ。484は内湾が強く、外面の破れ口付近で若干外反する。頭部、胴部に屈曲部を持ち、口縁帯状成す471・472に似た器形をもつ可能性もある。486も同様か。調整は、各面を条痕、削りのものが目立ち、内面は丁寧なナデを施すものが多い。487、488は内外面ともに磨きに近い箇ナデで器面は平滑に仕上げる。489は各面

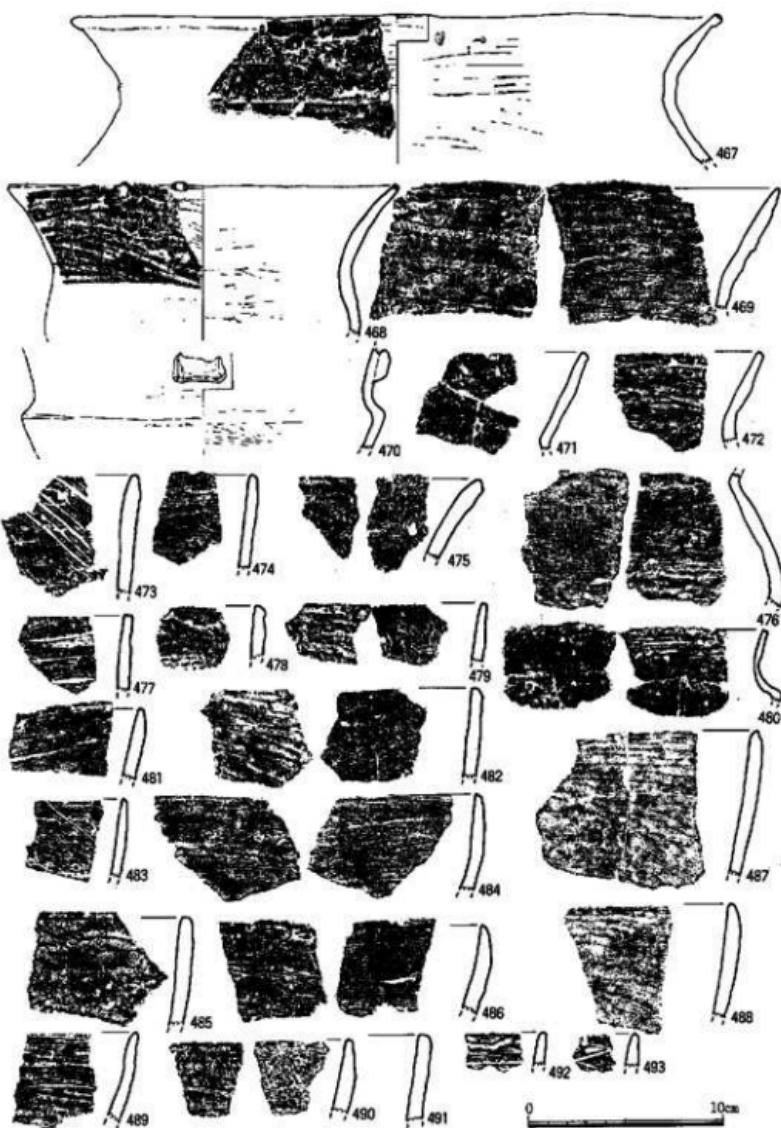


Fig. 45 F 地点繩文土器尖測図(1) (1 / 3)

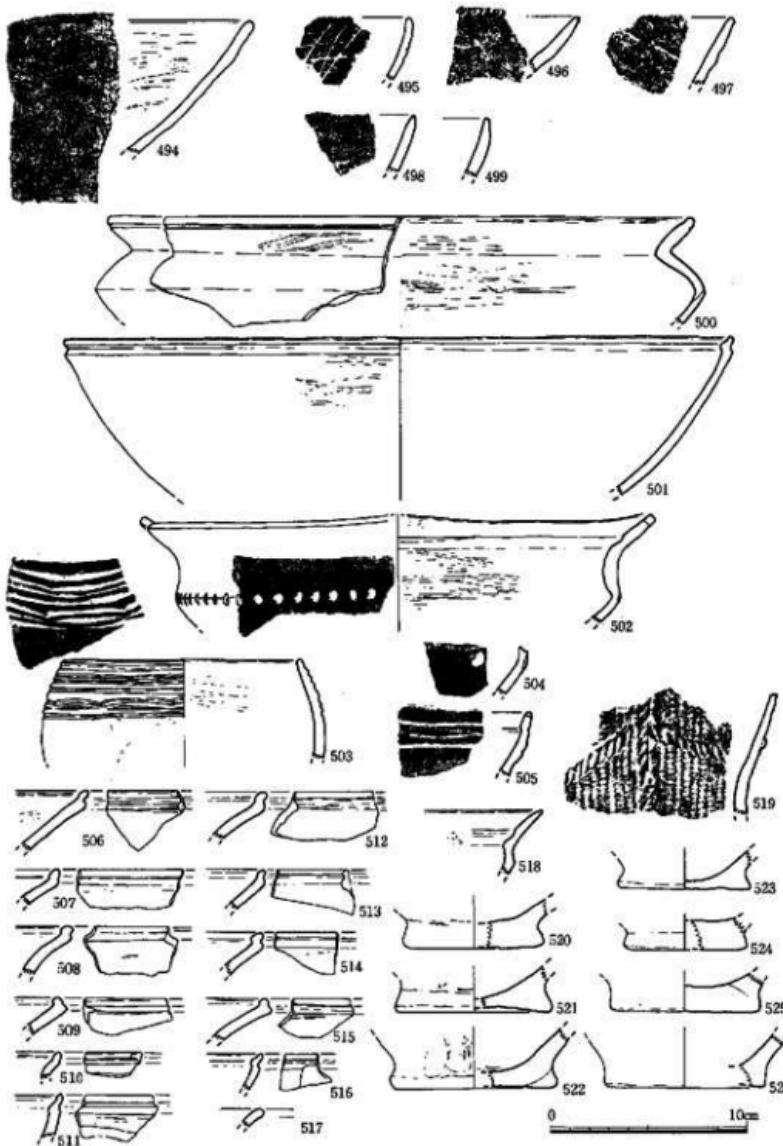


Fig. 46 F 地点绳文十器尖测图(2) (1 / 3)

を条痕調整するものの、内面には研磨を施し、焼きも固い。

494～499は胴部から直口する浅い壺形になるものと思われる。495は外面がやや内傾した口縁をなし内湾する。外面に細く鋭い沈線を格子状に施す。沈線は、横方向に施文した後、右上から左下へ斜方向に施文する。496は口唇部に刻目を施す。この工具は、先が割れているようである。496、497は外面に接合線がみられる。498は口唇部を細く鋸る。

500～518は浅鉢を中心とした精製土器である。500は外反する口縁部が算盤玉状の胴部につく。口縁部は内外に沈線を施す。頸部、肩部は厚く、胴部は2.8cmと薄い。肩部内面を削りの後ナデる他は研磨調整を施し、特に外面は丁寧で光沢をもつ。502は波状口縁を成す浅鉢である。波状口縁頂部が欠け、全容は不明である。胴部が内に屈曲し、内湾する頭部がそのまま外反する。口縁部下1.5cmのところに削り出しの段がある。これは波状を成さない。胴部屈曲部には、左から右へ器壁を搔き取るように刻目を施す。柄等で凹んだ側面に赤色顔料が残る。全面を塗っていた可能性がある。503は球形を呈す碗形の鉢である。灰白色～淡灰色を呈す。7本の沈線を右から左方向へ施す。505は波状口縁を呈す。やや内湾する口縁部は内面に段があり頭部、胴部で屈曲して壺形の器形になると思われる。外面に3本の沈線を施す。506～509、512～515は長く外反する口縁部に小さな口縁帯が付き、胴部で屈曲する浅鉢である。510、511、516は8と同様の浅鉢、518は外反する口縁が直接胴部で屈曲すると思われる。519は外面に縄文を施し、縱方向、斜方向の突帯を貼付し、それをナデた後、突帯にヘラ状工具による刻目を施す。船元II式に属するものであろうか。520～526は底部破片で断面台形状を成す。

8. H地点の調査

H地点は調査区の南端に位置する。丘陵を東西に横断して走る道路、用水路の計画に伴う調査で調査面積は920m²である。試掘調査に基づいて土石流堆積物の氾濫がみられない区間を調

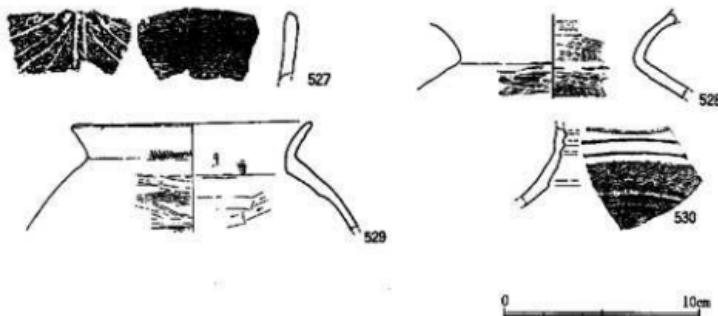


Fig. 47 H地点遺物実測図 (1/3)

査した。水田区画の段等により3区に小区を分けた。淡黄色砂質土層上面で遺構検出を行ったが、炭の散布地などもあったが、遺構は特にみられない。1区西半、2区東半は縁が露出する。1区と2区間に現在も使われている掘削による溝2本、2区と3区間に川を狭めて現在も使用している溝を1本検出した。後者は、2区から3区へ1.5m程落ちる際を流れる幅20mの河川で、C地点を通じD地点2区の北へ流れるものと思われる。

遺物 (Fig. 47) は近現代の染付の他は少ない。527は縄文時代晚期の深鉢の口縁部で、若干の隆起部をもつ。隆起部には縱方向の沈線を2本施し、それを中心に向側に下方に開く沈線を施す。528は頭部から胴部破片で頭部内面、胴部外面を細い研磨、頭部外面を横ナデ、胴部内面を刷毛調整を施す。橙色を呈す。529は古墳時代後期の甕で外面を刷毛目、内面を削り、口縁部に横ナデ調整を施す。530は須恵器の高杯の杯部で2本の突線の下に波状文を施す。

9. I 地点の調査

I 地点はD地点1区とE地点1区に入る河川の中間に位置し、両河川間の小丘陵状の高まりに於ける。淡黄褐色砂質土が比較的安定して堆積する。田面の切土工事によって削平を受ける543m²の調査である。狭い調査区内で10基の焼上塙と2基の土壙を検出した (Fig. 48)。

本調査区の焼土塙 (Fig. 49) はやや大きめで、方形に近いものが多く見られる。SX801は不整形な長方形を呈す。北側、東側からは浅い溝状の突出部がみられる。床には炭が10~20cm程度ある。この炭層には、東側の突出部から斜め方向に切る状態で、黄褐色砂質土が筒状に入っていた。送風口等の可能性もある。SX804は方形に近く、北東隅に炭を含む黄茶褐色土を埋土

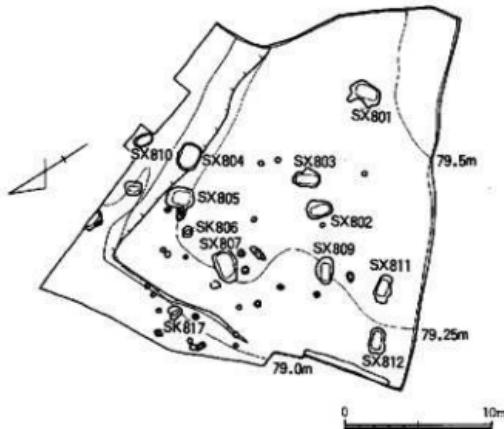


Fig. 48 I 地点遺構配置図 (1/400)

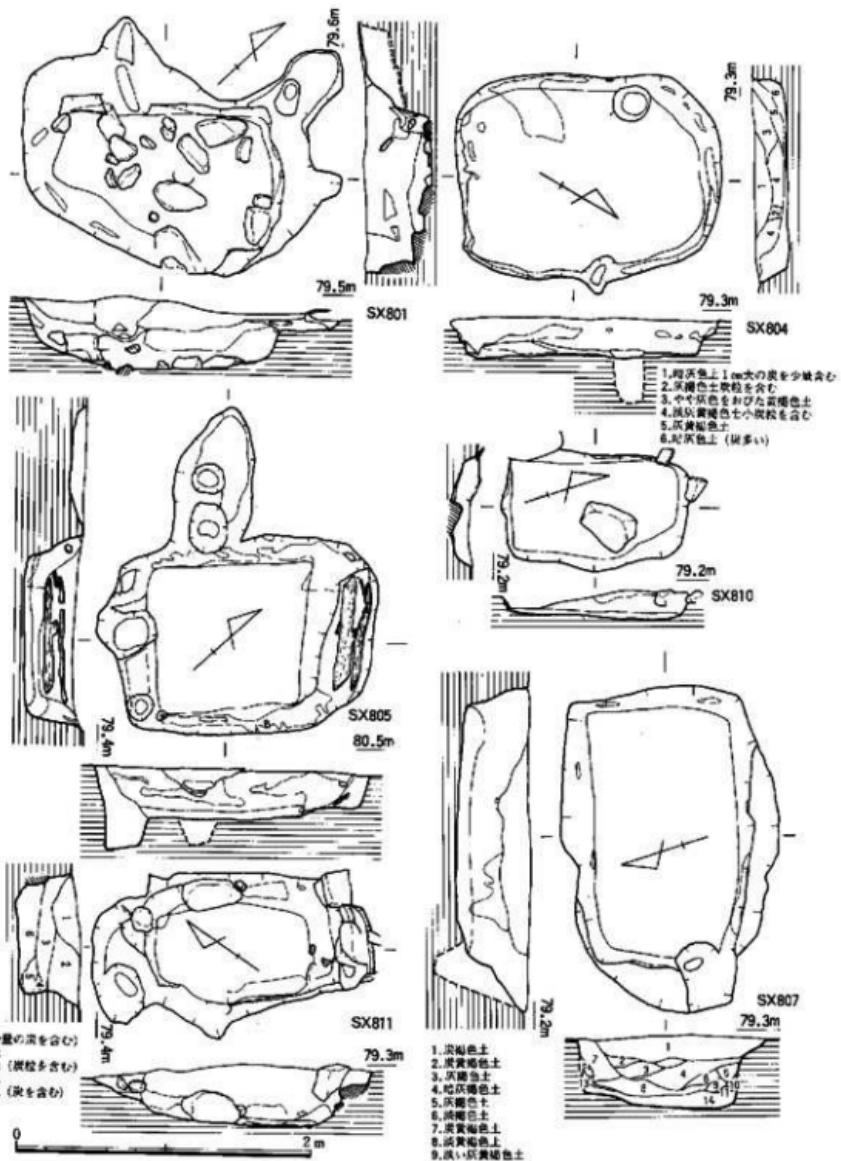


Fig. 49 I 地点造構実測図 (1/40)
11. 沼泥質土と礁土がまざる
12. 泥炭土に礁土がまざる
13. 泥炭土層は層次
14. 泥層 (特徴)

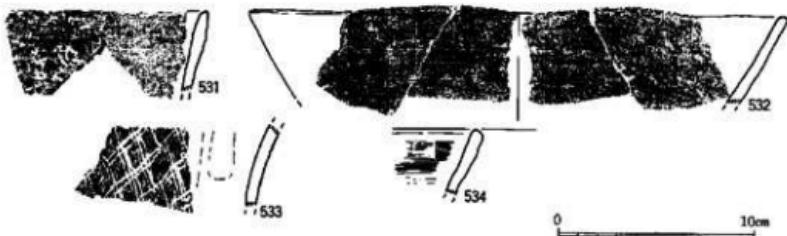


Fig. 50 1地点遺物実測図 (1/3)

とするピットがある。SX805は北西に延びる浅い溝状の炭を多く含む土壌を付設する。北壁には、焼土壌に残る木炭とは明らかに材質の異なる、広葉樹と思われる板材が横に立てて置かれる。この板材と焼けた壁の間は10cm程開く。他に埋置状態の判かる木炭片はない。これまで木炭が残る場合は、全てカシ等の針葉樹と思われる5~10cm幅の棒材が長軸方向または螺旋状に置かれていた。木炭になってはいるものの取り外されることもなく、壁を保護したり、木炭材を支える等の木炭にするのとは違う役割を果たすものと思われる。

遺物は、少ない。SX802から土師皿の小片が出土した。他にピットから繩文土器片が出土したが粗製の鉢であるほかは詳細不明である。図示 (Fig. 50) したのは表採品である。531は粗製深鉢で口縁部が厚く、口縁帯状でもある。532は研磨に近い横方向の箆ナデを内外面に施す半精製品である。若干内湾し、屈曲して肩部を持つ深鉢になる可能性もある。533は、外面に2本単位の斜方向の沈線を格子状に施す鉢等の頭部と思われる。断面の観察により内傾接合らしき砂粒の状態により図示したが、上下も傾きもはっきりしない。内外面ともにナデ調整である。図示した断面下端部で径20cm強くらいになると思われる。534は土鍋の口縁部で外面には煤が付着し、内面には細かい横方向の刷毛目がみられる。

10. J 地点の調査

本調査地点は今年度調査区の南東隅に位置する。「く」字形に曲がる道路、用水路計画部分1215m²の調査である。調査区の東側は丘陵の緩斜面で、赤色を帯びた黄褐色土層が広がり、部分的に藪が多く露出する。西側は深い谷部が埋没し、疊原になっている。この谷は、脇山小学校の下を通り、E地点に通じるものである。黄褐色砂質土、疊原上で繩文時代の埋甕1基、焼土壙14基を検出した。この他、現在の水田区画に沿う近現代の溝と段落ちを検出した。

SK901 (Fig. 51・52) 調査区の中央部に位置する。小石まじりの黄褐色砂質土に掘り込む不整円形の土壙内に、1個体の甕が主軸方位をN-10.5°-Eにとってほぼ水平に埋置される。535は粗製の深鉢で、大型品である。内面は黄茶褐色を呈し、削りのちナデ調整を行う。3~5cmごとに粘土接合線がみられる。外面は、胴部屈曲部より下は淡橙色を呈し、横方向の荒

い削り調整ののち大まかにナデる。下部は縦方向のナデがみられる。屈曲部より上は暗灰褐色～灰茶褐色を呈す。頭部から口縁部は荒い2枚貝条痕を施す。胸屈曲部付近は、幅4から5cmに煤が帯状に付着する。頭部下部には、約2cm間隔で並んだ径1cm程の浅い窪みがみられる。深鉢の上から左指をこの窪みにあてると、小指から人差し指が丁度はまる。製作時に抱えた時にできたものだとすると、右手は底部を持つことになる。

焼土壙 (Fig. 53) 14基の焼土壙を検出した。調査区分が「く」字状に屈曲するあたりが裸原の最高所になり、これを境として東西の2グループに分かれて分布する。東のグループは丘陵の緩斜面上に位置し遺存状

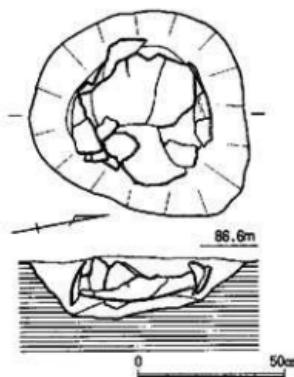


Fig. 51 J地点 SK901実測図 (1/20)

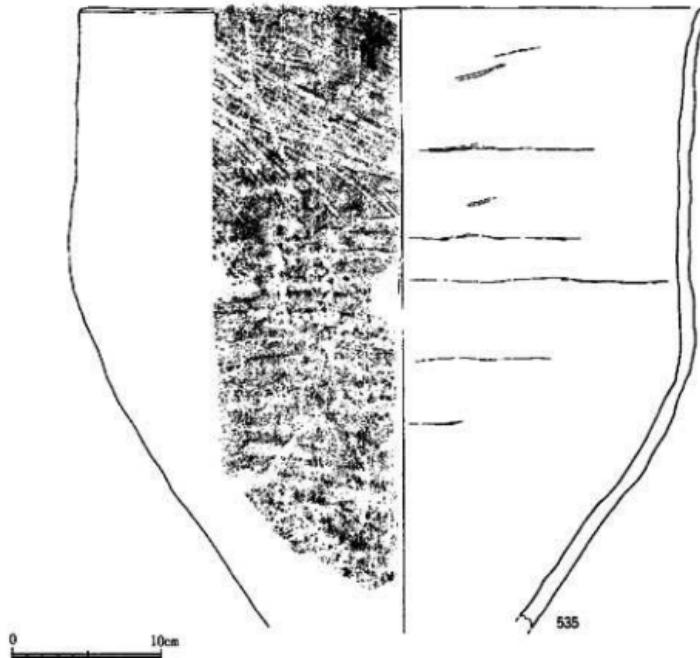


Fig. 52 J地点 SK901遺物実測図 (1/4)

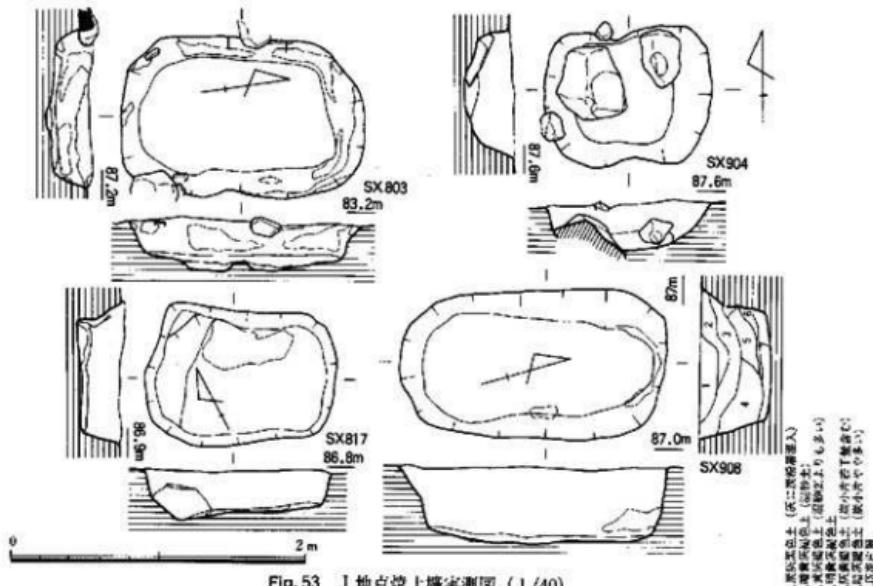


Fig. 53 J 地点烧土墙实测图 (1/40)

況が良好であるのに対し、疊原上の西側のグループは削平を受けたのか浅い。形態的には長方形プランで、グループ間差は特にない。

出土遺物 (Fig. 54~56)

調査西側の標原より绳文時代および中世の遺物が出土した。その他に水田に伴う溝より近現代の染付片等も出土している。

536は厚手のやや内傾する口縁部外面に、浅い条痕を沈線状に施す。角閃石を多く含む。繩文時代早期の上器であろう。

537-550は森B式系土器である。537-555は外面に器面調整の後隆帯文を貼付する。537は口縁部がやや聞き、口縁直下およびその4cm程下に細い隆帯文を貼付する。538はわずかに外反する口縁部直下に隆帯文を施す。539はやや聞く口縁直下に細い隆帯文を1条貼付する。540は3条の隆帯文を重ねている。天地は不明。541は低い隆帯文を3条貼付する。542の3条の隆帯文には、つまみによる抑揚がみられる。内面に2本の接合線が1.2cmの間隔で残る。543は断面鉢形の隆帯文を付す。544は2枚貝条痕をナデた後隆帯文を付す。545の隆帯文の上面には細い刻目を施し、下面には4mm幅の浅い刻目を施す。隆帯文直下には下端の刻目に対応して木口痕がみられる。内面は黄白色~灰白色を呈す。胴部下部は内汚がつよい。546は、隆帯文の上面に細く鋭い刻目を施す。548は、2条の細めで鋭い隆帯文を付す。上の隆帯文の下面には

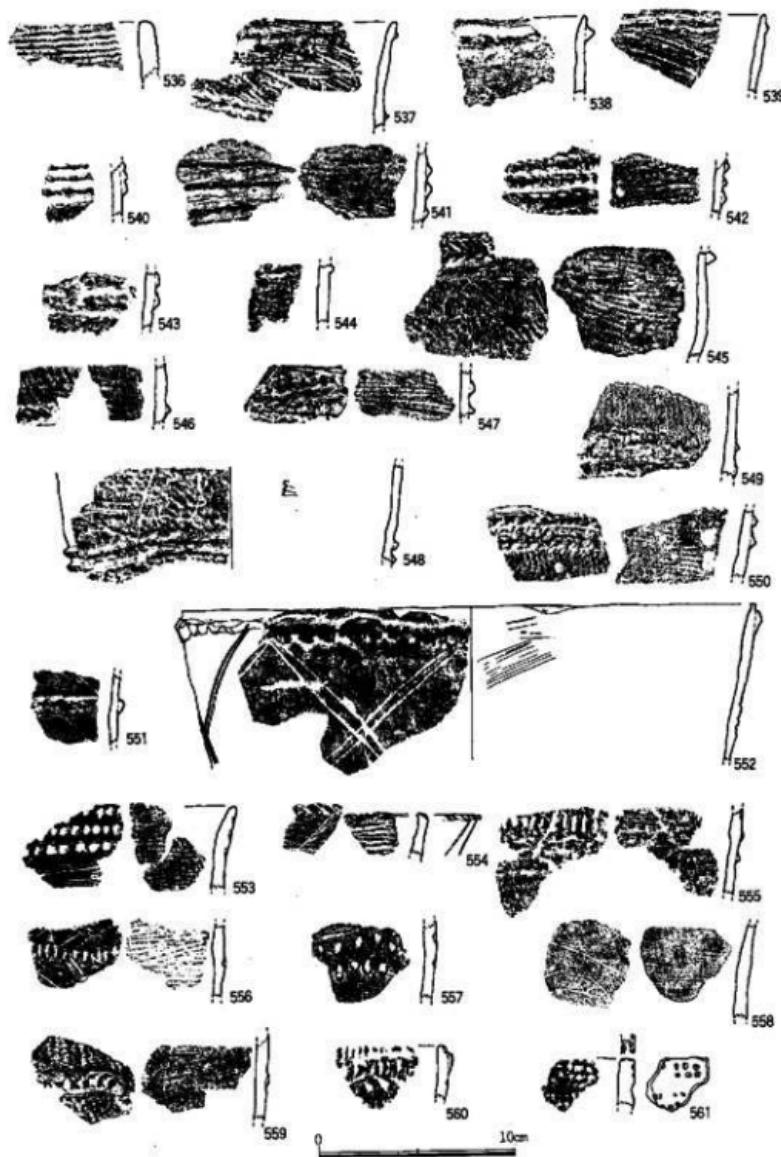


Fig. 54 J 地点植物实测图(1) (1 / 3)

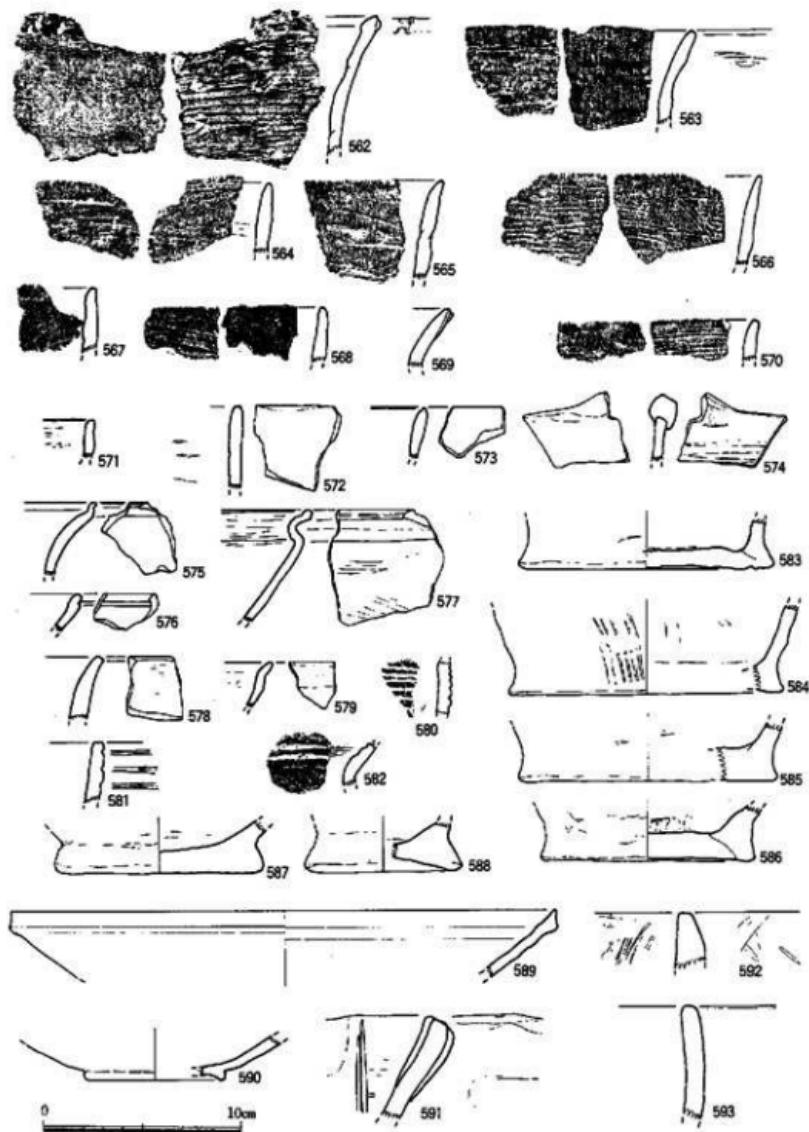


Fig. 55 J 地点遺物実測図(2) (1 / 3)

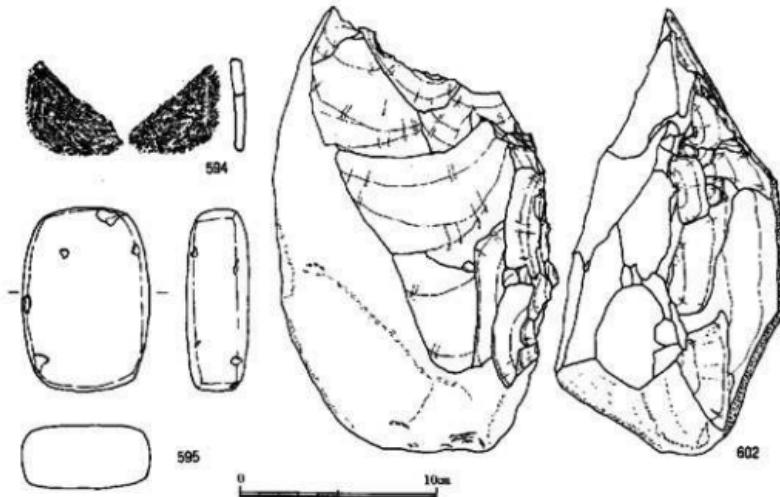
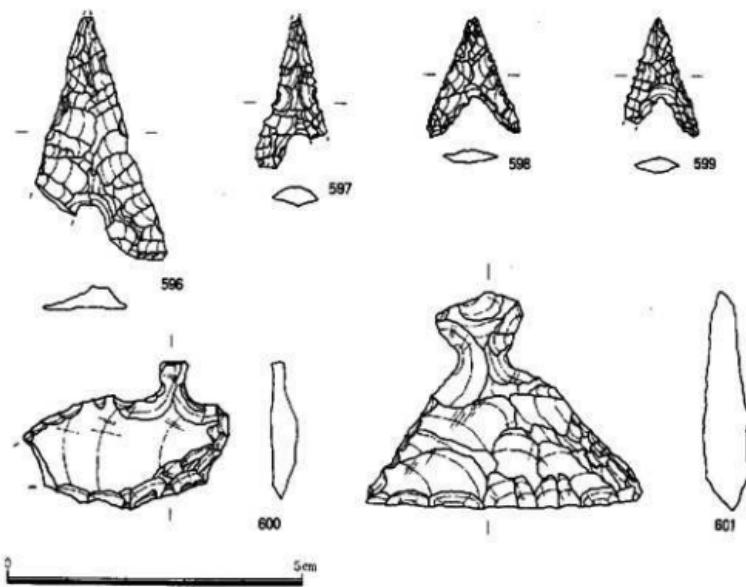


Fig. 56 J 地点遺物実測図'3) (1/1 + 1/3)

細い刻目を施す。549は擦過痕のみられる外面に低くだれた隆帯文を2条貼付する。550の2条の隆帯文はつまみによる押捺を有す。551は薄い器壁に、木目状の調整痕が残る。

552～558は沈線文、刺突文等を施す。552は口縁部直下に低く鈍い隆帯文を貼付する。隆帯文は不整形ながら下端は波状を呈す。その下には平行沈線文を描く。553は外反する口縁部に、3段の刺突文を施しその下に調整ともつかぬ細く鋭い沈線を少なくとも4本描く。554は外反する口縁部で口唇部を面取りし、内面に弱い突出部を形づくり、刻目を施す。外面は平行沈線を描く。555は細めの不整形の隆帯文と角ばった工具による刺突文を施す。556は細い平行沈線文を施し、その間に刺突文を施す。557は2条の刺突文を施す。工具は先が削れる。また1本の沈線が走るが、調整痕ともしれぬ。558は外面に浅く弧状を描く沈線を描く。

559・560は瀬戸内系の土器と思われる。559は绳文を施した器面に低い断面蒲鉾形の突帯を貼付し、先の割れた工具で刺突文を付す。560は口縁部直下に低い断面蒲鉾形の突帯を貼り付け、口縁帶状を呈す。口縁部、突帯に細く縦長の刺突文を施し、その下に丸い刺突文を施す。561は胎上に滑石を混入する。口唇部、口縁部直下、そして1cm程間をおいて、2段に刺突文を施す。

562～582は绳文時代晩期の土器である。562～566は外反する口縁部を持つ深鉢である。562は外反する口縁部に刻目を施す。口縁部内面を若干肥厚し、低い段ができる。疑似口縁状であるが、天地の誤りはないと思われる。568～573は器壁がやや薄手で小型の深鉢、鉢になるものであろう。574は口縁部にリボン状突帯をもつ深鉢である。575～579は浅鉢である。575・576は長い頸部に小ぶりの口縁帯がつく。575の口縁帯は外面に沈線が入るだけで形散化している。577は短く、大きく屈曲する頸部をもつ。578・579は外反する口縁部に胸部が付く。580は、寄せ深い沈線が入る。581は太い沈線を施す口縁帯である。582は頸部内面に2本の沈線が入る。

583～588は深鉢、鉢の底部である。583が後期の可能性がある他は晩期のものであろう。

589は須恵質の鉢である。590は土師質の壺の脚部、591は瓦質の摺鉢で注口を持つ。外面はナデ、口には横方向の刷毛目を残す。592、593は滑石製の鍋である。593は外面に煤が付着する。594は土器片を利用した土版である。595は磨石で側面に敲打痕がみられる。

596～599は黒曜石製の打製石器である。596はU字形の深い抉りをもち、直線的な側刃をもつ。先端部と片側の脚部を欠く。597は深い抉りをもち、細身の二等辺三角形を呈する。先端部と片側の脚部を欠く。598・599は抉りが深く細長い脚部を有する。598は完形品。600・601は安山岩製の横形の石匙である。側刃、刃部とともに直線的である。602は安山岩製の石核で前削面を打撃面として剥片剝離を進めている。20数枚の剥片が剝離された痕跡がある。

IV おわりに

今回の報告書は、縄文時代早期から中世までの雑多な内容となった。最後に若干の付け足しを行っておきたい。

最初に遺物一覧表の縄文晚期の土器について若干の補足を行なっておきたい。まず器種については深鉢、鉢、浅鉢を精製、粗製、半精製に分けて記述した。深鉢、鉢、浅鉢の区分は、口径と器高の比率を基準にしたが、形態的には浅鉢であるが比率からは鉢にしたもの（39）、小型で内湾気味の胴部を持ち大型の深鉢と区別する意味で鉢としたもの（34、35）などがあり、矛盾した個所がある。また、小片が多いため、口安としておきたい。精・粗に関しては、主に器面調整によって区別した。見殻条痕、削り調整等で仕上げたものを粗製、研磨調整で仕上げたものを精製としたが、削りきれないものが多い。特にナデ調整や範ナデ調整で仕上げた深鉢、鉢については、粗製品とは言い難いという程度の意味で半粗製という用語を用いている。また、浅鉢としてはやや粗い範ナデ風の調整のものも精製品としている。浅鉢=精製品という意識から、客観的に分類できていない部分がある。次に器面調整の項目のうち「条痕」は貝殻条痕および工具不明のものを含み、「削り」は条線がなく砂粒の動きが目立つ粗い調整を一括している。「板ナデ」は刷毛目風の痕跡を持つものから浅い擦痕の見られるものも含んでいる。「範ナデ」は研磨状の幅の細い平滑な面をもつもので光沢はない。丁寧なものには、研磨との区別がつけ難いものがある。以上各項目とも基準を十分に検討しないまま記載している。今後、それぞれ土器様式を説明する要素となり得るよう、また使用時の認識のあり方を語り得るような分類整理ができたらと思っている。

次に出土遺物のうち主体を占める縄文晚期の土器の位置付けを考えてみたい。まず深鉢には、口縁部が外反するものと全体に内湾するものがある。外反するものには、長い肩部を持つもの（26、27）、頸部に削り出しの段がつくもの（28、108）、頸部から緩やかに外反するもの（29、106）、口縁帯を持ち、頸部で強く屈曲するもの（188、342）などがある。内湾するものには、34、35のような小型品もある。鉢、深鉢のほとんどが粗製品で、精製の明瞭な口縁帯を持つものは341くらいである。浅鉢は、長く張り出す頸部に口縁帯のつくもの（95、189）、短かい頸部で口縁部内前に段がつくもの（96、501）、扁半球形の胴部をもつるもの（7、49）、口縁帯に沈線を施し、塊状の胴部になるもの（42、102）がほぼ定形化した形態をなす。これらに577のように外反する頸部を持つ古手のものから、235のように長行遺跡¹¹で刻目突帯文土器に併行するものまでが加わり、時期的に幅を持つ。

近年、北部九州においても、大石式を3型式に分ける編年案が発表されている¹²が、古閉式の新しい段階に併行する時期、つまり広田Ⅲ式と黒川併行期を埋める時期についての資料が不十分な感があった。今回脇山遺跡で出土した、95等の頸部が長く張り出す浅鉢、102等の碗形

で口縁部に沈線文を施すもの等は、十分とは言えないが、この時期にあたる土器群として位置付けられよう。ただし95に代表される長く張り出す頭部を持つ浅鉢は、黒川式と共に出土する例も多く、位置付けがはっきりしない⁽¹⁾。口縁帯、沈線等が退化しながら時期幅を持つものであろうが、これを含めて各器種の系統変化を明確に説明していく必要がある。とりあえず、今回掲載した晩期土器のほとんどは、古闕式の新しい段階から黒川式併行期としてとらえておきたい。

今回、石器に関しては製品の一品しか掲載できず、特に剝片石器等の観察ができなかった。その中で、打製石斧がみられないことには注目しておきたい。また、307、426、427は土偶の一部である可能性もあり、同時期の類例を持ちたい。

A地点、D地点では押型文土器、J地点では轡式系の土器が出土した。後者は野口、阿多タタイプ、曾根式併行期を中心としたものと思われる。

古墳時代については、C地点で住居跡を検出できたものは貴重である。この住居跡の他は、単体で出土する土器のみで、その性格は不明である。

中世に関しては、昨年以來、土地開発史に注目してきたが、4次調査の会田地区⁽⁴⁾に統いて、C地点、F地点で建物群を検出する事ができた。特にC地点は小集落を成し、当時の景観が思われる。ただし、SB004、005、008と、SB616、617、618、620は主軸方向、覆土が若干異なっており、時期差を持つ可能性もある。

以上、今回の報告分の成果を簡単に振り返ったが、検討し残した問題点が多い。辛い平成3年度に行った周辺の調査でも、縄文時代早・前・晩期の遺物、中世の集落を検出している。その報告の時点では、今回の分を含めて一步進んだ議論ができると考えている。

注)

- (1)財団法人北九州市教育文化事業団 1983『長行遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第20集
- (2)小池史哲 1982「福岡県二丈町広田遺跡の縄文土器—晩期広田式の設定—」『古文化的論集』森貞次郎博士古稀記念論集
- (3)横口達也 1985「日本における縄作の開始と發展」『石崎曲り田遺跡』今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告第11集
- 妹尾周三 1991「縄文時代晩期『広田武士器』再考」『考古学研究』151 第38巻第3号
- (3)大分等では古闕式併行期に當てられている。
- 高橋信武 1982「大分県宮地前遺跡の採集資料—大分県の晩期前半を中心とした土器編年一」『赤れんが』第2号等
- また次には近畿地方での位置付けでこの土器についてふれられている。
- 家根祥多 1990「西日本における縄文後・晩期土器の編年研究」『縄文時代』
- (4)福岡市教育委員会 1990『脇山II』福岡市埋蔵文化財調査報告書 第269集

付編 土器の赤色塗彩に用いられた赤色顔料について

福岡市埋蔵文化財センター 本田光子
宮内庁正倉院事務所 成瀬正和

脇山A遺跡群5次調査で出土した土器7点に赤色塗彩が認められるかどうか、またそれらに用いられた赤色顔料について顕微鏡観察とX線分析（蛍光X線分析・X線回折）を行い、赤色顔料の種類や特徴を調査した。試料の一覧と分析結果及び推定される赤色顔料の種類をTab. 2に示した。

試料

土器の赤色塗彩の残りはその埋蔵環境に大きく左右される。焼成後の赤色塗彩は特にその影響を受け残りが多いものが多い。今回の資料は赤く見える土器7点であるが、全体に悪い。特に313、315はきわめて僅かであり、314は肉眼では赤色顔料は認められなかった。他も凹部に少し付いている程度であった。全体にX線回折の測定には付着面積・量が足りないようである。

顕微鏡観察

光学顕微鏡、光学顕微鏡により反射光で検鏡した。検鏡の目的は、赤色顔料の有無・状態・種類を判断するものである。土器の赤彩に用いられる顔料はベンガラ（酸化第二鉄）と朱（硫化水銀）であるが、両者は特に微粒のものが混在していなければ検鏡により見極めがつく。また上器片をそのまま反射光により40~100倍で検鏡し、赤色顔料の有無、その種類、付着残存状態を観察した。また、赤色部分から針先に付く程度の量を採取しプレパラートを作成し、透過光・反射光40~400倍で検鏡した。赤色顔料としてはベンガラが認められた。出土ベンガラにはいわゆるパイプ状粒子と呼ばれている管状の粒子が含まれることがあるが、今回の試料には見いだされなかった。

蛍光X線分析

赤色顔料の主成分元素の検出を目的として実施したものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業製蛍光X線分析装置を用い、X線管球：クロム対陰極、印加電圧：40kV、印加電流：20mA、分光結晶：フッ化リチウム、検出器：シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2θ）：10~65°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。赤色顔料の主成分元素としては鉄のみが検出された。その他にマンガン、ストロンチウム、ルビジウムなどの元素が検出されるが、それらはみな主として胎土部分に由来するものなので、省略し、水銀および鉄の有無のみ表中に記してある。但し鉄は胎土部分にも必ず含まれ、顔料の採取を行わ

ない今回の分析では赤色顔料由来のものとの区別は困難である。

X線回折

赤色の由来となる鉱物成分の検出を目的としたものである。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機㈱製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球：クロム対陰極、フィルター：バナジウム、印加電圧：25kV、印加電流：10mA、検出器：シンチレーション計数管、発散および受光側スリット：0.34°、照射野制限マスク（通路幅）：4mm、ゴニオメーター走査範囲（2θ）：30~66°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。赤色の由来となる鉱物成分は同定されなかった。この他、石英、長石などが確認されたが、それは主として胎土部分に由来するものなので省略している。

まとめ

以上の結果から推定される赤色顔料の種類を表に示した。今回はすべて赤鉄鉱が同定されなかったが、一般に赤色顔料の付着量が少ないものや焼成前丹塗りについては、X線回折では赤色顔料に由来する鉱物が検出できない場合も多い。今回は検鏡結果と蛍光X線分析で水銀、鉛が検出されていないことから併せてベンガラと推定した。

縄文土器の赤色塗採は当初よりベンガラが使われ、朱（硫化水銀 HgS）は後期後半を中心に比較的多く用いられる。今までの分析例から見ると、北部九州地方では晩期前半まで朱がベンガラと同じように使われている。今回の6点はすべてベンガラであり、朱を用いたものはなかった。

赤色塗彩が予想される器種は浅鉢、鉢であり、これらの破片にはできれば洗いの段階で注意したい。彩文土器の場合は出土後即のバインダー処置が定着しつつあるが、縄文土器にも同様な処置を行いたい。

Tab. 2 赤色顔料の分析結果

試料 No.	蛍光分析		X線回折		顕微鏡観察	赤色顔料の種類	押岡（遺物番号）
	鉄	水銀	赤鉄鉱	辰砂			
310	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 17 (255)
311	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 8 (38)
312	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 17 (253)
313	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 17 (251)
314	+	-			?	?	Fig. 8 (32)
315	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 12 (102)
316	+	-	-	-	ベンガラ	ベンガラ	Fig. 8 (42)

※ +は検出、-は未検出を表す

Tab. 3 造構一覧 表 A 1 は A 地点、1 区を、C 1 は C 地点、1 区を示す。

地点	造構番号	造構の種類	平面形	縦×横×深さ(cm)	地点	造構番号	造構の種類	平面形	縦×横×深さ(cm)
A 1	SX151	焼土壙	長 方 形	180×138×45	A 10	SK347	土壙	積 円 形	82×40×23
A 2	SX153	焼土壙	長 方 形	162×84×50	A 9	SX348	焼土壙	長 方 形	167×110×15
A 2	SX156	焼土壙	長 方 形	(180)×86×16	A 9	SX349	焼土壙	長 方 形	140×70×30
A 3	SX158	焼土壙	長 方 形	180×108×42	A 9	SX351	焼土壙	長方形?	(110)×165×54
A 3	SK161	土壙	長円形	286×94×47	A 9	SX352	焼土壙	長方形?	(90)×105×40
A 3	SK162	土壙	不整 形	167×83×51	A 8	SX353	焼土壙	長 方 形	125×73×43
A 3	SK163	土壙	不整 形	(180)×95×28	A 11	SK390	集石土壙	円 形	128×120×28
A 3	SK164	土壙	不整 形	90×48×23	A 5	SK451	上蓋埋置	円 形	36×36×28
A 4	SX165	焼土壙	長椭円形	160×60×12	A 2	SK460	土壙	不整方形	250×175×50
A 4	SX166	焼土壙	長 方 形	130×70×25	A 2	SK461	土壙	積 円 形	76×66×38
A 4	SX167	焼土壙	長 方 形	167×110×30	A 3	SK481	土壙	長椭円形	471×405×60
A 5	SX168	焼土壙	長 方 形	150×98×12	A 3	SK482	土壙	円 形	157×143×45
A 5	SK169	土壙	不整 形	180×114×16	A 3	SK483	土壙	円 形	100×94×15
A 5	SX170	焼土壙	長 方 形	190×105×57	A 13	SX501	焼土壙	長 方 形	162×115×57
A 2	SX217	焼土壙	長 方 形	156×52×48	A 13	SX502	焼土壙	長 方 形	139×77×15
A 2	SK218	土壙	長椭円形	195×70×82	C I	SK001	土壙	長 方 形	192×58×48
A 2	SK219	土壙	格 円 形	133×78×56	C I	SK002	焼土壙	長 方 形	185×70×50
A 2	SK220	土壙	長 方 形	147×83×21	C I	SK003	土壙	台 形	185×155×12
A 3	SX221	焼土壙	長 方 形	207×117×56	C I	SP004	掘立柱建物	2 × 3 間	320×665
A 3	SK222	土壙	円 形	75×65×10	C I	SP005	掘立柱建物	2 × 3 間	430×670
A 2	SK223	土壙	長 方 形	114×86×43	C I	SK006	土壙	台 形	350×273×28
A 2	SK224	土壙	長 方 形	158×75×24	C I	SK007	埋立	不 明	---
A 2	SK226	土壙	不整 形	294×220×74	C I	S9008	掘立柱建物	2 × 3 間	400×710
A 3	SX233	焼土壙	長 方 形	165×117×52	C I	S9009	焼土壙	長 方 形	140×78×45
A 2	SK238	土器盛り	円 形	90×79×26	C I	SX010	焼土壙	長 方 形	165×154×30
A 3	SX242	焼土壙	長 方 形	154×100×52	C I	SX011	焼土壙	長 方 形	154×83×27
A 1	SX247	焼土壙	長 方 形	158×106×12	C I	SX012	焼土壙	長 方 形	165×75×37
A 1	SK253	焼土壙	長 方 形	137×75×20	C I	SK015	土壙	積 円 形	160×48×7
A 6	SX255	焼土壙	長 方 形	132×78×17	C E	SK601	焼土壙	長 方 形	130×90×35
A 6	SK259	土壙	長 方 形	110×100×25	C E	SK602	焼土壙	長 方 形	125×80×20
A 12	SX262	焼土壙	長 方 形	172×97×34	C E	SK604	焼土壙	長 方 形	175×105×32
A 11	SX263	焼土壙	長 方 形	192×115×15	C E	SK605	焼土壙	長 方 形	160×95×60
A 10	SK265	焼土壙	長 方 形	146×100×55	C E	SK606	焼土壙	長 方 形	240×170×60
A 10	SK267	土壙	不整円形	179×156×55	C E	SK607	焼土壙	長 方 形	150×95×40
A 9	SK269	土壙	円 形	117×119×20	C E	SK608	焼土壙	長 方 形	155×85×35
A 9	SK271	焼+土壙	長 方 形	172×90×49	C E	SK609	土壙	不整円形	140×65×40
A 8	SK273	土壙	円 形	40×40×12	C E	SC810	堅穴住居	方 形	---
A 7	SX274	焼土壙	長 方 形	159×124×35	C E	SK611	土壙	隅丸長方形	190×105×45
A 7	SX275	焼土壙	長 方 形	149×103×20	C E	SK612	焼土壙	長 方 形	153×65×25
A 7	SK276	土壙	長 方 形	90×60×16	C E	SK613	土壙	積 円 形	205×135×115
A 7	SX277	焼土壙	長 方 形	120×70×20	C E	SK614	土壙	積 円 形	260×195×125
A 7	SX238	焼土壙	長 方 形	146×117×35	C E	SK615	土壙	長 方 形	188×80×74
A 7	SK279	土壙	円 形	110×90×45	C E	SB616	掘立柱建物	1 × 1 間	340×350
A 7	SX280	焼上塙	長 方 形	144×96×18	C E	SB617	掘立柱建物	2 × 3 間	410×690
A 12	SX314	大型焼土壙	長 方 形	666×115×10	C E	SB618	掘立柱建物	1 × 2 間	320×560
A 12	SX318	焼土壙	長 方 形	147×(80)×30	C E	SB620	掘立柱建物	1 × 2 間	440×470
A 12	SK322	焼上塙	長 方 形	187×95×27	C E	SK636	土壙	円 形	308×285×21
A 12	SK326	土壙	不 整 形	---	C E	SX648	焼土壙	積 円 形	115×80×8
A 11	SX337	焼土壙	長 方 形	187×110×75	C E	SX650	焼土壙	積 円 形	225×160×7
A 11	SX339	焼土壙	長 方 形	185×90×41	C E	SK652	土壙	積 円 形	176×119×36
A 11	SX340	焼土壙	長 方 形	175×153×35	C E	SX654	焼土壙	円 形	70×65×7
A 11	SX341	焼土壙	方 形	145×78×60	C E	SX655	焼土壙	不整円形	150×120×5
A 11	SK342	土器だまり	不 整 形	---	C E	SX657	焼土壙	長 方 形	135×86×15
A 11	SX343	焼土壙	長 方 形	160×94×58	C E	SX659	焼土壙	隅丸長方形	205×100×8
A 11	SX344	焼土壙	方 形	140×130×30	C E	SX662	焼土壙	長 方 形	156×70×7
A 10	SX345	焼土壙	長 方 形	143×76×28	C E	SX663	焼土壙	長 方 形	96×75×2
A 10	SX346	焼土壙	長 方 形	147×90×22	C E	SX664	焼土壙	隅丸長方形	125×70×52

地点	遺構番号	遺構の種類	平面形	幅×奥×深さ(cm)	地点	遺構番号	遺構の種類	平面形	幅×奥×深さ(cm)
D 5	SX021	焼土壙	長方形	160×95×55	F 5	SX105	焼土壙	長方形	165×108×23
D 4	SX023	焼土壙	隅丸長方形	145×90×42	F 5	SX107	焼土壙	長方形	89×96×20
D 2	SK025	土壙	楕円形	160×94×31	F 5	SX108	土壙	不整形	183×104×32
D 2	SK026	土壙	楕円形	182×95×28	I	SX801	焼土壙	長方形	164×112×48
D 1	SK028	土壙	隅丸長方形	110×54×9	I	SX802	焼土壙	長方形	168×93×32
D 1	SX029	焼土壙	隅丸長方形	170×95×14	I	SX803	焼土壙	長方形	177×90×40
D 1	SX030	焼土壙	長方形	(150)×125×29	I	SX804	焼土壙	長方形	178×140×26
D 1	SX031	焼土壙	隅丸長方形	185×125×35	I	SX805	焼土壙	長方形	174×137×36
D 1	SX032	焼土壙	不 明	(70)×(45)×19	I	SX806	土壙	隅丸方形	70×60×50
D 1	SX033	焼土壙	隅丸長方形	155×83×12	I	SX807	焼土壙	長方形	194×117×50
E 2	SK051	土壙	不整形	200×81×18	I	SX809	焼土壙	長方形	161×95×61
F 2	SX052	焼土壙	隅丸長方形	154×96×40	I	SX810	焼土壙	長方形	130×80×20
L 2	SX053	焼土壙	隅丸長方形	190×96×31	I	SX811	焼土壙	長方形	180×98×44
E 2	SK054	土壙	方 形?	95×(70)×34	I	SX812	焼土壙	長方形	164×80×30
E 3	SX055	焼土壙	長 方 形	100×100×47	I	SX816	土壙	長方形?	160×(43)×40
E 3	SX056	焼土壙	長 方 形	160×90×45	J	SK901	土壙	不整形	75×69×22
E 2	SK058	土壙	方 形	103×81×16	J	SK902	焼土壙	長方形	165×115×10
F 1	SX081	焼土壙	長 方 形	174×78×36	J	SK903	焼土壙	長方形	165×130×25
F 1	SK083	土壙	不整形	84×56×14	J	SK904	焼土壙	長方形	115×95×30
F 4	SK086	土壙	不整形	137×107×55	J	SX905	焼土壙	長方形	(125)×80×13
F 4	SX087	焼土壙	隅丸長方形	147×78×52	J	SX906	土壙	長方形	164×55×26
F 4	SX088	焼土壙	長 方 形	146×87×49	J	SX907	土壙	長方形	155×95×25
F 4	SX091	焼土壙	隅丸長方形	162×92×24	J	SX908	焼土壙	長方形	180×100×55
F 4	SX092	焼土壙	長 方 形	130×69×58	J	SX909	焼土壙	長方形	205×165×60
F 4	SX093	焼土壙	長 方 形	132×91×40	J	SX910	焼土壙	長方形	175×140×55
F 4	SX095	焼土壙	長 方 形	138×82×40	J	SX914	焼土壙	長方形	165×120×40
F 4	SX096	焼土壙	長 方 形	138×74×28	J	SX915	焼土壙	長方形	145×85×40
F 4	SB097	獨立柱建物	2 × 3 間	310×440	J	SX916	焼土壙	長方形	163×93×20
F 2	SX099	焼土壙	長 方 形	138×66×36	J	SX917	焼土壙	長方形	130×90×35
					J	SX918	焼土壙	長方形	140×90×35

Tab. 4 掘取遺跡一覧

※R番号は遺構、各区の包含層での取り上げ番号を示す。ただし、本文中、挿図には示していない。

※色調は外面について記載した。

※倍考欄の分数は、径の復元を行った破片の残り具合である。また、煤付着とは特にことわらない限り外面である。

※出土遺構で道構一覧にないものは、小ピットおよび、水田に伴う溝などの近現代のものである。

博団	番号	器種	地点	出土地	色調	外面調整	内面調整	備考
Fig. 6	1	粗製深鉢	A 3	SK161	淡灰褐色	崩り	崩り→ナデ	
	2	粗製深鉢	A 3	SK161	淡茶褐色	条痕	条痕→茶褐色	煤付着
	3	粗製深鉢	A 3	SK161	茶褐色	崩り→板ナデ	ナデ	
	4	粗製深鉢	A 3	SK161	淡茶褐色	条痕	研磨	内面黄白色
	5	粗製深鉢	A 3	SK161	暗灰褐色	崩り	条痕	
	6	粗製深鉢	A 3	SK161	灰褐色	崩り	条痕→ナデ	外面部頭部は条痕で灰褐色
	7	精製浅鉢	A 3	SK161	黑褐色	研磨	崩り	内面頭～口縁部は研磨
	8	精製浅鉢	A 3	SK161	淡茶褐色	研磨	研磨	口縁部にリボン状突起
	9	精製深鉢	A 3	SK161	暗灰褐色	研磨	研磨	
	10	精製深鉢	A 3	SK161	暗茶褐色	不明	不明	器面相れる
	11	精製浅鉢	A 3	SK161	灰褐色	研磨	ナデ	外面部頭部ナデ
	12	粗製浅鉢	A 3	SK161	灰褐色	条痕	ナデ	外面部下に浅い沈着、角凹石合む
	13	浅鉢	A 3	SK161	淡茶褐色	ナデ	ナデ	深鉢か
	14	粗製鉢	A 3	SK161	淡茶褐色	ナデ	ナデ	口径40cm前後か
	15	鉢	A 3	SK161	茶褐色	板ナデ?	研磨	口縁
	16	粗製深鉢	A 3	SK161	淡茶褐色	崩り	ナデ	ナデ
	17	粗製深鉢	A 3	SK161	淡茶褐色	崩り	ナデ	ナデ
	18	粗製深鉢	A 5	SK169	茶褐色	崩り	ナデ	ナデ
	19	粗製深鉢	A 5	SK169	茶褐色	崩り(1cm幅)	ナデ	煤付着
	20	精製浅鉢	A 5	SK169	暗茶褐色	研磨	研磨	

拓図	番号	器種	地点	出土地	色調	外面調整	内面調整	備考
Fig. 6	21	精製浅鉢	A 5	SK169	暗灰褐色	研磨	削り→研磨	
	22	精製浅鉢	A 5	SK169	茶褐色	研磨	研磨	
	23	精製浅鉢	A 5	SK169	淡茶褐色	研磨	研磨	
	24	精製浅鉢	A 5	SK169	褐色	ナデ	ナデ	
	25	外?	A 5	SK169	淡茶褐色	研磨	ナデ	塊形 焼き凝固、外面に空隙
Fig. 7	26	精製深鉢	A 5	SK169	茶褐色	削り(口縁部)	削り→ナデ	底部はヨコナデ、焼付着、外 周部は余度の後丁寧なナデ、外 縁
	27	粗製深鉢	A 5	SK169	茶褐色	ナデ	ナデ	
	28	粗製深鉢	A 2	SK223	茶褐色	削り→ナデ	ナデ	
Fig. 8	29	粗製深鉢	A 2	SK238 R 18	茶灰褐色	柔軟	柔軟→ナデ	削部はナデ、%
	30	粗製深鉢	A 2	SK238 R 28	茶灰褐色	柔軟→板ナデ	板ナデ	
	31	鉢	A 2	SK238 R 38	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	32	精製浅鉢	A 2	SK238 R 34	茶褐色	研磨	研磨	口径30cm前後
	33	精製浅鉢	A 2	SK238 R 37	淡茶褐色	細かい研磨	細かい研磨	リボン貼付
	34	粗製鉢	A 6	SK259	茶褐色	削り	ナデ	口縁部凹形の可能性
	35	粗製鉢	A 6	SK259 R 4	茶褐色	削り→ナデ	ナデ	さらに頗るくか、%
	36	粗製深鉢	A 6	SK259	茶褐色	板ナデ	ナデ	%
	37	粗製深鉢	A 6	SK259 R 6	黄白色	柔軟	柔軟→ナデ	底部屈曲部
	38	精製浅鉢	A 12	SK259	茶褐色	柔軟	柔軟	口、颈部は横、削部は継続磨り
	39	精製鉢	A 6	SK259	茶褐色	研磨	研磨	頭部外壁は柔軟、%
	40	粗製深鉢	A 11	SK342 R 4	淡灰褐色	柔軟(頭部)	削り	
	41	精製浅鉢	A 11	SK342 R 1	黒褐色	削り→研磨	研磨	
	42	精製鉢	A 11	SK342 R 14	茶褐色	研磨	研磨	沈殿部に赤色顔料残る
	43	精製浅鉢	A 11	SKM2 R 12	淡灰褐色	削り→研磨	研磨	口径35cm程か
Fig. 9	44	手? 精製鉢	A 11	SK342 R 16	淡灰褐色	研磨	研磨	
	45	鉢	A 11	SK342	淡茶褐色	柔軟ナデ	ナデ	%より復元
	46	粗製深鉢	A 11	SK342	淡褐色	削り	板ナデ?	器面樹れる
	47	粗製深鉢	A 11	SK390 R 2	淡茶褐色	柔軟	柔軟→ナデ	外面部筋は丁寧なナデ
	48	精製鉢?	A 11	SK390 R 4	淡茶褐色	研磨	研磨	口径27cm前後か
	49	精製浅鉢	A 11	SK390 R 9, 10, 11	淡灰褐色	研磨	研磨	牙強
	50	粗製深鉢	A 2	SK460	淡茶褐色	柔軟(頭部)	柔軟ナデ	焼付着、側部ナデ
	51	精製浅鉢	A 2	SK460 R 1, 2, 7	淡灰褐色	研磨	研磨	陶器部は1ヶ所か、%
	52	精製浅鉢	A 2	SK460	淡茶褐色	不明	不明	器面荒れやすい
	53	精製浅鉢?	A 2	SK460	灰褐色	不明	不明	外面部荒れ
	54	底部	A 2	SK460	黄色	ナデ	丁寧なナデ	半精製?
	55	深鉢	A 2	SK461	淡茶褐色	板ナデ	ナデ	半精製?
	56	精製深鉢?	A 2	SK461 R 3	淡茶褐色	削り、一部ナデ	ナデ	底部屈曲部
	57	精製浅鉢?	A 2	SK461	茶褐色	研磨	研磨	
	58	鉢	A 2	SK461	淡褐色	ナデ	柔軟→ナデ	
Fig. 10	59	粗製深鉢	A 3	SK481	淡灰褐色	板ナデ?	ナデ	内面凸凹著しい
	60	精製深鉢	A 3	SK481	淡褐色	削り→ナデ	ナデ	
	61	粗製深鉢	A 3	SK481	暗灰褐色	板ナデ	ナデ	
	62	粗製深鉢	A 3	SK481 R 6	明茶褐色	ナデ	削り→ナデ	口唇部に刻目
	63	粗製深鉢?	A 3	SK481 R 5	淡灰褐色	ナデ	ナデ	口唇部の突脊に刻目
	64	半精製? 深鉢	A 3	SK481	淡褐色	細かい丸ナデ	ナデ	口唇部に烈点
	65	半精製鉢	A 3	SK481	茶褐色	粗い丸ナデ	ナデ	山唇部に毛土の面し、口唇部に烈点
	66	粗製深鉢	A 3	SK481	淡灰褐色	削り→一部ナデ	ナデ	口唇部に刻目
	67	精製浅鉢	A 3	SK481	淡灰褐色	研磨	ナデ	やや鍛なつくり
	68	精製浅鉢	A 3	SK481 R 5	茶褐色	研磨	研磨	
	69	精製浅鉢	A 3	SK481	淡灰褐色	研磨	研磨	
	70	精製浅鉢	A 3	SK481	淡茶褐色	研磨	研磨	やや鍛なつくり
	71	底部	A 3	SK481	淡褐色	丁寧なナデ	ナデ	
	72	粗製深鉢	A 3	SK482	淡褐色	削り	削り	焼付着
	73	粗製鉢	A 3	SK482 R 3, 4, 5	淡灰褐色	柔軟→ナデ	柔軟	焼付着
	74	粗製深鉢	A 3	SK482	淡灰褐色	削り	板ナデ?	側部削りのナデ、鍛ネクタイ
	75	粗製深鉢	A 3	SK482	淡茶褐色	柔軟	ナデ	
	76	粗製深鉢	A 3	SK482 R 2	黄白色	柔軟→ナデ	丁寧なナデ	
	77	粗製深鉢	A 3	SK482	淡茶褐色	削り→ナデ	範ナデ	
	78	鉢	A 3	SK482	淡褐色	削り	範ナデ	
	79	半精製鉢	A 3	SK482	灰褐色	範ナデ	範ナデ	焼付着

番号	器種	地点	出土地	色調	外面調整	内面調整	備考
Fig.10	80 楔製深鉢	A 3	SK482	茶褐色	茶褐色→ナデ	茶褐色→ナデ	
	81 鉢?	A 3	SK482	暗褐色	ナデ	ナデ	煤付着
	82 鉢?	A 3	SK482	暗褐色	茶褐色→ナデ	茶褐色→ナデ	口唇部划り
	83 楔製鉢	A 3	SK482	黒褐色	研磨	研磨	焼成後穿孔、 γ_{11}
	84 楔製浅鉢	A 3	SK482 R 1	黑褐色	研磨	研磨	削記24cm程度か
	85 平滑製鉢?	A 3	SK482	灰茶褐色	ナデ	ナデ	34
	86 楔製浅鉢	A 3	SK483	灰茶褐色	研磨	研磨	34
	87 半精製鉢	A 3	SP484	灰白色	削り→ナデ	削り→ナデ	焼成後穿孔、34
Fig.12	88 粗製深鉢	A 12	R 154	暗褐色	削り	茶褐色→ナデ	
	89 粗製深鉢?	A 12		暗茶褐色	板ナデ	板ナデ	
	90 鉢	A 12		灰茶褐色	ナデ	ナデ	
	91 粗製深?	A 12		茶褐色	茶褐色	ナデ	
	92 粗製深鉢	A 12		茶褐色	茶褐色	板ナデ	研磨調整に近い
	93 精製深鉢	A 12		淡黃褐色	削りナデ	削りナデ	
	94 精製深鉢	A 12		淡褐色	ナデ	ナデ	
	95 楔製浅鉢	A 12		暗灰褐色	研磨	研磨	34
	96 楔製浅鉢	A 12		淡灰褐色	研磨	削り→研磨	焼付着、%
	97 楔製浅鉢	A 12		暗灰褐色	研磨	研磨	%
	98 精製深鉢	A 12		灰茶褐色	研磨	研磨	煤付着
	99 半精製鉢	A 12	R 133	淡灰茶色	不明	丁寧なナデ	器面丸れる 口径25~30cm
	100 半精製浅鉢	A 12	R 113, 114	淡黃褐色	削りナデ	削りナデ	内外とも細く長い調整
	101 半精製浅鉢	A 12	R 106	淡茶色	削りナデ	削りナデ	
	102 精製浅鉢	A 12		暗灰褐色	研磨	研磨	波状口縁
	103 精製浅鉢	A 12		暗灰褐色	研磨	研磨	深く長い施搞沈線交わる
	104 半精製鉢?	A 12	R 123	暗茶褐色	ナデ	研磨	細い沈線が縦に入る
	105 精製深鉢?	A 12	R 117	灰褐色	研磨	研磨	
Fig.13	106 粗製深鉢	A 2	SK219	暗褐色	茶褐色→ナデ	茶褐色→ナデ	
	107 粗製深鉢	A 2		暗褐色	ナデ	ナデ	γ_{11}
	108 粗製深鉢	A 3	SK232	淡茶褐色	茶褐色→ナデ	茶褐色→ナデ	
	109 粗製深鉢	A 3	SX158	淡灰褐色	ナデ	ナデ	
	110 粗製深鉢	A 7	SX277	茶褐色	ナデ	ナデ	煤付着 γ_{11}
Fig.14	111 粗製深鉢	A 3	R 135	淡茶褐色	茶褐色	ナデ	
	112 粗製深鉢	A 5	R 45, 46	暗茶褐色	茶褐色	ナデ	
	113 粗製深鉢	A 2		茶褐色	茶褐色	ナデ	
	114 粗製深鉢	A 3	SP243	淡褐色	削り	板ナデ、ナデ	外側 8 cm縁の調整単位
	115 粗製深鉢	A 5		黄灰色	削り	板ナデ→ナデ	
	116 粗製深鉢	A 5	R 39, 86, 88	青白色	茶褐色	ナデ	
	117 粗製深鉢	A 3		淡青茶色	茶褐色→ナデ	ナデ	
	118 粗製深鉢	A 3	R 27	茶褐色	茶褐色	削り→ナデ	
	119 粗製深鉢	A 2	SP193	淡褐褐色	茶褐色	板ナデ	口唇部に茶色工具による削り
	120 粗製深鉢	A		淡茶褐色	茶褐色	板ナデ	
	121 粗製深鉢	A 2	SK219	灰茶褐色	茶褐色	ナデ	
	122 粗製深鉢	A 3	R 292	暗褐色	茶褐色	ナデ	煤付着
	123 粗製深鉢	A 12	SP336	暗茶褐色	茶褐色	茶褐色→ナデ	内面に煤
	124 粗製深鉢	A 12	SP319	灰白色	削り	ナデ	
	125 粗製深鉢	A 3	R 298	黑褐色	茶褐色	茶褐色	浅い沈線が入る
	126 粗製深鉢	A 5		灰白色	削り→ナデ	板ナデ	
	127 粗製深鉢	A 2		暗茶褐色	茶褐色	ナデ	
	128 粗製深鉢	A 4		淡茶褐色	茶褐色	ナデ	
	129 粗製深鉢	A 3	SP250	暗褐色	茶褐色	ナデ	
	130 半精製深鉢	A 3	SK161	淡茶褐色	削りナデ	削りナデ	内縫切口の所引出し 口径20cm弱か
	131 粗製深鉢	A 3	SK164	暗茶褐色	削り→ナデ	ナデ	
	132 粗製深鉢	A 12	SP310	灰褐色	ナデ	ナデ	
	133 半精製鉢?	A 11	SK263	灰褐色	ナデ	削りナデ	口径20cm強か ナデ調整か
	134 粗製深鉢	A 2		茶色	不明	不明	
	135 粗製深鉢	A 3	R 154	茶褐色	削り	茶褐色→ナデ	浅い平行沈線を施す
	136 粗製深鉢	A 3		灰褐色	削り→ナデ、茶ナデ	板ナデ→茶ナデ	煤付着
	137 粗製深鉢	A 2	SX153	灰白色	茶褐色	茶褐色	内面は削り風、煤付着
	138 粗製深鉢	A 2	SK219	暗茶褐色	削り	板ナデ	

擇固	番号	器種	地点	出土地	色調	外面調整	内面調整	備考
Fig. 15	139	粗製深鉢	A 12	R 8	黄灰褐色	条痕	ナデ	口縁部ヨコナデで口縁帶状
	140	粗製深鉢	A 3	SK162	暗灰褐色	条痕	板ナデ	
	141	粗製深鉢	A 1	SX151	黄白色	削り→ナデ	削り→ナデ	
	142	粗製深鉢	A 1	SP208	灰褐色	条痕→弱いナデ	ナデ	
	143	粗製深鉢	A 2		茶褐色	削り	荒ナデ	
	144	粗製深鉢	A 1		灰茶褐色	削り	板ナデ	
	145	粗製深鉢	A 3	R 75	暗茶褐色	削り	板ナデ→ナデ	煤付着
	146	粗製深鉢	A 2		暗茶褐色	削り	荒ナデ	半精製?
	147	粗製深鉢	A 5	SP248	茶褐色	削り	柔軟→ナデ	
	148	粗製深鉢	A 2		灰茶褐色	削り	柔軟→ナデ	口唇部に尖帯状
	149	半精製鉢	A 12	R 213	黄灰褐色	条痕→ナデ(重ねる)	荒ナデ	
	150	粗製深鉢	A 3	R 253	黄茶褐色	条痕	ナデ	煤付着
	151	粗製深鉢	A 5		淡黄褐色	削り	板ナデ	
	152	粗製深鉢	A 1		茶褐色	条痕	荒ナデ	
	153	半精製鉢	A 3	R 83	暗褐色	削り	板ナデ	
	154	粗製鉢	A 8	SP295	灰茶褐色	削り→ナデ	削り	
	155	粗製鉢	A 12	SP331	茶褐色	削り	板ナデ	
	156	粗製鉢	A 11	SX339	暗茶褐色	削り	ナデ	
	157	粗製鉢	A 5		茶褐色	条痕	ナデ	煤付着
	158	粗製鉢	A 12	SP310	暗褐色	削り	板ナデ	
	159	粗製鉢	A 3		淡灰白色	板ナデ	条痕→板ナデ	焼き出し
	160	粗製鉢	A 11	SX341	灰茶褐色	条痕	板ナデ	焼き回し
	161	粗製鉢	A 12		茶褐色	条痕	ナデ	
	162	粗製鉢	A 1		淡灰褐色	ナデ	荒ナデ	内面は精製
	163	鉢	A 8		暗茶褐色	ナデ	ナデ	
	164	鉢	A 1		淡灰褐色	ナデ	丁寧なナデ	
	165	鉢	A 2		灰褐色	板ナデ	ナデ	
	166	鉢	A		暗褐色	ナデ	ヨコナデ	煤付着
Fig. 16	167	粗製深鉢	A 1		暗灰褐色	柔軟	ナデ	
	168	粗製深鉢	A 12	R 412	茶褐色	条痕	板ナデ	
	169	粗製深鉢	A 3	SP243	灰褐色	条痕→ナデ	ナデ	口縁部折り返し
	170	粗製深鉢	A 3	SK164	淡灰褐色	条痕	ナデ	
	171	粗製深鉢	A 1		灰褐色	削り	ナデ	
	172	鉢	A 1		黄白色	条痕	丁寧なナデ	古い半精製に近い
	173	粗製深鉢	A 6		茶褐色	削り	ナデ	
	174	粗製深鉢	A 8		暗灰褐色	削り	条痕	内面に細く浅い沈線
	175	粗製深鉢	A 3	SP243	暗茶褐色	削り	柔軟	煤付着
	176	半精製鉢	A 1		暗茶褐色	丁寧なナデ	ナデ	
	177	粗製深鉢	A 12	SP310	淡灰褐色	柔軟→ナデ	ナデ	口唇部に条痕工具による浅い削り
	178	粗製深鉢	A 3	SP192	灰茶褐色	削り→ナデ	板ナデ	
	179	粗製深鉢	A 3		灰茶褐色	柔軟	柔軟→ナデ	
	180	半精製鉢	A 3		灰褐色	ナデ	丁寧なナデ	
	181	半精製鉢	A 12	SP310	淡灰褐色	丁寧なナデ	ナデ	
	182	半精製鉢	A 2		淡灰褐色	削り	丁寧なナデ	
	183	半精製鉢	A 1		淡茶褐色	ナデ	丁寧なナデ	
	184	半精製鉢	A 3	R 240	茶褐色	ナデ	ナデ	
	185	半精製鉢	A 5	R 115	茶褐色	ナデ	ナデ	煤付着
	186	半精製鉢	A 3	SP243	淡灰褐色	ナデ	ナデ	
	187	半精製鉢	A 3	SX158	茶褐色	ナデ	ナデ	
	188	粗製鉢?	A 12	SP310	茶褐色	削り→ナデ	削り→板ナデ	リボン状隆起あり、角閃石 波状口縁
	189	精製深鉢	A 5	R 89	暗茶褐色	研磨	研磨	
	190	精製深鉢	A 12		黑褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない
	191	精製深鉢	A 3	R 120	淡灰褐色	研磨	研磨	
	192	精製深鉢	A 12		淡灰褐色	研磨	研磨	
	193	精製深鉢	A 4		淡灰褐色	不明	研磨	研磨も鋸
	194	精製深鉢	A 3	SK162	黄白色	不明	研磨	
	195	精製深鉢	A 3	R 269	茶褐色	研磨	研磨	
	196	精製深鉢	A 3	SK162	淡灰褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない
	197	精製深鉢	A 1		暗灰褐色	強いヨコナデ	強いヨコナデ	

擇図	番号	器種	地点	出土地	色調	外面調査	内面調査	備考
Fig. 16	198	精製浅鉢	A 1		灰茶褐色	研磨	研磨	
	199	精製浅鉢	A 3	SX158	暗茶褐色	研磨	研磨	
	200	精製浅鉢	A 3	SX158	灰茶褐色	研磨	研磨	
	201	精製浅鉢	A 3	R 28	淡灰褐色	研磨	研磨	
	202	精製浅鉢	A 5		淡褐色	不明	不明	
	203	精製浅鉢	A 4	SP452	淡灰色	研磨	研磨	
	204	精製浅鉢	A 3	R 372	黄褐色	不明	不明	器面粗れる
	205	精製浅鉢	A 3	R 118	暗灰褐色	不明	不明	器面粗れる
	206	精製浅鉢	A 3	R 158	暗茶褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない
	207	精製浅鉢	A 3	R 216	灰茶褐色	不明	不明	器面粗れる
	208	精製浅鉢	A 3	SK163	淡灰褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない
	209	精製浅鉢	A 2	R 32	灰褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない
	210	精製浅鉢	A 3	SP272	黄茶褐色	研磨	研磨	
	211	精製浅鉢	A 3	SK162	黄褐色	研磨	研磨	
	212	精製浅鉢	A 12		暗茶褐色	不明	不明	
	213	精製浅鉢	A 1		暗褐色	研磨	研磨	
	214	精製浅鉢	A 5	R 61	茶褐色	研磨	研磨	
	215	精製浅鉢	A 3	R 47	灰褐色	削り	研磨	
	216	精製浅鉢	A 7	SX277	灰黑色	研磨	研磨	
	217	精製浅鉢	A 1		淡灰褐色	研磨	研磨	
	218	精製浅鉢	A 8		灰褐色	研磨	研磨	
	219	精製浅鉢	A 6	SP285	黄褐色	研磨	研磨	
	220	精製浅鉢	A 12	R 62	暗茶褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない
	221	精製浅鉢	A 12	R 209	暗茶褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない
	222	牛筋製鉢	A 4		暗灰褐色	ナデ	ナデ	砂粒を多く含む
	223	精製浅鉢	A 7		淡褐色	研磨	研磨	
	224	精製浅鉢	A 7	SX277	灰茶褐色	研磨	研磨	端付着
Fig. 17	225	精製浅鉢	A 3		暗褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない。%
	226	精製浅鉢	A 12		灰褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない。%
	227	精製浅鉢	A 12		茶褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない。%
	228	精製浅鉢	A 12		淡褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない。%
	229	精製浅鉢	A 12		淡灰褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない。%
	230	精製浅鉢	A 7	SX277	灰褐色	研磨?	削り→研磨?	
	231	精製浅鉢	A 3		暗褐色	研磨?	研磨?	
	232	精製浅鉢	A 3	R 341	黄褐色	研磨?	研磨?	砂粒をほとんど含まない。厚2cm前後
	233	精製浅鉢	A 3	R 529	淡黄茶褐色	研磨	研磨	
	234	精製浅鉢	A 2		暗茶褐色	研磨	研磨、指揮さえ	
	235	精製浅鉢	A 5	SP303	淡黄褐色	研磨	研磨	口徑27cm前後
	236	精製浅鉢	A 5	SP452	暗褐色	ナデ	ナデ	粘土接合部で破損
	237	精製浅鉢	A 5	SP457	黄褐色	研磨	研磨	
	238	精製浅鉢	A 7	SX277	淡褐色	不明	不明	粘土接合部で破損
	239	精製浅鉢	A 7	R 344, 209	灰茶褐色	研磨	削り→ナデ	
	240	精製浅鉢	A 3	R 214	灰褐色	研磨	ナデ	生焼け状
	241	精製浅鉢	A 12	SP533	暗茶褐色	研磨	研磨	%
	242	精製浅鉢	A 12		灰茶褐色	研磨	不明	やや調整頼い、半精製?
	243	精製浅鉢	A 12		淡灰褐色	不明	不明	器面粗れる
	244	精製浅鉢	A 3	R 415	橙色	研磨	研磨	
	245	精製浅鉢	A 1	SP245	暗茶褐色	研磨	研磨	
	246	精製浅鉢	A 1		淡褐色	不明	研磨	
	247	精製浅鉢	A 12	R 10	橙色	ナデ、研磨	研磨	
	248	精製浅鉢	A 12		茶褐色	ナデ→ナデ	ナデ	
	249	精製浅鉢	A 1		暗茶褐色	研磨	研磨	口徑24cm前後、波状U線
	250	精製深鉢?	A 3	SK162	暗褐色	ナデ?	ナデ?	器面は平滑研磨か
	251	精製鉢?	A 12	SP338	暗褐色	ナデ?	ナデ?	器面粗れる
	252	精製鉢?	A 12		淡茶褐色	不明	不明	
	253	精製浅鉢	A 12	R 16	淡茶褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない。赤色顔料
	254	精製浅鉢	A 3	SP459	淡茶褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない
	255	精製浅鉢	A 5		米褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない
	256	精製浅鉢	A 5		淡茶褐色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない

博物	番号	器種	地点	出土地	色調	外面調整	内面調整	備考
Fig. 17	257	半精製鉢	A 3	R 451	淡灰褐色	削り→丁寧なナデ	丁寧なナデ	Y1a
	258	粗製鉢	A 7	S1231	淡褐色	条痕→ナデ	削り→ナデ	Y1c
	259	半精製鉢?	A 7		淡茶褐色	研磨	研磨	ナデ状
	260	半精製鉢	A 3	R 271		削り	ナデ	
	261	半精製鉢	A 3	R 251	淡褐色	条痕→ナデ	条痕→ナデ	
	262	粗製鉢	A 3	R 382	茶褐色	削り	条痕→丁寧なナデ	
	263	粗製鉢	A 3	SX158	暗褐色	研磨	研磨	焼成前の穿孔
	264	粗製鉢	A 3	SX162	暗灰色	条痕→ナデ	ナデ	焼成後の穿孔
	265	半精製鉢	A 3	SX158	暗茶褐色	ナデ	ナデ	焼成後の穿孔
	266	粗製鉢	A 5	R 86	淡灰褐色	条痕→板ナデ	板ナデ	焼成後の穿孔、煤付着
	267	刷部	A 7		淡褐色	ナデ	ナデ	
	268	刷部	A 12	R 225	淡褐色	ナデ	ナデ	
	269	刷部	A 3		淡褐色	ナデ	ナデ	砂粒をほとんど含まない
	270	刷部	A 1	SP208	淡褐色	不明	不明	小突起貼付
Fig. 18	271	鉢	A 12	R 147	橙色	山形押型文	不明	
	272	鉢	A 5	R 21	明茶褐色	ナデ	削り→ナデ	
	273	鉢	A 12	SX262	淡褐色	削り? →ナデ	削りナデ	滑石混入
	274	鉢	A 3		淡褐色	削り	板ナデ	無網目帶文
	275	甕	A 13	SX601	淡褐色	条痕?	板ナデ	器面粗れる、傾き不明
	276	高杯?	A 12		淡灰褐色	刷毛日?	板ナデ?	Y1
	277	底部	A 1		茶褐色	条痕	削り	
	278	底部	A 2		黄灰白色	削り	板ナデ	Y1
	279	底部	A 7	SX277	淡褐色	削り、ナデ	ナデ	Y1
	280	底部	A 3	SK102	淡褐色	削り	ナデ	Y1
	281	底部	A 3		淡黃褐色	ナデ	ナデ	Y1
	282	底部	A 3	SK161	淡褐色	ナデ	ナデ	Y1
	283	底部	A 1		淡灰褐色	ナデ	ナデ	Y1
	284	底部	A 6		青色	不明	不明	Y1
	285	底部	A 2		淡黃褐色	削り	ナデ	Y1
	286	底部	A 12		淡褐色	削り、ナデ	板ナデ	Y1
	287	底部	A 1		淡黃褐色	削り→ナデ	削り	Y1
	288	底部	A 12	SK258	灰白色	ナデ	ナデ	Y1
	289	底部	A 2		淡褐色	ナデ	ナデ	Y1
	290	底部	A 3	SK162	淡橙白色	削り	ナデ	Y1
	291	底部	A 4	SX166	灰褐色	ナデ	条痕→ナデ	Y1
	292	底部	A 3	SP228	淡褐色	条痕	ナデ	Y1
	293	底部	A 4	SP452	淡黃褐色	削り→ナデ	ナデ	Y1
	294	底部	A 2	SK238	淡褐色	ナデ	不明	Y1
	295	底部	A 11	SX340	灰白色	ナデ	ナデ	Y1
	296	底部	A 9		淡褐色	不明	不明	Y1
	297	底部	A 11		基褐色	ナデ	ナデ	Y1
	298	底部	A 12	SP251	淡褐色	条痕→ナデ	ナデ	Y1
	299	底部	A 5	R 43	淡白色	削り→ナデ	ナデ	Y1
	300	底部	A 5		暗灰褐色	条痕	不明	Y1
	301	底部	A 1		淡茶褐色	削り→ナデ	丁寧なナデ	Y1
	302	底部	A 8		淡灰褐色	ナデ	ナデ	Y1
	303	底部	A 5	SX353	淡褐色	削り	丁寧なナデ	Y1
	304	底部	A 2		淡褐色	ナデ	ナデ	Y1
	305	底部	A 10	SP391	淡褐色	不明	不明	Y1
	306	底部	A 5		淡褐色	ナデ	未復	
Fig. 19	307	土製品	A 2		淡橙色	少量の砂を含み、焼きは固い		
	308	石鐵	A 3		安山岩	3.1×2.2×0.6cm	完形	
	309	石鐵	A		黒曜石	2.5+φ×1.8×0.4cm	先端部を欠く	
	310	石鐵	A 3	R 99	安山岩	1.9×2.0×0.3cm	完形	
	311	石鐵	A 1	SK482	黒曜石	2.6+φ×1.8×0.4cm	先端部を欠く	
	312	石鐵	A 4		安山岩	2.8×1.8×0.5cm	完形	
	313	石鐵	A 2		黒曜石	2.0×1.7×0.3cm	完形	
	314	石鐵	A 2		安山岩	2.9×1.4×0.3cm	完形	
	316	石鐵	A	SK390 R 1	安山岩	3.0×1.6×0.4cm	完形	

博物館	番号	器種	地點	出土地	色調	外面調整	内面調整	備考
Fig. 19	317	石鏡	A 2		黒 磬石	2.3+ × 2.3×0.4cm		頭部を欠く
	318	石鏡	A	SK220	安山岩	2.7+ × 1.9×0.4cm		先端部を欠く
	319	石鏡	A 5		玄武岩安山岩	2.5×1.7×0.4cm		完形
	320	石鏡	A 12	R 112	黒 磬石	2.4+ × 1.6×0.3cm		先端部を欠く
Fig. 20	322	石皿	A 11	SK390	玄武岩(?)	45.8×36×3.5cm		
	323	石皿	A 3	R 250	砂 岩	(13.5) × 13.8×4.5cm		
	324	鐵石(?)	A 12	R 4	花崗岩	16.5×6.5×4.7cm		刃をいた後、削れ口を一部磨く
	325	磨製石斧	A 3		流紋岩(?)	13.2×5.8×2.9cm		
	326	磨製石斧	A 3		流紋岩(?)	(10.8) × (5) × 1.7cm		
	327	磨製石斧	A 5	SK169	流紋岩(?)	(5.8) × (5.2) × 2.2cm		
	328	磨製石斧	A 2		粘板岩(?)	9.2×6.6×1.9cm		
	329	甕	A 2	SK226	白 色	ナデ	暗色当具無	
Fig. 21	330	甕	A 5	SX170	淡茶色	ナデ		
	331	甕	A 5	SX170	淡茶色	ナデ		
	332	甕?	A 5	SX170	淡灰褐色	刷毛目		
	333	羽口	A 5	SX170	淡灰褐色			
	334	环壺	A		淡灰 色	細軸ナデ		
	335	免	A 3	SK161	淡黃褐色	刷毛目		
	336	甕	A 3	SK161	淡黃褐色	刷毛		
	337	甕	A 10	SK267	灰茶褐色	叩き?		
	338	甕	A 5	SK451	明茶褐色	刷毛目		
	339	甕	A 12	SP328	茶 色	刷毛目		
Fig. 24	340	甕	A	SP273	灰茶褐色	刷毛目		
	341	精製深鉢	B I	R 322	淡灰 色	研磨		
	342	半精製深鉢	B I	R 384	淡黃白色	ナデ		
	343	精製浅鉢	B I	R 389	黑褐 色	研磨		
	344	精製鉢	B I	R 340	黑褐 色	削り→丸ナデ	東ナデ	
	345	粗製深鉢	B I	R 313	茶 浅褐色	削り		
	346	粗製深鉢	B I	R 368	黑 褐色	条痕		
	347	半精製浅鉢	B I	R 403	滑 深褐色	丸ナデ?		
	348	粗製鉢	B I	R 340	滑 色	削り→ナデ		
	349	半精製鉢	B I		黄 白色	ナデ		
Fig. 26	350	精製浅鉢	B I	R 378	茶 浅褐色	研磨	研磨	
	351	粗製深鉢	C I	SK007	不規則褐色	丸ナデ、削り	ナデ	埋甕
	352	粗製深鉢	C II		青 色			
	353	粗製深鉢	C II		淡灰 色	条痕	ナデ	
	354	粗製深鉢	C II		淡茶褐色	条痕	ナデ	
	355	粗製深鉢	C II	R 279	茶 紫色	条痕→ナデ	ナデ	
	356	粗製深鉢	C II	R 777	灰 白色	条痕	ナデ	
	357	粗製深鉢	C II	R 18, 19	淡茶褐色	東亞ナデ(剥離)	ナデ	
	358	粗製深鉢	C II	R 178	淡灰褐色	不明	ナデ	
	359	粗製深鉢	C II	R 124	淡茶灰色	条痕	ナデ	
Fig. 27	360	粗製深鉢	C II	R 152	淡茶色	条痕	ナデ	
	361	粗製深鉢	C II	R 75	淡黃白色	条痕	ナデ	
	362	粗製深鉢	C II	R 9	淡黃白色	条痕	板ナデ	
	363	粗製深鉢	C III	SP600	淡 紫色	条痕	ナデ	
	364	粗製深鉢	C III	R 488	淡 紫色	削り	ナデ	
	365	粗製深鉢	C III		茶 紫色	削り	ナデ	
	366	粗製深鉢	C III		淡 紫色	板ナデ	ナデ	
	367	粗製深鉢	C III		淡 紫色	ナデ	ナデ	
	368	粗製深鉢	C III	R 218	淡 紫色	削り	ナデ	
	369	粗製深鉢	C III		淡灰褐色	削り	ナデ	
Fig. 28	370	粗製深鉢	C III	R 215	暗 紫色	削り	ナデ	
	371	粗製深鉢	C III		灰 色	板ナデ	ナデ	
	372	半精製鉢?	C III	R 171	暗灰 色	削り	研磨	
	373	半精製鉢?	C III	SP600	淡黃灰色	丸ナデ	丸ナデ	
	374	半精製鉢?	C III		淡橙色	板ナデ	丸ナデ	
	375	精製鉢?	C III	R 644	茶 色	板ナデ	ナデ	
	376	精製鉢?	C III	R 142	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
								角閃石含む

揭露	番号	器種	地点	出土地	色調	外面調整	内面調整	備考
Fig. 27	377	精製鉢?	C I	R 19	淡 桜色	ナデ	ナデ	径20cm前後か
	378	精製鉢?	C I	R 13	淡 黄白色	板ナデ	板ナデ	
	379	精製鉢?	C I		淡黄灰色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	
	380	精製鉢?	C III	SP690	淡 灰色	ナデ	研磨	
	381	精製鉢?	C II	R 158	灰 白色	磨り→ナデ	磨り→ナデ	
	382	精製鉢?	C II		黄 白色	削り→研磨	削り→研磨	
	383	精製鉢?	C III	SP690	灰 茶色	研磨	研磨	
	384	精製鉢?	C III	SP690	灰 基色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	
Fig. 28	385	精製浅鉢	C II	R 536	黑 灰色	研磨	研磨	%
	386	精製浅鉢	C II		灰 桜灰色	研磨	研磨	
	387	精製浅鉢	C II	R 738	暗 灰色	不明	不明	
	388	精製浅鉢	C II		灰 紅褐色	研磨	研磨	
	389	精製浅鉢	C III	SP690	灰灰褐色	研磨	研磨	
	390	精製浅鉢	C II	R 281	淡 棕色	研磨	研磨	
	391	精製浅鉢	C II		淡灰褐色	研磨	研磨	
	392	精製浅鉢	C II		灰灰褐色	研磨	研磨	
	393	精製浅鉢	C I		暗 灰色	研磨	研磨	
	394	精製浅鉢	C II		灰 茶色	研磨	研磨	
	395	精製浅鉢	C II	R 417	灰茶褐色	研磨	研磨	
	396	精製浅鉢	C II	R 325	淡 棕色	研磨	研磨	
	397	精製浅鉢	C II	R 13	灰 黑色	研磨	研磨	
	398	精製浅鉢	C II	R 678	灰 黑色	研磨	研磨	
	399	精製浅鉢	C II		灰茶褐色	不明	不明	器面想れる 内外面に浅く、にぶい沈糊
	400	精製浅鉢	C II	R 269	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
	401	精製浅鉢	C III	SP641	暗 桜色	研磨	丁寧なナデ	
	402	精製浅鉢	C III	SP690	黑 桜色	研磨	研磨	波状口縁
	403	精製浅鉢	C II	R 776	茶灰褐色	削り→ナデ	条痕→丁寧なナデ	波状口縁
	404	精製浅鉢	C I		灰灰褐色	研磨	研磨	波状口縁
	405	精製浅鉢	C III	SP690	淡黄白色	板ナデ?	条痕→丁寧なナデ	波状口縁
	406	精製浅鉢	C II	R 372	暗灰褐色	研磨	研磨	弱部屈曲部
	407	精製浅鉢	C III	SP690	淡 棕色	丁寧なナデ	丁寧なナデ	弱部屈曲部の可能性あり、弱部屈曲部
	408	精製浅鉢	C II	R 513	淡棕白色	研磨	研磨	弱部屈曲部
	409	精製浅鉢	C II	R 735	灰 桜色	研磨	研磨	弱部屈曲部
	410	精製深鉢	C II		茶 桜色	削り	削り	
	411	精製深鉢	C III	SP690	暗茶褐色	織文	条痕	弱部
	412	底部	C II		灰 白色	織文	ナデ	△
	413	底部	C II	SP690	淡 桜色	ナデ	ナデ	△
	414	底部	C II	SK609	淡 棕色	削り→ナデ	ナデ	△
	415	底部	C II		橙 色	削り	条痕→ナデ	△
	416	底部	C II	SP690	淡茶褐色	削り	削り	△
	417	底部	C II	SP690	淡 棕色	ナデ	ナデ	△
	418	底部	C II		灰 桜色	ナデ	ナデ	△
	419	底部	C II	R 102	淡 棕色	削り→ナデ	丁寧なナデ	△
	420	底部	C II	R 104	淡茶褐色	削り	ナデ	△
	421	底部	C II		橙 色	ナデ	不明	△
	422	底部	C I		黄 白色	削り	ナデ	△
	423	底部	C II	R 623	橙 色	削り→ナデ	ナデ	△
	424	底部	C II		黄 桜色	ナデ	ナデ	△
	425	底部	C II	R 378	暗 桜色	ナデ	ナデ	△
Fig. 29	426	土製品	C II	R 506	淡 黄色	研磨	砂粒が少なく精良な粘土	
	427	土製品	C I	R 207	橙 色	器面想れる	土偶脚部か	
	428	石鉢	C III		黑 墨石	2.4+*×1.3×0.4cm	先端部を欠く	
	429	石鉢	C	SC610	黑 墨石	2.5+*×1.4×0.3cm	先端部を欠く	
	430	石鉢	C II		黑 墨石	2.3+*×1.5×0.3cm	先端部を欠く	
	431	糸巻形石器	C II		墨青白石	3.5×1.6×0.5cm	完形	
Fig. 31	432	环壹	C II	SC610 R 12	橙 白色	目刷ナデ、荒削り	生焼け	
	433	环身	C II	SC610 R 4	灰 色	周転ナデ、荒削り	生焼け	
	434	环身	C II	SC610 R 6	淡灰白色	回転ナデ	生焼け	
	435	壹	C II	SC610 R 1	暗 桜色	回転ナデ	須恵器、底部施切り→ナデ	

博団	番号	器種	地点	出土地	色調	外面調整	内面調整	備考
Fig. 31	436	鉢	C II	SC610 R713	淡橙色	刷毛目	丸ナデ	%
	437	鉢	C II	SC610 R2,7,8	淡橙色	刷毛目、削り	削り	%
	438	甕	C II	SC610	淡橙色	刷毛目	削り	
	439	甕	C II	SC610 R 7	淡黄褐色	刷毛目	ナデ、削り	%
	440	甕	C II	SC610 R 7	淡黄褐色	刷毛目	ナデ、削り	%、底部
Fig. 36	441	本注?	C I	SB005 P 2	淡黄緑色	刮転ナデ	刮転ナデ	肩部まで薄く自然釉、% 底削り・削り、口径16.4cm、高さ7.7cm、X 系切、腹自在、口径13.1cm、高さ2.9cm
	442	青磁瓶	C I	SB005 P 1	灰綠色	刮転ナデ	刮転ナデ	
	443	环身	C I	SK006	黄白色	刮転ナデ	刮転ナデ	系切、腹自在、口径13.1cm、高さ2.9cm
	444	甕?	C I	SK006	灰白色	刮転ナデ	刮転ナデ	須底質
	445	青磁瓶	C I	SR008 P 1	淡黄緑色	刮転ナデ	刮転ナデ	底部、かき取り
	446	青磁瓶	C II	SB617 P 3	青緑色	刮転ナデ	刮転ナデ	%
	447	青磁瓶	C I	SK015	淡灰緑色	刮転ナデ	刮転ナデ	
	448	白磁	C II	SK615	青白色	刮転ナデ	刮転ナデ	口ハゲ
	449	环身	C II	SK615	淡黄褐色	刮転ナデ	刮転ナデ	系切り、腹自在
	450	上鍋	C II	SK611	暗褐色	ナデ	刷毛目	塗付着
	451	土釜	C II	SK611	黒褐色	ナデ	刷毛目	剪より下葉付着、花文除削、%
	452	土鍋	C II	SK611	暗褐色	刷毛目	刷毛目	%
Fig. 39	453	鉢	D I		灰茶褐色	捲内押型文	ナデ	塗付着
	454	鉢	D I		灰茶褐色	捲内押型文	ナデ	
	455	鉢	D I		灰茶褐色	捲内押型文	ナデ	
	456	鉢	D I		灰褐色	捲内押型文	ナデ	
	457	鉢	D I		淡褐色	捲内押型文	ナデ	
	458	鉢	D I		黄白色	捲内押型文	ナデ	
	459	鉢	D I		淡茶褐色	捲内押型文	ナデ	
	460	鉢	D I		黑褐色	捲内押型文	丁寧なナデ	
	461	鉢	D I		茶褐色	小明	小明	
	462	半精製鉢?	D I		淡灰褐色	ナデ	ナデ	
	463	粗製深鉢	D I		暗灰褐色	板ナデ	ナデ	
	464	粗製深鉢	D I		暗褐色	研磨	研磨	
	465	精製深鉢	D I		黄褐色	研磨	研磨	
	466	高杯?	D I		淡褐色	ナデ?	器面粗れる、突帯に削目	
Fig. 45	467	粗製深鉢	F 4	R 481	灰褐色	柔軟	柔軟→ナデ	外面頭部はナデ、%
	468	粗製深鉢	F 4	R 113, 80	灰白色	柔軟→ナデ	ナデ	口面脇部は削り、%
	469	粗製深鉢	F 4	R 506	灰黃褐色	削り	板ナデ	口径30cm前後
	470	粗製深鉢	F 4		灰黃白色	走ナデ(頭部)	ナデ	素ネクタイ状突起、%
	471	粗製深鉢	F 4		茶褐色	削り	丁寧なナデ	
	472	粗製深鉢	F 4	R 78	淡灰褐色	柔軟→ナデ	ナデ	外面脇部は丁寧なナデ
	473	粗製深鉢	F 4	R 124	茶褐色	ナデ→柔軟	ナデ	外延に装飾的な柔軟
	474	粗製深鉢	F 4	R 471	灰茶褐色	削り	研磨	
	475	粗製深鉢	F 4	R 42	茶褐色	板ナデ	ナデ	
	476	粗製深鉢	F 4	R 271	淡褐色	削り	ナデ	
	477	粗製深鉢	F 4	R 124	灰茶褐色	削り→柔軟	ナデ	肩部
	478	粗製深鉢	F 5		茶褐色	柔軟→ナデ	柔軟→ナデ	気泡多し
	479	粗製深鉢	F 4	R 387	淡茶褐色	ナデ	削り→ナデ	
	480	粗製深鉢	F 4		灰褐色	削り	柔軟、ナデ	
	481	粗製深鉢	F 4	R 450	灰褐色	柔軟→ナデ	丁寧なナデ	
	482	粗製深鉢	F 4		灰茶褐色	柔軟	丁寧なナデ	
	483	粗製深鉢	F 4	R 511	暗灰褐色	削り	丁寧なナデ	
	484	粗製深鉢	F 4	R 95	淡褐色	削り	柔軟→丁寧なナデ	
	485	粗製深鉢	F 4	R 154	茶褐色	削り	ナデ	
	486	粗製深鉢	F 4		淡灰褐色	削り	板ナデ	
	487	半精製深鉢?	F 4	R 43, 44	淡灰褐色	走ナデ	走ナデ	
	488	半精製深鉢?	F 4	R 59	淡灰褐色	柔軟	柔軟	
	489	半精製鉢?	F 4	R 413	灰白色	柔軟	研磨	焼き固い
	490	粗製鉢?	F 4		灰灰褐色	削り	ナデ	
	491	粗製鉢?	F 4		茶褐色	ナデ	ナデ	
	492	粗製鉢?	F 4	R 295	茶褐色	ナデ	柔軟→ナデ	
	493	粗製鉢?	F 4	R 144	淡灰褐色	柔軟	板ナデ	
Fig. 46	494	半精製鉢?	F 4	R 510	灰茶褐色	削り→ナデ	走ナデ	

博物館番号	器種	地点	出土地	色調	外面調整	内面調整	備考
Fig. 46	半精製鉢	F 4		淡黄褐色	ナデ	研磨	口唇部削り
495	半精製鉢	F 4	R 310	淡茶褐色	ナデ	ナデ	
496	半精製鉢	F 4	R 359	淡褐色	施ナデ	ナデ	
497	半精製鉢	F 4	R 418	灰茶褐色	板ナデ	削り→ナデ	
498	半精製鉢	F 4	R 468	淡黄色	ナデ	ナデ	
499	半精製鉢	F 4		黑色	研磨	研磨	
500	精製浅鉢	F 4		黑色	研磨	研磨	
501	精製浅鉢	F 4	R 373	黑色	研磨	研磨	砂粒をほとんど含まない、内面をほとんど含まない、内面の擦付量、色色原色、底状凹様
502	精製浅鉢	F 4	R 48	黑色	研磨	研磨	
503	精製鉢	F 4		孔	研磨	研磨	
504	精製浅鉢	F 4	R 73	孔	研磨	研磨	
505	精製浅鉢	F 4		孔	研磨	研磨	
506	精製浅鉢	F 4	R 415	孔	研磨	研磨	
507	精製浅鉢	F 4	R 350	孔	研磨	研磨	
508	精製浅鉢	F 4		孔	研磨	研磨	
509	精製浅鉢	F 4		孔	研磨	研磨	
510	精製浅鉢	F 4	R 410	孔	研磨	研磨	
511	精製浅鉢	F 4	R 83	孔	研磨	研磨	
512	精製浅鉢	F 4		孔	研磨	研磨	
513	精製浅鉢	F 4		孔	研磨	研磨	
514	精製浅鉢	F 4	R 219	孔	研磨	研磨	
515	精製浅鉢	F 4	R 496	孔	研磨	研磨	
516	精製浅鉢	F 4	R 93	孔	不明	不明	
517	精製浅鉢	F 4	R 128	孔	研磨	研磨	
518	精製浅鉢	F 4	R 49	孔	研磨	研磨	
519	深鉢	F 5		深茶褐色	研磨	研磨	
520	深鉢	F 4	R 448	深茶褐色	ナデ	ナデ	船元式?
521	深鉢	F 4	R 149	深茶褐色	削り→ナデ	ナデ	34
522	深鉢	F 4	R 364	深茶褐色	削り→ナデ	ナデ	34
523	深鉢	F 4	R 112	深茶褐色	ナデ	丁寧なナデ	34
524	深鉢	F 4		深茶褐色	ナデ	丁寧なナデ	34
525	深鉢	F 4		深茶褐色	ナデ	ナデ	
526	深鉢	F 5		深茶褐色	ナデ	ナデ	
Fig. 47	粗製深鉢	H		灰褐色	ナデ	黒ナデ	
527	粗製深鉢	H		灰褐色	ナデ	研磨	
528	更	H		灰褐色	研磨	ナデ	
529		H		灰茶褐色	研磨	削り	
530	須恵器高杯	H		灰茶褐色	同軸ナデ	回転ナデ	
Fig. 50	粗製深鉢	I		灰褐色	削り	概ナデ	
531	粗製深鉢	I		灰茶褐色	削り	概ナデ	
532	半精製鉢	I		灰茶褐色	施ナデ	施ナデ	34
533	鉢	I		食茶色	ナデ	ナデ	
534	土鍋	I		黑色	ナデ?	研毛目	研付帯
Fig. 52	粗製深鉢	J	SK901	暗灰褐色	条痕→ナデ	削り→ナデ	
535	粗製深鉢	J		暗灰褐色	ナデ	ナデ	
Fig. 54	鉢	J		茶褐色	浅い沈縫	ナデ	早期、口径15~16cm
536	鉢	J		茶褐色	ナデ	丁寧なナデ	細く鋭い突帯、口径17~18cm
537	鉢	J		茶褐色	ナデ	茶張→ナデ	口径17cm前後
538	鉢	J		茶褐色	ナデ	茶張→ナデ	細く鋭い突帯1条
539	鉢	J		茶褐色	ナデ	茶張→ナデ	3条の突帯、胎土精良
540	鉢	J		茶褐色	ナデ	茶張→ナデ	3条の突帯、内面に接合線
541	鉢	J		茶褐色	ナデ	茶張→ナデ	3条の突帯、胎土精良
542	鉢	J		茶褐色	ナデ	ナデ	3条の突帯、器面燃れる
543	鉢	J		茶褐色	ナデ	ナデ?	2条の突帯
544	鉢	J		茶褐色	ナデ	茶張→ナデ	1条の突帯
545	鉢	J		茶褐色	ナデ	ナデ	1条の不整形な突帯、径16cm前後
546	鉢	J		茶褐色	ナデ	茶張→ナデ	1条の突帯、胎土精良
547	鉢	J		茶褐色	ナデ	ナデ	2条の突帯
548	鉢	J		茶褐色	ナデ	茶張→ナデ	2条の突帯で削り、胎土精良
549	鉢	J		茶褐色	ナデ	ナデ	2条の突帯、径20cm前後、研付帯
550	鉢	J		茶褐色	ナデ	ナデ	2条の鋭い突帯、径16cm前後
551	鉢	J		茶褐色	ナデ	ナデ	1条の突帯
552	鉢	J		茶褐色	ナデ	茶張→丁寧なナデ	1条の鋭い突帯を指でつぶす
553	鉢	J		茶褐色	ナデ	ナデ	突帯、鋭い沈縫

博物館	番号	器種	地点	出土地	色調	外面調整	内面調整	参考
Fig. 54	554	鉢	J		暗茶褐色	ナデ	条痕	口唇部に刻目
	555	鉢	J		黄白色	ナデ	条痕	2本の文部と文文、易經を多く含む
	556	鉢	J		暗茶褐色	ナデ	条痕	煤付着
	557	鉢	J		黑色	条痕→ナデ	条痕	列点
	558	鉢	J		黄白色	ナデ	板ナデ?	浅い沈縛
	559	鉢	J		暗茶褐色	ナ文	板ナデ?	列点文、内面に板目残る
	560	鉢	J		茶褐色	ナデ	ナデ	低い突起に刻目
	561	鉢	J		茶褐色	ナデ	ナデ	滑石混入
Fig. 55	562	粗製深鉢	J		灰褐色	条痕→ナデ	条痕	口唇部に刻目
	563	粗製深鉢	J		灰褐色	削り	板ナデ	煤付着
	564	粗製深鉢	J		黄褐色	条痕	条痕→ナデ	
	565	粗製深鉢	J		灰茶褐色	削り	ナデ	
	566	粗製深鉢	J		淡茶褐色	条痕→ナデ	条痕	
	567	粗製深鉢	J		暗褐色	条痕	ナデ	
	568	粗製深鉢	J		淡褐色	条痕	ナデ	
	569	粗製深鉢	J		淡褐色	ナデ	ナデ	
	570	粗製深鉢	J		暗褐色	ナデ	ナデ	
	571	半精製鉢	J		暗茶褐色	条痕	ナデ	
	572	半精製鉢	J		暗褐色	ナデ	ナデ	
	573	鉢	J		暗褐色	不明	不明	
	574	粗製深鉢	J		淡茶褐色	研磨	ナデ	リボン状突起を付ける
	575	精製浅鉢	J		淡茶褐色	研磨	ナデ	
	576	精製浅鉢	J		淡茶褐色	研磨	ナデ	
	577	精製浅鉢	J		灰褐色	研磨	研磨	
	578	精製浅鉢	J		淡茶褐色	研磨ナデ	ナデ	微量の煤付着
	579	精製浅鉢	J		淡茶褐色	不明	不明	器面粗れる
	580	精製浅鉢	J		茶褐色	ナデ	ナデ	6条の沈縛
	581	精製深鉢?	J		淡茶褐色	ナデ	ナデ	鋸刃
	582	鉢?	J		暗茶褐色	研磨	ナデ	
	583	底部	J		淡茶褐色	ナデ	ナデ	△
	584	底部	J		淡茶褐色	条痕	ナデ	△
	585	底部	J		茶褐色	ナデ	条痕→ナデ	△
	586	底部	J		茶褐色	ナデ	ナデ	△
	587	底部	J		淡茶褐色	削り→ナデ	削り→ナデ	△
	588	底部	J		淡茶褐色	ナデ	ナデ	△
	589	鉢	J		淡茶褐色	削り	削りナデ	須臾質、△
	590	鉢	J		淡茶褐色	不明	不明	土質質、△
	591	壺鉢	J		乳白色	削毛目	削毛目	瓦質
	592	石鍋	J		淡茶褐色			
	593	石鍋	J		淡茶褐色			
Fig. 56	594	土瓶(?)	J		茶褐色	条痕		土器片の再利用品
	595	磨石	J		青白岩	9.4×6.4×3.2cm		
	596	石礫	J		黒曜石	4.2+α×2.3+α×0.5cm		先端部、脚部を欠く
	597	石礫	J		黒曜石	2.6+α×1.2+α×0.3cm		先端部、脚部を欠く
	598	石礫	J		黒曜石	2.1×1.6×0.2cm		完形
	599	石礫	J		黒曜石	2.0+α×1.3+α×0.3cm		脚部を欠く
	600	石點	J		安山岩	2.6×3.5×0.5cm		完形
	601	石點	J		安山岩	3.8×4.7×0.8cm		完形
	602	石根	J		安山岩	23.2×11.9×14.7cm		—

図 版



(1) A地点全景
(北から)



(2) C地点全景
(北から)



(1) D地点全景（北から）



(2) E地点全景（北から）



(1) F-5 地点全景 (北から)



(2) H 地点全景 (東から)



(1) I 地点全景 (北西から)



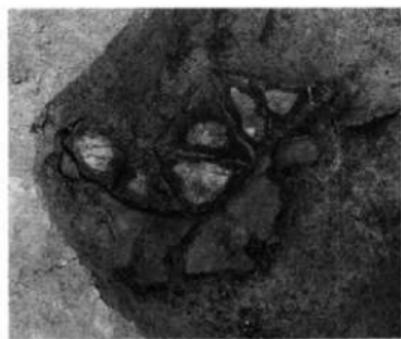
(2) J 地点全景 (西から)



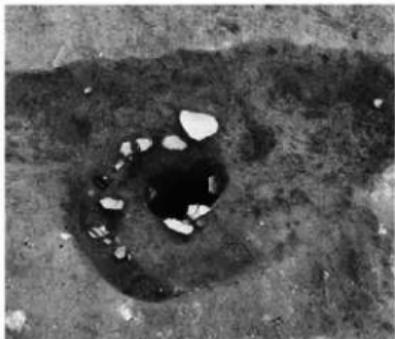
(1) SK161 (西から)



(2) SK169 (西から)



(3) SK168 (西から)



(4) SK259 (西から)



(5) SK390 (西から)



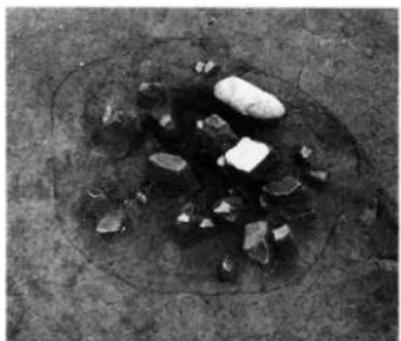
(6) SK390 (北東から)



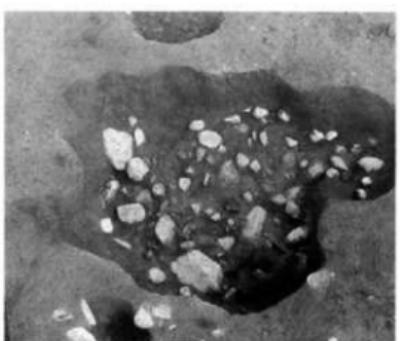
(1) SK342 (北西から)



(2) SK223 (南から)



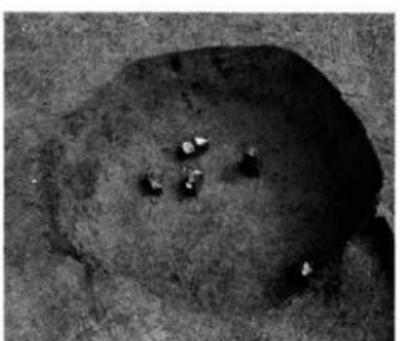
(3) SK238 (南から)



(4) SK460 (北西から)



(5) SK461 (北西から)



(6) SK482 (北西から)



(1) A-12地点第1グリント(東から)



(2) A-3地点縄文包含層



(3) SK161(西から)



(4) SK273(東から)



(5) SK326(東から)



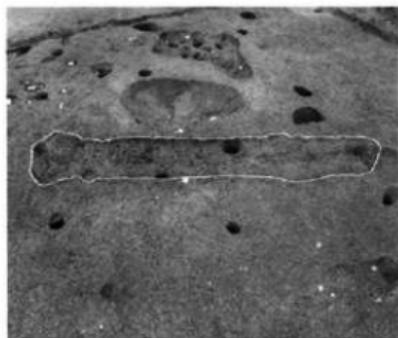
(6) SK451(西から)



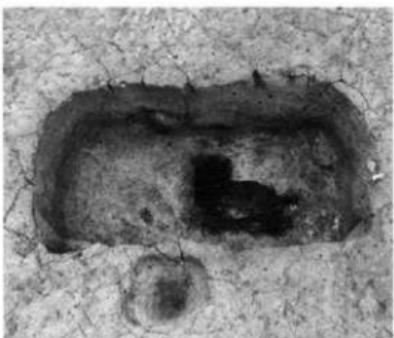
(1) SK226 (南から)



(2) SX151 (南から)



(3) SX314 (南東から)



(4) SX343 (南から)



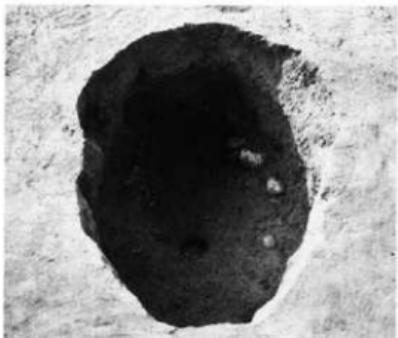
(5) B 地点縄文包含層



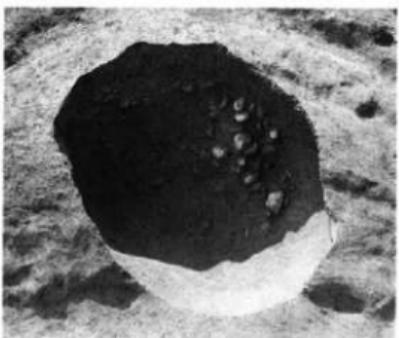
(6) SK001 (南西から)



(1) SK007 (北から)



(2) SK613 (東から)



(3) SK614 (南から)



(4) SK614土層



(5) C地点縄文包含層 (南から)



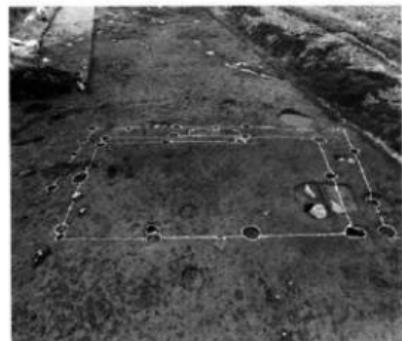
(6) SC610 (東から)



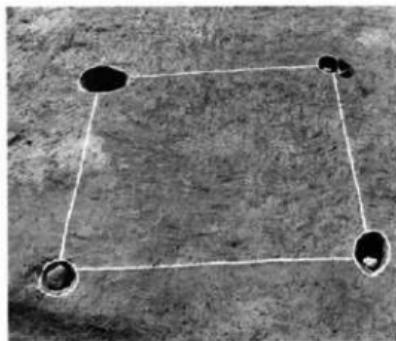
(1) C地点掘出柱遺物（北西から）



(2) SB004・005（南から）



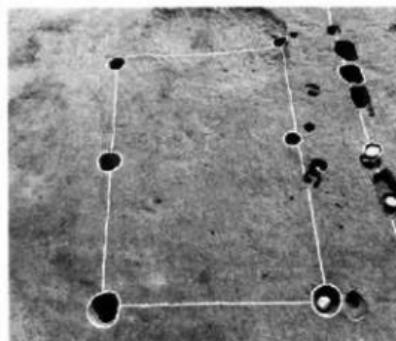
(3) SB008（南から）



(4) SB616（北から）



(5) SB617（南から）



(6) SB618（北から）



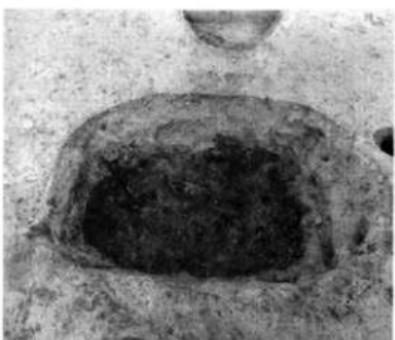
(1) SK615 (南東から)



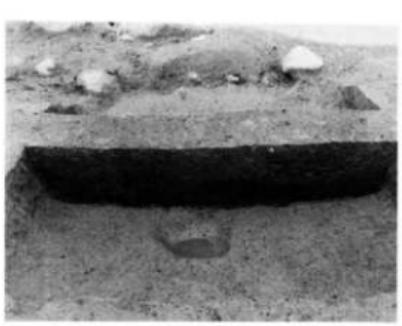
(2) SX010 (西から)



(3) SX604 (南東から)



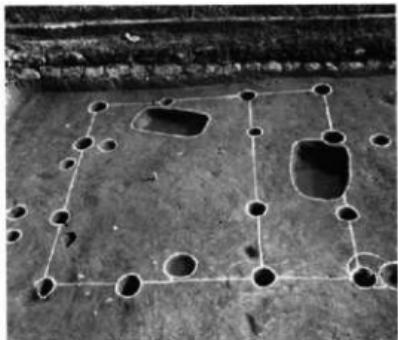
(4) SX606 (南から)



(5) SX030 (西から)



(6) F-5 地点縄文包含層



(1) SB097 (北から)



(2) SX096 (北から)



(3) SX805 (南から)



(4) SX805 東壁



(5) SX810 (東から)



(6) SK901 (西から)



26



28



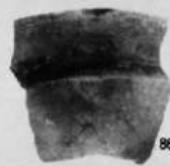
27



33



49



86

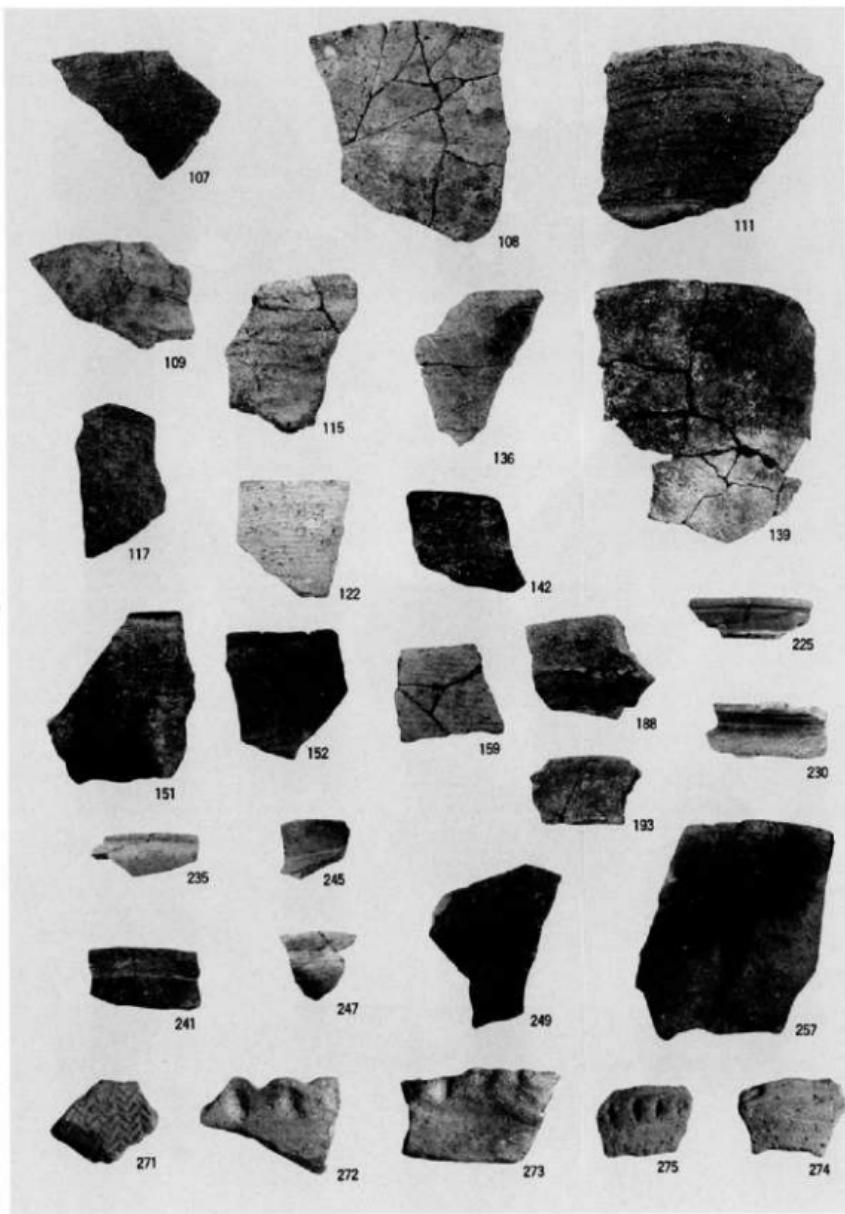


95

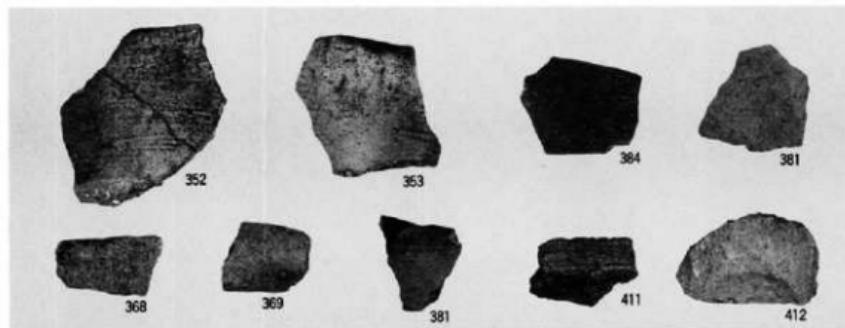


96

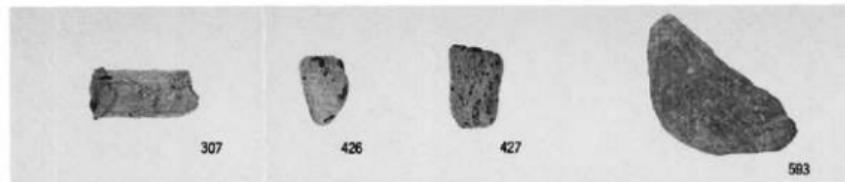
A 地点出土土器



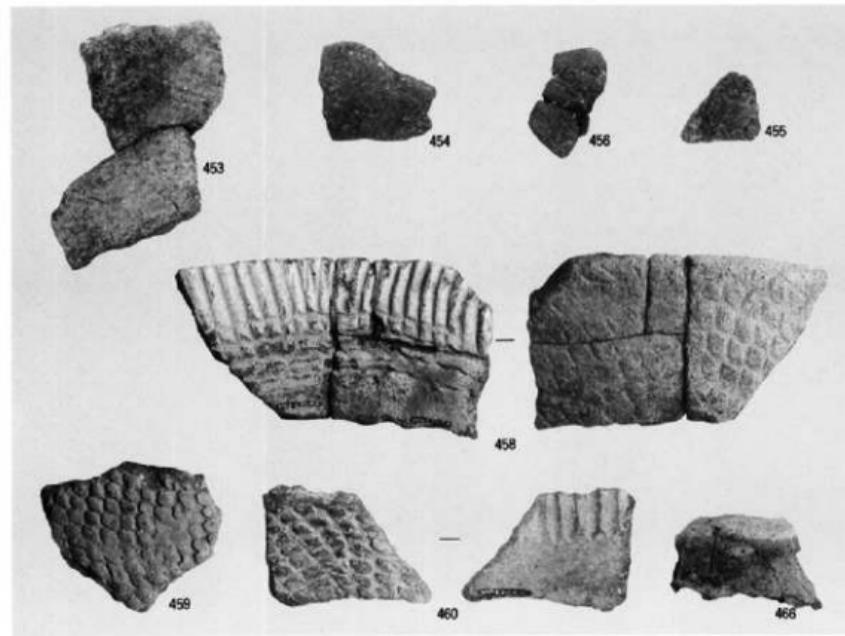
A地点出土土器



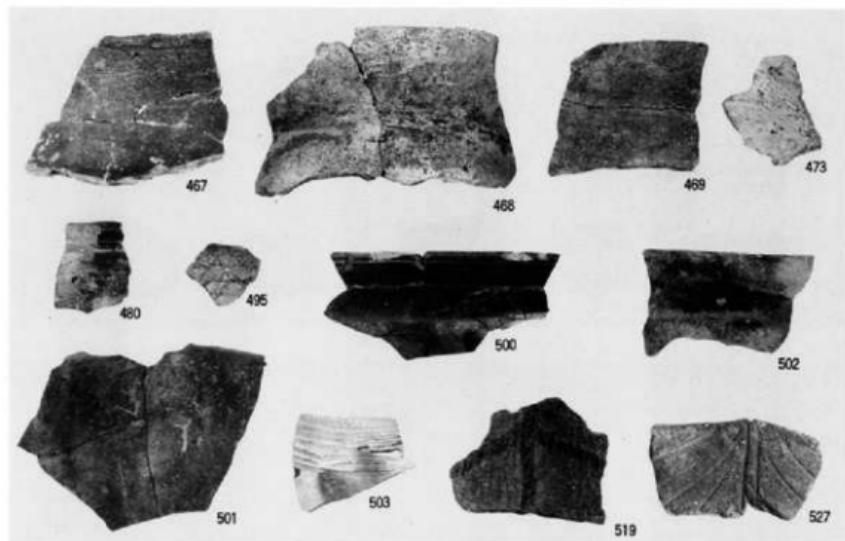
(1) C地点出土土器



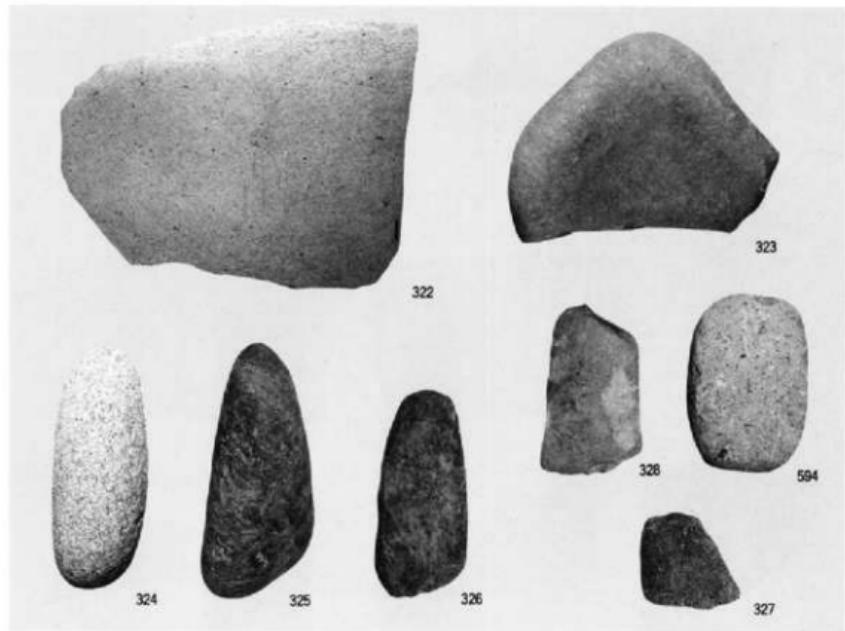
(2) 土 製 品



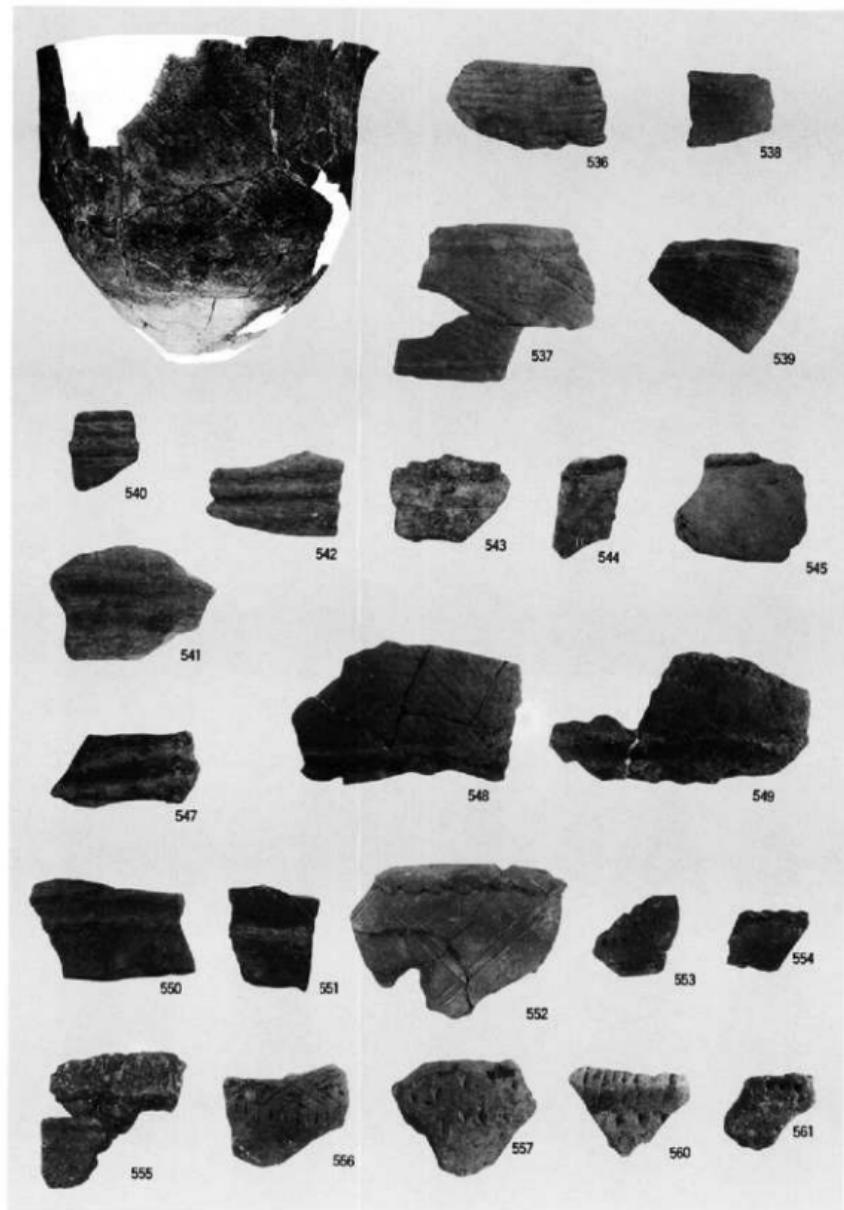
(3) D地点出土土器



(1) F + H 地点出土土器



(2) 磨制石器



J 地点出土土器



A 地点出土石器

C 地点



I 地点



D 地点



E 地点

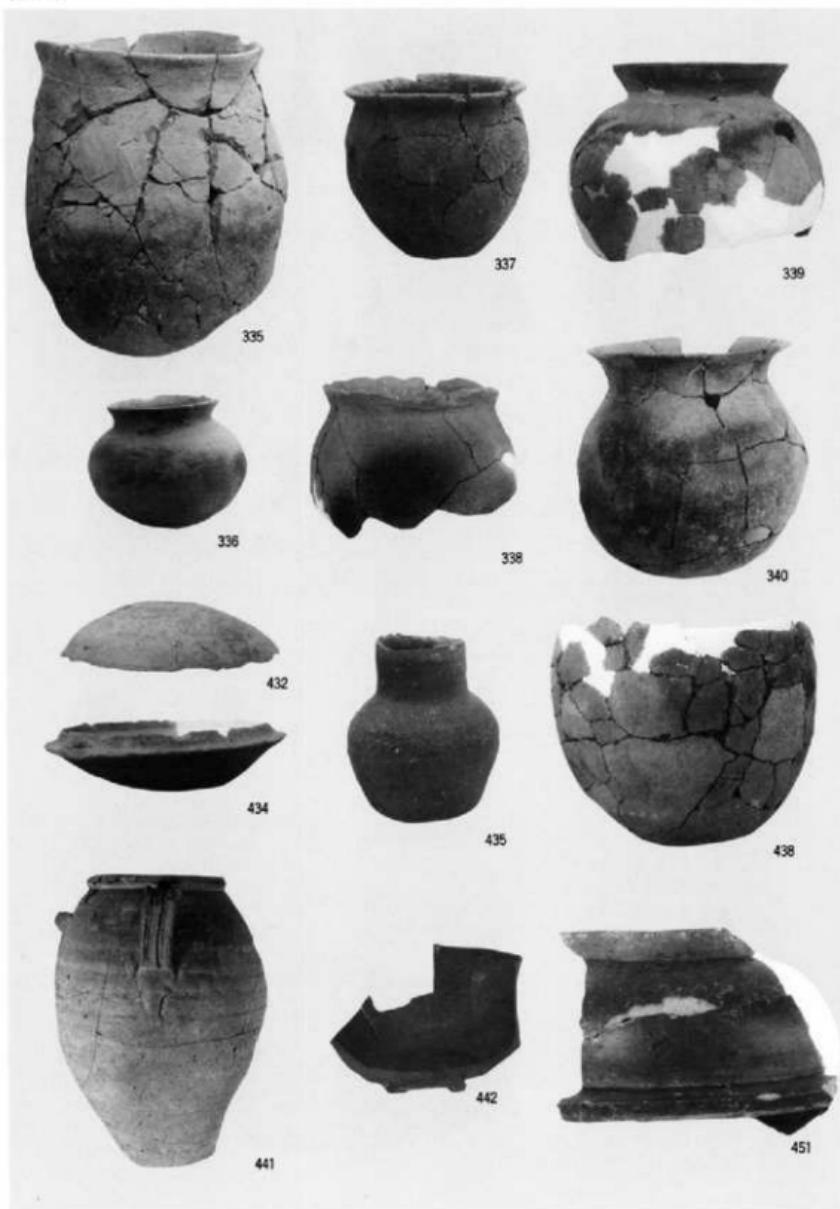


601

J 地点



602



古墳時代・中世の遺物

わき 肱 やま 山 IV

—県営圃場整備事業に伴う福山A遺跡5次調査報告—
福岡市埋蔵文化財報告書第312集

1992年（平成4年）3月15日発行

編集発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
